

あーむすりんぐ

アームスリング

arm sling

肩関節やその周辺部の疾病・外傷により、一定期間肢位固定を必要とする場合に用いる肩関節装具。肩関節の脱臼予防の他に、浮腫の軽減や患部の保護用としても用いられる。種類は簡便な三角布と、カフとひもを組み合わせて肘屈曲位か肘伸展位かで懸垂するタイプのものがあり、それぞれに利点と欠点があるため症例に適したものを工夫して製作する。上腕骨骨頭が常に肩甲骨関節窩に保持されることが重要で、装着期間中はROM訓練を併用し長期間の使用は避ける。

あくていうゝえいじんぐ

アクティブエイジング

active aging

労働市場から撤退した高齢者（病気や障害のある人を含む）であっても、家族、友人、地域社会や国家に対して、アクティブな貢献者として関わる事が可能であると捉え、高齢者を活動をしつつ年を重ねる者として位置づける。「高齢期をいかに有意義に過ごすか」という課題に対する代表的な考え方の一つで、第2回国連世界高齢化会議（2002年）の主要議題になった。

あくていびてい

アクティビティ

activity

活動と訳され、行動する、積極的に働きかけるなどの意をもつ。作業療法にとつてのアクティビティは、初期には“activities and arts”と呼ばれ、手工芸的・芸術的活動が支持的作業療法や機能的作業療法など、転換療法の手段として多く用いられてきた。現在では目的活動（purposeful activities）としてその範囲を人間の行動まで広く含め、作業療法の中心的手段として重要視されている。（→活動）

あしすていぶてくのろじー

アシスティブテクノロジー

assistive technology

障害者に対する支援技術のことをいい、日本では福祉工学やリハビリテーション工学（rehabilitation engineering）と重なる。一般的に、身体機能に制限があったり、制限によって通常の機器を使えない場合など、機能を補ったり代替機器を導入したりする必要であり、福祉用具を積極的に活用した自立生活支援が行われる。最近では、例えば会話補助装置など、コンピュータ（IT）を活用することも多い。

あすべるがーしょうこうぐん

アスペルガー症候群

Asperger syndrome

ウィーンの小児科医アスペルガーが1944年に発表した論文をもとに、ウイングが提唱した用語。DSM、ICDでは広汎性発達障害の下位分類に位置づけられる。自閉症の特徴をもつが言葉の発達はよく、会話ができるため周囲は障害に気づきにくい。「想像力が育ちにくい」「社会性が乏しい」「会話がすれ違う」という特徴があり、一方的に話す、人の気持ちを読み取れない、慣用句や冗談を理解できないなどのコミュニケーションの問題をもつ。（→高機能自閉症）

あせすめんと

アセスメント

assessment

「評価」「査定」を意味する一般用語で、保健医療福祉の領域では事前の「評価」や「調査」の意味で使われる。ケアマネジメントの過程では、今後どのようなケアが必要になるかを「査定」する目的でケアアセスメントが行われ、対象者の身のまわりのこと、生活の管理、健康管理、社会資源の利用、対人交流、社会参加の制約などを調査し、本人の希望やニーズを尊重しつつケアプランを立てる。

あそび

遊び

play

遊びは自由時間に強制されずに行なう活動で、日常生活活動や仕事とともに作業を構成する要素の一つである。マリー・ライリーは、遊びは、子どもの主な活動であり、発達の・育史的にみると、仕事に先行する準備状態であり、横断的には、成人の仕事を支えるものであると捉え、「遊び—仕事」の発達の連続性を強調した。遊びと仕事の関係を発達の的にみると、就学前児は遊びに費やす時間が圧倒的に多く、学齢児では学業中心の活動（仕事）が加わり、卒業後は仕事を中心となり、退職後は再び遊びに費やす時間が増す。成人の遊び（余暇活動）は仕事で疲れた心身をリフレッシュする役目もある。（→作業行動、人間作業モデル）

あっぱくしんちょう-ねっしょうせいはんこん

圧迫伸張-熱傷性瘢痕

compressive burn-
characteristic scar

熱傷性瘢痕は熱傷後肉芽組織の形成を経て、最終的に緻密な膠原線維や結合組織に置き換わることで、その現れ方には、赤く盛り上がる異常な瘢痕（肥厚性瘢痕）、肥厚性瘢痕が正常皮膚にも広がっていく瘢痕（ケロイド）や、さらに引きつれたもの（瘢痕拘縮）がある。これらに対し圧迫や伸張は、創への余剰の血流をブロックし、コラーゲンの産生を抑制することによって瘢痕形成を抑制する。圧は均等圧が原則であり、管状サポーターや圧迫サポーターなどを適合させる。また関節に及ぶ熱傷性瘢痕にはコラーゲンの再配列化と伸張を目的にモビライジングスプリントを適合させる。

あふおーだんす

アフォーダンス

affordance

米国の知覚心理学者ジェームズ・ギブソンによる造語で、環境が動物に対して与える「意味」のことをいう。ドン・ノーマン（1988年）はデザインの認知心理学的研究の中で、モノに備わったヒトが知覚できる「行為の可能性」という意味でアフォーダンスを用い、以降、ユーザーインタフェースやデザインの領域において使われるようになった。アフォーダンスはその「物」をどう取り扱ったらよいかについての手がかりを示してくれる。例えばノブがなく平らな金属片が付いたドアは、その金属片を押せばドアが開くことを示している。また、引き手のついたタンスは引けばよいことを示している。これらは体験に基づいており説明なしで扱える情報である。（→知覚心理学）

あんどらごじー
アンドラゴジー
andragogy

ドイツの教育者アレクサンダー・カッツが使用した言葉で、米国の教育理論家マルコム・ノウルズにより、成人教育における主要概念として発展した。子どもの教育とは異なり、成人の教育では、1) 学習への動機づけ、2) 失敗を含む学習、3) 学習へのレディネス(自身の職業や生活に直接関係するテーマに最も興味を示す)、4) 学習への方向づけ(学習中心型ではなく問題中心型である)が重要であるとする学習支援論をいう。

いくじえん
育児支援
child care support

育児は子をもつ親の役割であるが、身体的・精神的に何らかの滞りを示す子どもたちの育児は、定型発達児のように進まない。また、最近では親の役割を果たせない(未成熟な)親が存在することも指摘されている。乳幼児期は、子どもが社会人として成長発達していく上で基盤となる時期で、この時期の育児はきわめて重要となる。このため現在では、育てにくい子どもやどのように育児をしたらよいのかわからない親のために、育児支援が国の施策として重要視されている。

いこうしえん(けいかく)
移行支援(計画)
transitional support

保健医療福祉の領域では、心身に障害のある人達が、新たな生活(環境)へ移行していく際に必要となる支援を指して用いられる。例えば、障害児の療育や入院精神医療などでは、対象者の地域生活への移行が円滑にいくよう、地域生活を支援する機関や担当者と連携・協働することが必要となる。障害者自立支援法以降、障害のある人達の就労移行支援が推進され、厚生労働省では2006年に「就労移行支援のためのチェックリスト」を作成した。

いじき
維持期
maintenance phase

回復期から継続した時期であり、疾病や障害の状態が安定し、その再燃や再発や2次的な疾病や障害を予防する。「慢性期」とほぼ同じ意味で用いられることもある。対象者の社会、教育、職業などの社会的適応能力の回復・獲得・再構築を治療・指導・援助しながら、対象者にとって意味のある社会参加を促進する。最近では、「維持」という側面だけではないという考えから、その消極的なイメージから積極的に社会参加を促進できるような語句の提唱が要望されている。

いしきしょうがい
意識障害
disturbance of consciousness

脳幹網様体と視床下部が中枢といわれる、覚醒と睡眠のリズムの障害と考えられる。意識障害の種類は、「意識混濁」と「せん妄」「もうろう状態」などに分けることができ、程度としては「昏睡」「半昏睡」「昏迷」「傾眠」と「正常(清明)」の順に軽度になることを表わす。臨床場面では、簡便な従命に対して応答(開眼・発語・運動)の組み合わせから評価するJCSやGCSが使われることが多い。(→JCS,GCS)

いしけってい

意思決定 decision making

欲望や欲動を自己統制する、すなわち抑制したり促進したりする際に、問題解決に役立つ対処索を選択することである。心理的な要因に重点を置き、情報量、時間、身体的・精神的状態、患者の特性、医療者との関係などがある。

いししつもんし

意志質問紙 volitional questionnaire (VQ)

人間作業モデルに基づく評価法で、認知や言語の能力に制限のある人やその集団を対象に、行動の観察から意志の構成要素を評価するために用いられる。「好奇心を示す」、「行為/課題を始める」、「新しいことをやろうとする」など、計16の評価項目について、自発的(4)、参加(3)、躊躇(2)、受身的(1)、該当なし(N/A)の5段階評価を行う。

いちじてきそんしょう・にじてきそんしょう

一次的損傷・二次的損傷 primary damage・ secondary damage

広義には、身体の構造や機能的に何らかの外力によって直接的に傷害を受けることを一次的損傷、その時間的に後に起こるまたは誘引される傷害を二次的損傷と言う。特に、頭部に衝撃を受けて、直接的に脳が傷害されることを一次的損傷、一次的損傷の後に続いて起こる脳の傷害を二次的損傷ということが多い。

いどうしゅだん

移動手段 moving way transfer

ある場所から異なる場所に移る際に用いるさまざまな方法で、その人自身が行う「歩行」「四つ這い(ハイハイ)」などだけではなく、代償手段としての「車椅子自走」などや他者による「車椅子介助」、交通機関などの「タクシー」「バス」「電車」など広義も含まれる。

いりょうかんさつほう

医療観察法 * *

2005年に施行された「心神喪失者等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律」の略称。刑事責任を問えない心神喪失又は心神耗弱の状態で重大な他害行為を行った人を対象に、手厚い専門的な入院・外来医療を提供し、社会復帰を促進することを目的としている。これにより日本で本格的な司法精神医療が開始された。(→司法精神医療)

いんがいさぎょう

院外作業 * *

生活療法の全盛期(1960～1970年代)に、精神科病院に入院中の患者が社会復帰に向けた準備や練習として院外の事業所に通い、労働する形態の作業を指した用語で、「外勤作業」と同義に用いられていた。現在では外勤作業はほとんど行われておらず、院外作業という用語もこのような意味では用いられなくなった。

いんしでんと

インシデント incident

「出来事」の意味で、「偶発的に」起こった内容を指す。医療現場では、重大事故(アクシデント)に至る可能性がある出来事が発生し、かつ実際には事故に至らなかった潜在的事例で、「ヒヤリハット事例」と呼ばれることもある。アクシデントに至るにはいくつかのインシデントがエラーチェーン(誤りの連鎖)として存在する。インシデントを未然に防いだ事例と捉え、分析・改善し、共有していくことが重要となる。(→リスクマネジメント)

いんせいしょうじょう

陰性症状

negative symptom

「陽性症状」とともに、主に統合失調症の症状を表す用語として用いられる。陰性症状には感情の平板化、無感情、意欲・自発性の欠如、快感消失、会話の貧困化、寡動、動作緩慢、社会的引きこもり、常同的思考、抽象的思考の困難などが含まれ、高次の精神活動が低下した状態を指す。

うえありんぐおふげんしょう

ウェアリングオフ現象

wearing off phenomenon

パーキンソン病治療薬であるL-Dパ製剤を長期間飲用すると、その効果が次第に短くなり、次の服用時間前には症状が再び現れてしまうことがある。ウェアリングオフとは、L-Dパ製剤が効いて症状がよくなった状態(ON時間)と、効果が弱まり症状が再び現れた状態(OFF時間)を、1日のうちに何度も繰り返してしまう現象である。

うちだくれべりんせいしんけんさ

内田クレペリン精神検査

uchida kraepelin test

エミール・クレペリンが発見した作業曲線をもとに1920～1930年代にかけて内田勇三郎が開発した作業検査である。1桁の足し算を休憩(5分)をはさみ前半15分、後半15分を行なわせ、1分毎の回答数から作業曲線を描く。典型的に出現する曲線を「定型曲線」とし、定型曲線との比較や曲線のパターンから性格や適性を診断する。

うんどう

運動

movement

物理学では、物体が時間の経過とともに空間内の位置を変える現象、哲学では広く変化一般のことを指す。人間の身体運動でみると、筋収縮によって起こる身体部位の位置変化をいい、生理学的なメカニズムの要因から反射運動と随意運動とに大別される自動運動と外力により位置変化を起こす他動運動、その両方で起こる自動介助運動などに区分することができる。

うんどうがくしゅう

運動学習

motor leaning

「訓練や練習を通じて獲得される運動行動の変化であり、状況に適した感覚・運動系の協調性が向上していく過程である」とされる運動学習(motor learning)は、行動面からは運動技能の獲得とみなされる(中村)。「学習」という観点からは、「記憶」や「学習する頻度」「学習の強度」などが大きく関与する。

うんどうきかく

運動企画

motor planning

ある目的をもった運動を遂行するために準備される方法や手順。単に関節を動かす、筋を収縮させると言うだけではなく、感覚のフィードバックや身体認知など様々な情報を統合して、順序やタイミングなどを的確に合致させることができる。

うんどうきのう

運動機能

motor function

運動を起こすために構成される関節の動き、筋の収縮、反射・反応などの直接的に関与する他、広義には心肺機能など間接的に作用するICFの「心身機能・身体構造」を含む。

うんどうしつちよう
運動失調
ataxia

四肢・体幹の随意運動の調節が困難で、運動を正確に効率よく行うことができない状態。小脳性運動失調、脊髓(後索)性運動失調、前庭迷路性運動失調、大脳性運動失調がある。

うんどうしつちよう
運動失調
motor ataxia

随意運動遂行時に働く筋群の間に協調性が失われ、そのため運動が円滑に進まず1つ1つの動きの要素に分解された状態になることをいう。大別して、協調運動障害(四肢運動失調)と平衡障害(体幹運動失調)がある。また、障害部位による分類では、小脳性、前庭迷路性、脊髓性(脊髓後索性、脊髓小脳路性)などに分けられる。

うんどうせいぎよ
運動制御
motor control

環境や目的に適した運動を行うために、中枢神経系(CNS)を中心にして行われる調節や方向づけのメカニズムを統制(統合)または指揮する能力。

うんどうはったつ
運動発達
motor development

個体の成熟と学習の相互作用により運動機能が分化、多様化、複雑化していく過程であり、年齢増加に伴って小児(生後から)の運動行動が変化していく過程をいう。出生後は中枢神経系の成熟と重力、外界の刺激などにより、さらに高次の反射反応と、より複雑な随意運動へと変化する。粗大運動(gross motor)に関するものと上肢機能、眼球運動、口腔機能など微細運動(fine motor)に関するものに分けられるが、精神心理的な発達過程や環境要素に大きく影響される。

うんどうふかしけん
運動負荷試験
exercise tolerance test

運動負荷することにより疾患の診断と重症度判定、病態生理、心肺機能と運動耐容能、治療効果の判定や予後の予測などの目的のために用いられる検査。検査にはトレッドミルや自転車エルゴメーター、段の昇り降りを繰り返すマスター2段階試験などが用いられる。

うんどうまひ
運動麻痺
motor paralysis

上位運動ニューロン(大脳から脳幹、脊髓へ運動指令を伝える神経)および下位運動ニューロン(脳幹、脊髓から筋へ運動指令を伝える神経)の異常によって筋の収縮が困難または不能になり随意運動が障害された状態。麻痺の程度から不全麻痺または完全麻痺に、麻痺の部位から単麻痺、片麻痺、対麻痺、四肢麻痺などに区分される。

うんどうゆうはつでんい(えむいーびー)
運動誘発電位(MEP)
motor evoked potential

磁気刺激装置(コイル状に形成された伝導線に電流を通過させる)で生じ磁場変動によって、脳内に発生した渦電流で大脳皮質運動野を刺激(経頭蓋磁気刺激)し、その結果として生じた筋収縮を筋電図で捉えたものの。

うんどうりよう
運動量
momentum

負荷された運動強度と心拍数の間の直線的関係を利用して測定する。運動負荷試験で得られた最大酸素摂取量から決定する方法や自覚的運動強度による評価や活動レベルからの推定を行う。

えいじんぐ/かれい

エイジング/加齢

aging

広義には誕生してから発育・成熟し、やがて衰退して死に至るまでの全過程であり、加齢の意味で使われる。狭義には、成熟期以後の衰退し死に至るまでの過程をいう。一般には個体の老化をいう。

えきかりんぱせつかくせい

腋窩リンパ節郭清

axilla lymphadenectomy

腋窩リンパ節郭清は「腋窩リンパ節」を「郭清」することである。腋窩リンパ節は腋窩～鎖骨下静脈に沿ったリンパ節で小胸筋との位置関係によりレベルⅠ、Ⅱ、Ⅲに分類される。「郭清」とは、リンパ節を含む腋窩の脂肪組織全体を一塊にして切除することである。

えくささいず

エクササイズ

exercise

身体活動の量を表す単位。METsの運動強度に運動および活動時間を乗じた値である。厚生労働省が健康維持、生活習慣病予防のために策定した運動量の尺度である。1週間に必要な運動量の目標値は、23エクササイズ以上、そのうち4エクササイズ以上の活発な運動を行うように指導している。運動目標が2つの変数(運動強度と時間)の積のため、身体能力に応じて運動強度と時間を増減して行うことができる。

えねるぎーたいしゃ

エネルギー代謝

energy metabolism

三大栄養素である炭水化物、脂質、タンパク質が食物から体内に取り入れられ、酸素などの働きで消化酵素と結合し、運動エネルギーや体温維持などのエネルギー源として利用される仕組み。エネルギー代謝は大きく分けて、基礎代謝、労作代謝(活動代謝)、特異動的作用の3つである。

えねるぎーほぞん

エネルギー保存

energy saving

関節リウマチや全身性エリテマトーデスなどの全身性疾患の患者においては、身体的・精神的エネルギーが浪費されやすく、過労になりがちとなる。このような心身のエネルギーの浪費を防ぐために、十分な休息をとることと、仕事(作業)の簡易化・合理化を図ることをエネルギー保存と呼んでいる。

えびでんす

エビデンス

evidence

作業療法の臨床実践の根拠となる事実、証拠。作業療法士の経験に基づくエビデンス、臨床疫学研究に基づくエビデンスなどがあり、対象者の利益のためにも、エビデンスに基づく臨床実践が重要である。

えんげぞうえいけんさ

嚥下造影検査

videofluorographic examination

えんしんせいとうきんちようせいしゅうしゅく

遠心性等緊張性収縮

eccentric isotonic contraction

造影剤や造影剤入り食材を摂食させ、X線を用いて透視下で、造影剤の流れ(誤嚥の有無)や5つの期に関与する各機能状態を検査する。

筋の収縮状態で、筋収縮により発生した力が与えられた負荷よりも小さい場合に起こる筋収縮をいう。代表的な例として最大筋収縮を行なった際に、それ以上の負荷を加えると筋が収縮を起こしながら伸びる状態があげられる。例えば、台上の水の入ったバケツを床に下ろす時の上腕二頭筋の筋収縮がこれにあたる。このように日常生活の諸動作では、重力方向との関係で身体の種々の部分で遠心性収縮が起きている。(→求心性収縮)

えんぱわめんと
エンパワメント
empowerment

1970年代の米国の黒人解放(公民権)運動を起源とし、その後、女性解放、途上国支援、障害者支援、高齢者支援などへ広がりを見せている。本来は「偏見を負わされた人々が価値のある社会的役割を遂行するように、技術を身につけるよう援助される過程」と定義されるが、現在では「病気や障害によって力が弱まっている人々が、本来の力を発揮できるように支援する作業」と読み替えることができる。

おうようてきのうりよく
応用的能力
applied ability

基本的な心身機能を日常生活や社会生活に生かすための能力。日常生活や社会生活を行うことそれ自体が応用的能力を発揮する機会やリハビリテーションになっていることが多い。食事、適度な運動、遊び、社会との交流などを通して能力が引き出されていく。

おおしまのぶんるい
大島の分類
classification of ohshima

大島一良氏(小児科医)が作成した重症心身障害児の障害程度の区分法である。縦軸に知能指数、横軸に運動機能を置き、それぞれ5段階に区分し、25区分の組み合わせにより障害程度を分類した。重症心身障害児は、大島の分類で区分1〜4に該当する。(→重症心身障害)

おべらんとじょうけんづけ
オペラント条件づけ
operant conditioning

「学習」の一つで、道具的条件づけ、スキナー型条件づけ、オペラント学習とも呼ばれる。行動に対して報酬が与えられると、その行動がより増す現象をいう。日常生活のいたるところで偶発的に生じ、古くから子どものしつけや動物の訓練などにも用いられている。現在では、行動療法や生活技能訓練、嗜癖や不適応行動の改善、障害児の療育プログラムなど、心理社会的リハビリテーションなど、幅広い領域で応用されている。(→SST、認知療法・認知行動療法)

おんざじょぶ とれーにんぐ
オンザジョブトレーニング
on the job training

もともとは企業内で行われる職業指導手法の一つで、職場の上司や先輩が部下や後輩に対して、具体的な仕事を通じて、仕事に必要な知識・技術・技能・態度などを意図的・計画的・継続的に指導し、習得させる活動をいう。(→ジョブコーチ)

かいこうしょうがい
開口障害
trismus

下顎の開口運動が阻害され開口がが不十分な状態。顎関節症をはじめとする関節病変や顔の皮膚硬化を伴う全身性強皮症による皮膚による制限などによりみられ、ADLでは食事や口腔ケアに支障をきたすことがある。

かいごふたん

介護負担

burden of care

高齢者や障害をもつ人の生活全般(単なる日常生活活動のみならず通院・通所訓練への参加・訪問スタッフから指導された体操・QOLに関する行為なども含む)の世話を行なう介護者が受ける負担であり、肉体的、精神的、経済的な形で現われる。本人と介護者の関係、家族や親戚の人間関係や協力度、介護援助者の有無、介護方法、介護環境(住宅状況や福祉用具の利用状況など)、社会資源、公的サービスの利用などにより「負担」の様相は変わってくる可能性がある。

かいごほけんせいど

介護保険制度

long-term care insurance

保険料を徴収して高齢者に介護サービスを提供する社会保険制度。第1号被保険者は65歳以上、第2号被保険者は40歳以上65歳未満の者とされ、いずれも要介護状態になると給付(居宅介護サービスと施設介護サービス)を受けることができる。社会の高齢化に対応し、2000年4月1日から施行された社会保険制度であり、要介護状態または要支援状態にある人が介護サービスを利用する際、その費用(給付費)を被保険者から徴収する保険料だけでなく、国・都道府県・市町村が負担するという特徴をもつ。

かいごろうじんほけんしせつ

介護老人保健施設

geriatric health services facility

介護を必要とする高齢者の自立を支援し、家庭復帰を目指すために、医師による医学的管理の下で看護・介護といったケアやOTやPT等によるリハビリテーション、栄養管理・食事・入浴などの日常サービスまで併せて提供する施設。利用者ひとりひとりの状態や目標に合わせてケアサービスを、医師をはじめとする専門スタッフが提供する。利用対象者は介護保険法による被保険者で、病状が安定していて入院治療の必要がない要介護度1～5の方で、リハビリテーションを必要とされる方である。

がいしょうごけんぼう

外傷後健忘

post traumatic amnesia
(PTA)

主に閉鎖性頭部外傷によって生じ、日常的な出来事や新しい情報を覚えられない病態、意識障害の期間を含めて受傷後の記憶を想起できない期間のことをいう。外傷後健忘は外傷の重症度と密接な関係がある。

がいてきしょうへき/ないてきしょうへき

外的障壁/内的障壁

external barreir
/internal barreir

精神疾患から回復した人たちが回復を妨害したり遅らせたりする要因を大別したもの。外的障壁は、住居や雇用における偏見などのような社会的な障壁を指す。内的障壁は周囲の人たちが抱く精神障害に対する思いなどから形成された、自分に対する否定的な見方を指す。

がいてきよういん

外的要因

external factor

行動の原因帰属理論や動機づけ理論に関連する社会心理学の用語で、人を取り囲む環境要因を指すが、対概念である内的要因とともに幅広い領域で用いられている。例えば、人が何かの課題を達成しようとするときには、内的要因である個人の能力や努力などに加え、外的要因としての人的・物的環境や社会文化的環境、政治経済をはじめ生活を支える社会システムなどが影響を及ぼすことになる。(→内的要因、達成動機づけ)

がいはいつてきどうきづけ

外発的動機づけ

extrinsic motivation

義務、賞罰、強制など、外的な報酬の獲得や罰からの回避を源泉とした動機づけである。内発的動機づけに基づいた行動は行動そのものが目的となるが、外発的動機づけに基づいた行動は何らかの目的を達成するための行動である、強制された外発的動機づけでは自発性が発揮されにくい。(→動機づけ、内発的動機づけ、達成動機づけ、社会的動機づけ)

かいふくかてい

回復過程

recovery process

どのような疾患でも回復には一定の順序性が認められる。統合失調症では、概ね状態像の変化より、急性期→消耗期(休息期)→回復期(寛解期)が区別され、回復後の安定した状態を援助の視点から維持期と呼ぶこともある。脳血管障害では、急性期→回復期→維持期と呼ぶことが多い。(→急性期、回復期)

かいふくき

回復期

recovery stage

/convalescence stage

急性期の症状が落ち着き、疾病・外傷による障害に対して積極的にリハビリテーションを行う時期で、主に回復期リハビリテーション病棟で行われる。集中的な機能障害の回復と、身辺処理や日常生活の再編を図ることにより社会参加の準備を行う時期にあたる。(→回復過程)

かいふくきはびりてーしょんびょうどう

回復期リハビリテーション病棟

convalescence

rehabilitation ward

脳血管疾患又は大腿骨頸部骨折等の患者様に対して、ADLの能力向上による寝たきり(廃用症候群)の防止と家庭復帰を目的として医師、作業療法士、理学療法士、看護師等が共同でリハビリテーションプログラムを作成し、これに基づくリハビリテーションを集中的に行うための病棟。2000年度に「回復期リハビリテーション病棟入院料」が制定されたことにより設けられている。

かいりせいしょうがい

解離性障害

dissociative disorder

心的外傷への自己防衛として、過去の記憶、同一性と直接的感覚の意識、そして身体運動のコントロールの間の正常な統合が一部、または完全に失われた状態。解離性健忘、離人症性障害、解離性同一性障害などが含まれる。

がくしゅうしょうがい(えるでいー)

学習障害(LD) learning disabilities

基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を示すもの。その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接的な原因となるものではない。

がくしゅうせいむりよくかん

学習性無力感 learned helplessness

心理学者のMartin Seligmanが1967年に提唱した心理的理論で、長期間回避不能な嫌悪刺激にさらされ続けると、その状況から「何をしても意味がない」ということを学習し、環境に対する積極的・自発的な働きかけが起らなくなる、成功体験を考えることが困難になる、情緒的混乱が生じる、といった症状が出現すること。

がくしゅうれでいねす

学習レディネス learning readiness

学習するために、身体的・知的情緒、社会的成熟の水準やすでに習得している知識や技能、興味態度などにかかわる必要な条件が用意され、準備されている状態である。

かごしんけいしはい

過誤神経支配 reinnervation

再生軸索が本来の標的器官ではなく、違った筋線維や部位の感覚受容器、または別の感覚受容器に神経再支配が生じること。標的器官の筋の独立した収縮が行えず、ほかに神経再支配された周辺筋や拮抗筋の同時収縮が起きたり、感覚の局在に混乱をきたす。軸索断裂に神経内膜損傷が伴う場合(Sunderland分類のⅢ度損傷)以上の損傷で生じることが多い。

かじえんじょ

家事援助 housekeeping support

家事動作において、主たる担い手が障害をもつなどして遂行困難となった場合、残存能力や自助具の活用により自立をはかる一方で、訪問介護や家事代行サービスなどの社会資源を利用することでそれらの活動の援助を受けることができる。

かしそうぐ

下肢装具 leg orthosis ㊦w extremity

下肢の関節の安静、固定、変形の矯正、体重支持、立位保持、歩行機能の改善などを目的とする装具全般の総称。装着部位により、股関節装具、長下肢装具、膝装具、短下肢装具、足装具などがある。

かじどうさ

家事動作 housekeeping activities

家庭生活を維持するための衣食住などの生活手段に関する活動や、育児・教育・介護などの家族に対する活動、家庭の経済や行事など家庭経営に関する諸活動の総称。

がすこうかん

ガス交換 gas exchange

ガス交換とは、呼吸器官により体内に酸素を取り入れ、体内から二酸化炭素を排出すること。気道に吸い込まれた空気が肺胞に達し、酸素を血液中に与え、二酸化炭素を血液中からとる働きが外呼吸である。さらに、血液中にとけ込んだ酸素が血管から組織液中にうつり細胞に達し、逆に細胞から組織液中に出た二酸化炭素が血管内の血液にとけ込む働きが内呼吸である。

かぞくしえん

家族支援 family support

高齢者や障害者をかかえた家族は、日常的な介護や生活援助に費やす労力が大きく、家族自体が疲弊・消耗していたり、社会的に孤立していたりすることもある。このような場合に、家族が本来の生活を取り戻し、自尊心や自信を回復できるよう第三者が支援することをいう。具体的には専門家による家族面接・心理教育のほか、家族会活動や制度・資源の情報提供などが挙げられる。（→心理教育）

かぞくしすてむろん

家族システム論 family system theory

個々の安定や変化、成長、行動や症状などを、本人をとりまく直接の環境として家族との相互作用の中で構造的・全体的にとらえようとする理論。もしくは、個々の家族関係を、社会生活に結びつけるための土台としてとらえようとする理論。

かぞくりきどう

家族力動 family dynamics

家族は人間生活の基本的な単位であり、そこでは夫婦、親子、兄弟などの複数の人間関係が存在しながらも、ひとつの統合的な集団として生活を営んでいる。家族力動とは、その成員間に生じる親密さや情緒性、役割葛藤など、多様な力関係やその変動の働きなどをいう。（→集団力動）

かだいけんきゅうじよせいせいど

課題研究助成制度 special research grants program

（社）日本作業療法士協会が2005年に開始した制度で、作業療法の効果・成果を実証する研究に研究費を助成するものである。作業療法の学術的基盤を強化し、実践技術の資質向上を促進することを目的としている。

かだいぶんせき

課題分析 task analysis

作業課題を手順に沿って小さな行動単位に分解し並べること。作業療法ではこれによって対象者の遂行機能を評価したり、状態像に応じて練習する課題を段階づけたり、手順書を示すことで学習を促進したりすることができる。（→活動分析、作業分析）

かたるしす

カタルシス catharsis

精神的緊張を解放する適当な方法が閉ざされ、感情がたまってくと病理的な現象を呈することがある。カタルシスとは、そういった病理的症状のもととなっている抑圧され意識されない感情を呼び起こし、ことばに出して表現することで情緒的コンプレックスや苦痛・悩みを解放することをいう。

かつどうとさんか

活動と参加

activity and participation

「心身機能と身体構造」とともに、国際生活機能分類 (ICF) の中心概念である「生活機能」を構成する要素である。活動 (activity) は個人による課題や行為の遂行のことであり、生活機能の個人的な側面をいう。また、参加 (participation) は生活・人生場面への関わりであり、生活機能の社会的な側面をいう。(→国際生活機能分類)

かつどうでんい

活動電位

myoelectric potential

筋線維が興奮する際に発生する活動電位のこと。筋電位の測定の最小単位は、一つの筋細胞だが、表面筋電位は筋線維上で起こる活動電位の総和を測定する。

かつどうぶんせき

活動分析

activity analysis

活動とは、「はたらき動くこと」、「いきいきと行動すること」をいうが、作業療法で活動分析という場合には、人がある活動を遂行するのに必要となる心身の機能や、道具、材料、時間、指導・援助方法などを明らかにし、その活動に含まれる治療的要素を分析することを指す。なお、作業療法では作業 (分析) と活動 (分析) とが類似する用語として使用されやすい。(→課題分析, 作業分析)

かなださぎょうすいこうそくてい

カナダ作業遂行測定

canadian occupational
performance measure
(COPM)

カナダ作業遂行モデルを背景に作成された評価法で、クライアントにとって意味のある作業を探し、作業療法を行った後でその作業に対するクライアントの気持ち (満足度) の変化を測定するのに用いる。始めに面接を通して本人にとっての重要な (意味のある) 作業をいくつか挙げて、それらの作業について10段階の重要度評定を行い優先順位を決める。次いでこれから取り組む作業を決め、その遂行度と満足度をそれぞれ10段階でスコア化してもらう。ある程度の期間作業療法を行い、再び遂行度と満足度を10段階で評価し、作業についてのクライアントの主観的な捉え方の変化を確認する。

かめんようがんぼう

仮面様顔貌

mask like face

顔面の表情筋や皮膚の制限により、能面のように表情が乏しくみえる状態。パーキンソン症候群の筋緊張の異常 (固縮) や全身性強皮症の皮膚硬化などで特徴的にみられる。

かようせいそんしょう

過用性損傷

overuse damage

運動量、訓練量が大きすぎたり、体の一部のみを過剰に使用するために筋力、体力などが返って低下したり、関節障害、神経損傷などをおこすこと。筋ジストロフィー症の場合では患者の筋力以上の力を過用することで筋線維の損傷が起こる危険性があるため、日常生活の中でも運動の過用を避ける必要がある。

かりぎしゅ

仮義手

temporary upper
extremity prosthesis

未成熟または切断術直後の断端に、本義手と同様の機能を有した義手を装着し、義手の適応評価ならびに操作訓練を行なうため作製される義手のことをいう。断端の長さに応じてJIS規格化された各ユニットのパーツを選択し、組み合わせ作製したものを使う場合もある。仮義手訓練では、能動義手の操作を経験し、義手の名称や部品を含めて義手を正しく理解することによって、義手の受け入れを円滑に行なえる効果がある。また、断端の成熟を促し訓練期間の短縮にもつながる。そして本人の社会的環境や希望に応じた評価・訓練が具体的に実施できるので、適切な本義手の処方にも有効である。
(→断端機能訓練, 義手装着訓練)

かんかく

感覚

sensory

感覚とは最も単純な要素的刺激を主観的に認める働きをいい、その強さや失の区別、時間的経過などを認める働きは知覚(perception)と呼ばれる。感覚は特殊感覚、体性感覚、内臓感覚に分けられる。特殊感覚は脳神経が関与する感覚で、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、平衡感覚が含まれる。体性感覚は脊髄神経皮枝と脳神経の一部が関与する表在(性)感覚(触・圧覚、温度感覚、皮膚痛覚)と、脊髄神経筋枝と脳神経の一部が関与する深部感覚(運動感覚、位置感覚、深部痛覚)に分けられる。内臓感覚は自律神経が関与する感覚で、内臓感覚と臓器感覚がある。(→知覚)

かんかくうんどう

感覚運動

sensory motor

胎児期に出現する感覚刺激に対する反応としての運動。生後1年間は、重力をはじめとして様々な感覚刺激の種類、強さ、方向が豊富に inputs, 統合され反射運動から基本的な随意運動の獲得(歩行、手の把握機能、視運動機能、口腔機能)へと移行する。それらの運動機能により環境を探索できるようになり、さらに豊富な感覚刺激が inputs され運動機能は洗練されていく。

かんかくきおく

感覚記憶

sensory memory

感覚器が受容した情報を加工せず、ごく短時間保存する記憶。外部からの刺激の視覚的・音響的・音声的特徴を抽出して、最大1～2秒程度のごく短時間保持される意識されない記憶。注意を当てることで短期記憶に移行する。(→短期記憶)

かんかくちょうせいしょうがい

感覚調整障害

sensory adjustment disorder

感覚統合障害のひとつで、外部からの刺激に対して、過剰に低反応ないし過反応を示す状態を指す。この状態は主として、不安や恐怖などの情動反応、多動や乱暴などの行動反応、不注意などの注意機能、および覚醒レベルの障害として現れ、様々な日常生活(洗髪や爪切り、服の好み等)や癖(爪かみ、偏食等)、自律神経系の不安定さ(睡眠障害等)、対人関係等に影響を及ぼす。

かんかくとうごうきのう

感覚統合機能

sensory integration function

環境に適応するために複数の感覚情報を処理し適応反応を生成する働き。この機能障害は、環境に対する適切な行動、運動、学習などを妨げる。

かんかくとうごうりょうほう

感覚統合療法

sensory integration therapy

Ayresは人間の行動と脳機能について神経生物学的な観点から研究を行なった。感覚統合療法は、学習障害児に対する感覚刺激の入力コントロールをはかりながら適応的反応を導く治療法である。適応的反応とは、人がある環境の要求にうまく反応していく適切な行為である。この治療は、主として全身を使っての目的的活動を通して、前庭覚、触覚、固有受容覚の入力調整を行なうことによって脳が感覚を処理し構成していく能力を高めることを目的としている。したがって治療の方法で最も重要なことは、環境への適応的反応と感覚入力処理との関係がうまく適合した状態を作り出すことである。机上での活動や言葉の訓練、読みの練習、あるいは特定の知覚や運動技能の訓練は初期段階では含まれない。基本的な原則は、①子どもの内的要求を重視し、身体を通して自ら環境に働きかける状態を作り出す、②子どもの適応反応レベルを分析し、次の発達へのチャレンジ、成功感と自信を培う快的な刺激と環境を準備する、③感覚刺激の種類と強さの選択は脳への影響を考慮し、子どもの反応を観察し決定していく、④個体発達過程の原則に基づいた身体活動を考える、である。

かんかくはくだつ(しゃだん)

感覚剥奪(遮断)

sensory deprivation

外部からの感覚刺激を極度に減少または遮断すること。ヒトが長時間感覚剥奪の状態に置かれると、心身の機能は低下し、精神機能の異常を来すことが知られている。

かんきょういんし

環境因子

environmental factors

国際生活機能分類(ICF)の構成要素で、「人々が生活し、人生を送っている物的な環境や社会的環境、人々の社会的な態度による環境を構成する因子のことである」と定義される。特徴は個人の外部にあって、その人の社会の一員としての実行状況、課題遂行能力、心身機能・構造に対して肯定的または否定的な影響を及ぼしうることである。(→国際生活機能分類)

かんきようせいぎょそうち

環境制御装置

environmental control
systems(ECS)

障害のある人が自分の力で身の回りのテレビ、電話、照明器具、空調設備などの機器をコントロールできない場合、その人の機能に応じたスイッチなどを用いて操作ができるように工夫された一連の装置。最近では意思伝達装置と併用できる機器も利用される。

かんきようせいび

環境整備

environmental considerations

対象者の生活機能の改善を目指した援助のうち、対象者を取り巻く環境因子に働きかけて、必要となる人的・物理的・社会的な支援サービスを整えることをいう。(→環境因子、環境調整)

かんきょうちようせい

環境調整

environmental coordination

対象者を取り巻く人的・物理的・社会的な環境の調整を行うことをいう。例えば、小児期の発達支援では、養育・教育環境による影響は大きく、家族や医療・保健・福祉の療育関係機関と、学校との連携および調整が重要となる。(→環境因子、環境整備)

かんじょう

感情

affect

心的機能の基本をなし、快-不快を基調とし、物事や人に対して直接体験される気持ちのことで、喜び、悲しみ、怒り、諦め、驚き、嫌悪、恐怖などがある。DSM-III-Rでは、「主観的に体験された感情状態」を emotion とし、その「表現である観察可能な行動のパターン」を affect と、また、「全般的かつ持続的なemotion」を mood と定義している。(→情動)

かんじょうげんご

感情言語

emotional language

感情を表す言語。状況により、比喻表現が用いられることが多い(うれしい、悲しい、天にも昇る、どきどきする、他)。自分や他者の心的状況と外的状況を認知的に評価して、感情にラベルづける役割をもつ。

かんじょうしょうがい

感情障害

affective disorder

気分障害(mood disorder)と同義。成人期以降に発病し、感情と欲動の障害を主徴とする原因不明の精神障害である。有病率は3～5%前後といわれ、現代では最も多い精神疾患である。男女比は、おおよそ1対2の割合で女性の方が多い。単極型(非双極性)と双極型に大別されるが、単極型のほとんどはうつ病である。

かんしんたいせい

間身体性

intercorporality

子どもが転んだのを見て、思わず「痛いッ」と自分が転んだかのように顔をしかめることがある。人の身体感覚(五官によって感受される五感)の生理的な共通性に基づいて感受される一体感で、二者間の身体性を通した関係性を表すメルロ・ポンティ(Merleau-Ponty)の概念。

かんせつかどういき
関節可動域
range of motion

関節可動域, 関節可動域測定, 関節可動域障害に分けて記載

・* 関節可動域: 関節の運動範囲(ある一定方向に身体の体節が動かさる弓状の距離)を関節可動域といい, これには自分で動かさる範囲(自動的関節可動域)と他人によって動かされる範囲(他動的関節可動域)がある. 自動的関節可動域は筋力の影響を受ける.

* 関節可動域測定: 関節可動域の測定は, 多くは角度計を用いて行なうが, 距離で測る方法もある. この他, 運動をしているところの写真, 描写やトレースを用いる方法がある. 関節可動域測定時の開始肢位は一部の部位を除き解剖学的肢位を基本とする. 関節可動域は肢位によって異なるので, 測定時の肢位に注意する. 関節可動域表示ならびに測定法は日本整形外科学会と日本リハビリテーション医学会で決められた方法に従う. 関節可動域の測定値は基本肢位を 0° として表示する. 他動的関節可動域はそのまま記載し, 自動的関節可動域は()内に記入する.

* 関節可動域障害骨折, 脱臼などの関節構造上の変化, 軟部組織の炎症・癒着・癒痕化・組織化, 痙攣・固縮などの筋緊張亢進, 疼痛による筋攣縮などで可動域は制限される. 一方, 筋緊張低下, 軟部組織の伸展性が大きい時には可動域は広がる.

かんせつほご
関節保護
joint protection

炎症性リウマチ性疾患における関節の破壊や痛みは, 関節可動域(ROM)の制限, 関節のアライメントのずれなどの機能障害をもたらし, 日常生活活動(ADL)能力・作業能力の障害にもつながっていく. 関節保護(joint protection)とは, 炎症を軽減し, 関節構造を保護し, 身体的資源(エネルギー)を保存するために, 日常生活の諸動作や作業活動を, 関節への負荷が最小限になるような方法(工夫)で行なうことをいう. 関節保護の適応範囲は上・下肢の諸関節だけでなく, 顎・脊柱も含まれる. 関節保護の一般的な原則と注意点は以下の通りである. ①痛みが生じる肢位・動作を避ける, ②活動と休息とのバランスに配慮する, ③筋力とROMの維持をはかる, ④努力を強いられる動作は避ける, ⑤変形を生じる肢位を避ける, ⑥強く大きい関節を使う, ⑦解剖学的・機能的に最も安定した関節を使う, ⑧同一肢位を長時間にわたって持続することを避ける, ⑨過剰な負荷が加わった時にすぐ中止できないような作業はあらかじめ避ける, ⑩関節保護に役立つ自助具やスプリントを使う. これらの原則を患者個々の病気, 機能, 能力, 生活様式に合わせ, 日常での応用について具体的に指導・訓練することが重要となる. (→エネルギー保存)

かんせつもーめんと
関節モーメント
joint moment

関節軸を中心に体節に力を加え関節運動が生じた際に関節軸に発生する回転の作用。力を加えた点から関節軸までの距離と加えた力の積で表される。

かんねんうんどうしっこう
観念運動失行
ideomotor apraxia

英語ではideomotor apraxia, 独語ではideo-kinetische Apraxieである。Liepmannが最初に定義した時、観念運動失行は「目的にかなうように身体を動かすことの不能」、すなわち運動のアイデアと運動表出を結合することの不能を意味していた。今日における最も一般的な定義は、「客体を使わずに行なう日常的動作に関して、それを命ぜられた場合に表出を誤ったり不能に陥ったりすること」である。この他に、「身体の空間構成の不能」を強調する説 (Morla'as, Heilman), 「言語命令に対する動作表出の不能」を強調する説 (Geschwind) などがある。

かんねんしっこう
観念失行
ideational apraxia

英語ではideational apraxia, 独語ではideatorische Apraxieである。Liepmannが最初に定義した時、観念失行は「動作のアイデア(企図)を作り出すことの不能」を意味していた。複数物品を扱う課題において患者が動作の順序を誤るのはこのためであるとされた。このため観念失行は通常「系列動作において動作の順序を誤ること」とされている。しかしこれ以外に「物品使用の不能、すなわち“使用の失認”」を強調する説 (Morla'as, De Renzi), 「動作の模倣ができるのにふりができないこと」をその現われだとする説 (Heilman) などがある。

かんりうんえい
管理運営
management

病院や会社などの組織で、業務を円滑に進めるために行われる。一般には、人事管理、財務管理、物品管理、情報管理、業務管理などが含まれる。作業療法の臨床業務では、とりわけ法令の遵守、診療録の管理、個人情報管理、安全管理、機能評価(自己点検)、利用者による満足度調査などが重要となる。

かんわいりょう
緩和医療(緩和ケア)
palliative care

世界保健機構(WHO)の定義(2002年)では、緩和ケアは、「生命を脅かす疾患による問題に直面する患者とその家族に対して、痛みやその他の身体的、心理的、社会的な問題、さらにスピリチュアル(宗教的、哲学的なこころや精神、霊魂、魂)な問題を早期に発見し、的確な評価と処置を行うことによって、苦痛を予防したり和らげることで、QOL(人生の質、生活の質)を改善する行為である」とされている。

きおくしょうがい
記憶障害
memory disorder

記憶を思い出せない想起障害と、新たなことを覚えられない記銘障害をあわせた記憶に関する障害の総称である。記銘障害と想起障害の他に、記憶障害の分類は、1) 原因により器質性健忘と心因健忘、2) 持続により一過性健忘と持続性健忘、3) 病変部位により皮質性健忘と軸性健忘、などがある。(→外傷性健忘)

ききかいにゆう
危機介入
crisis intervention

一般的には医療処置の水準を意味し、病状の悪化(再発・再燃)や生活の破綻など、危機状態にある人に対して、迅速で効果的な対応を行うことで危機を回避させ、その後の適応をはかる援助を指す。以前は応急入院や緊急措置入院などの医療的処置が中心であったが、最近では地域で生活する精神障害をもつ人たちへの再発防止の取り組みが重要視されている。医療・保健・福祉スタッフのチームアプローチと他機関との連携が基本となる。精神科の救急や緊急対応の介入による再発防止を意味する。

ききてこうかん
利き手交換
transfer of dominance

左右の手は、それぞれ機能が少し異なっており、一方の手は他方の手より器用さ(巧緻性)を必要とする動作において優れており、これを利き手という。多くは右手が利き手である。この能力は生得的であり、発達の過程で器用さを必要とする動作は利き手によって学習されていく。病気や外傷により、利き手の運動能力や感覚が障害され器用さが損なわれることにより、利き手が行なってきた動作を、もう一方の手に担わせることを利き手交換という。特に利き手のみに担われてきた箸や刃物の使用、書字などが利き手交換の対象になる。

ききょどうさ
起居動作
bed and transfer activities

臥位から座位あるいは立位に至る一連の動作を起居動作といい、他の日常生活活動(ADL)を遂行するうえで基本となる。この動作が遂行不可能な場合には、それに続く大部分のADLが困難になりうる危険性を含みもつ重要な基本動作である。そしてこの動作の身体的機能評価(眼球、頭・頸部、肩甲帯、上肢、体幹、骨盤帯、下肢)に基づく十分な動作分析が、その後のADL訓練に大きな影響を及ぼす。

ぎし
義肢
prosthesis

外傷や病気で切断した四肢や、先天性欠損による発生不全の奇形で、生まれつきない四肢を補完するためにつける人工の装具である。上肢の切断に対しては義手、下肢の切断に対しては義足という。JISの定義は「切断によって四肢の一部を欠損した場合に元の手足の形態又は機能を復元するために装着、使用する人工の手足」である。

ぎしゅそうちやくんれん
義手装着訓練
prosthetic training

義手を上手に使いこなすための訓練で、義手を使つての基本動作訓練、握り-離し訓練、両手操作訓練、応用動作訓練、職業訓練、初期および最終義手評価等を行う。

きせいいかんわ
規制緩和
deregulation

ある産業や事業に対する政府の規制を縮小することを指し、自由主義経済を広げる方策として先進国でも途上国でも重要な課題になっている。市場競争を促進し経済活性化のために採用されるが、導入による弊害として、市場が一部企業による独占・寡占などの状態に陥り、それが不当に高い価格や低い生産性、技術革新の停滞などを招く危険もあり、電気、ガス、水道、公的福祉などについては、セーフティーネットの構築が必要とされている。

きそたいしゃ
基礎代謝
basal metabolism

ヒトが生命を維持するために必要な最低限のエネルギー量である。成人男性で約1,500kcal、女性で約1,200kcalを1日に消費し、なかでも筋骨格系は基礎代謝全体の40%を占め、体表面積や除脂肪に応じた体温維持のためにエネルギーが消費される。

きのうかいふくくんれん
機能回復訓練
recovery training

機能回復を目指した訓練プログラムである。狭義では、機能障害 (impairments) に対する回復訓練を意味し、心身機能 (body functions) レベルへのアプローチをさしている。例えば、手指機能の回復を目指して、道具を用いた手指の巧緻動作訓練を実施する場合などがこれに相当する。広義でこの語を使用する場合、生活機能の回復などもその目的に含まれるため、ADLや対人交流技能訓練なども該当する。

きのうさいけんじゅつ
機能再建術
functional reconstructive surgery

機能再建術は、手術によって、損傷等によって損失した身体機能を再建することである。作業療法で重要になってくるのは、麻痺筋に代わって作動できる近傍の筋を移し替えて機能回復を図る場合である。たとえば、三角筋麻痺に対するBateman法では、僧帽筋を遊離して肩峰の付着部を上腕骨近位部に移行することにより、上肢挙上を可能とする。

きのうしょうがい
機能障害
impairments

著しい変異や喪失などといった、心身機能または身体構造上の問題。ICIDHモデルでは機能障害から一方向的に能力低下や社会的不利が起きるという誤解が生じやすかったが、ICFモデルでは、独立因子だと考えられている。ハンセン病で外観を損じて、能力の制限がない場合は、機能障害が能力や実行状況上の問題を引き起こさない例である。

きのうしょうがいすけーる(えーあいえず)

機能障害スケール(AIS)

american spinal injury
association impairment
scale (AIS)

ASIAの評価基準の中で、機能障害の重症度を分類したもの。Frankel分類を、完全損傷の定義や不全損傷の筋力による区分が明確になるように改変している。
A＝完全:S4～S5の知覚・運動ともに完全麻痺。B＝不全:S4～S5を含む神経学的レベルより下位に知覚機能のみ残存。C＝不全:神経学的レベルより下位に運動機能は残存しているが、主要筋群の半分以上が筋力3未満。D＝不全:神経学的レベルより下位に運動機能は残存しており、主要筋群の少なくとも半分以上が筋力3以上。E＝正常:運動・知覚ともに正常。

きのうだいしょう

機能代償

compensation

機能代償とは、人間の体のある機能が何らかの理由で損なわれたとき、残りの組織等が変化して、損なわれた機能を代償することである。一例として、脳梗塞の後に、反対側の脳の神経回路のつながりかえがおこり、失われた機能を肩代わりする場合がある。

作業療法の文脈では、①福祉用具の適応・改良、自助具の作製、用具の改良、②代償動作、代替法の指導、③課題の調整などの方略で作業遂行を可能にする場合が含まれる場合がある。

きのうてきさぎようりょうほう

機能的作業療法

functional OT

機能障害に対する作業療法を「機能的作業療法」と呼んでいる。また、「ファンクショナルOT」と呼ぶこともある。その内容としては、関節可動域の維持・拡大、筋力の維持・増強、運動麻痺の回復、運動の協調性・巧緻性の向上、体力・持久力の維持・増大、感覚の維持・向上などを目的とする作業療法が含まれる。すなわち、障害の原因となっている身体の機能そのものの回復を目指すもので、使われる方法には、各種の手工芸、つかみ・はなし・リーチなどの上肢基本訓練、徒手のアプローチなどが含まれる。しかしこの「機能的作業療法」という言葉は、わが国特有の呼び名であって、英語にはこれを直訳した場合のfunctional occupational therapyという言葉は見あたらず、英語でfunctional ○○という時には、日常生活活動を意味することが多い。

きのうてきしい

機能的肢位

functional position

関節が固定されたときに日常生活に支障の少ない肢位。肩関節は外転位60～80度、肘関節は屈曲位90度、前腕回内外中間位、股関節は屈曲位15～30度、外転位0～10度、外旋位0～10度、膝関節は屈曲位10～20度、足関節は底屈位5～10度である。

手指の機能的肢位は、手関節が約30度背屈、橈尺屈中間位、母指は掌側外転・対立位、第2～5指はMP約35度屈曲、IP関節約20度屈曲で軟式ボールを握ったようなポジション。

きのうてきそうぐ
機能的装具
functional orthosis

装具は、装着することによって、手足の機能を保持・改善するものと、安静や矯正を目的として装着部分の機能が失われるものとに分類される(機能的分類)。一般的には、前者を機能的装具という。

ただし最近では、装具によって、失われた機能の代償ではなく、積極的に麻痺の改善を目指す試みがなされている。それが、機能的装具療法と呼ばれているため、そこで使われる装具を意味する場合がある。また、単に機能的肢位を保持する装具を機能的装具という人もいて多少混乱がある。

きのうてきばらんすしひょう(えふびーえす)
機能的バランス指標(FBS)
functional balance scale
(FBS)

機能的バランス指標という、一般的にはBerg Balance Scale(以下、BBS)を指す。これは、Bergらによって1989年に報告された14項目からなる総合的なバランス能力評価バッテリーである。評価は各項目ともに0～4点の5段階であり、満点は56点となる。

具体的な項目は、1.立ち上がり、2.立位保持(2分間)、3.座位保持、4.腰掛け、5.トランスファー、6.立位保持(閉眼)、7.立位保持(両足そろえ)、8.リーチ動作、9.床のものを拾う、10.左右の振り回り、11.方向転換、12.踏み台昇降、13.タンデム立位、14.片足立ち、である。

きのうひょうか
機能評価
functional assessment
(evaluation)

狭義では機能障害(impairments)を明らかにするための評価。運動機能評価、精神機能評価、認知機能評価、感覚機能評価、呼吸機能評価、循環機能評価といったように、機能の前に何がつくかによって各種に分類される。例えばROM、MMTは運動機能評価に含まれる。

しかし広義では、生活機能評価やFAM(functional assessment measure)、病院機能評価という言葉の存在から、活動・参加レベルや環境因子の評価も含むと考えられる。

きほんてきかんじょう
基本的感情
basic emotions

Paul Ekmanは1960～1970年代にかけてパプアニューギニアの部族民などを調査し基本的な感情のリストを作った。つまり、怒り、嫌悪、恐れ、幸福感、悲しみ、驚きである。これらは20の異なる文化圏からのデータ分析により万国共通の感情を表す表情であるといわれている。

1990年代になってEkmanは自身の基本的感情のリストを拡張し、楽しさ、軽蔑、知足感、困惑、興奮、罪悪感、功績に基づく自負心、安心、満足感、喜び、恥を追加した。

きほんてきしんらい
基本的信頼
basic trust

エリクソン(E,H Erikson)によって提唱された心理社会的発達段階の8つの課題のうち、最初の段階の発達課題である。生後すぐの養育者との関係で、養育者の一貫した対応により生まれる。乳児が肯定的な像をもつことができれば、そのことが人に対する基本的な信頼感を形成し、自分への信頼と様々な能力への信頼を形成するといわれている。また、それが得られないと他人や自分を信用できなくなり、基本的不信に陥る。

ぎゃくたい
虐待
abuse

虐待とは自分の保護下にある者(ヒト、動物等)に対し、長期間にわたって暴力を振るう、世話をしない、いやがらせや無視をするなどの行為を行うことをいう。児童虐待は、親または親に代わる保護者等からの、身体的虐待・性的虐待・ネグレクト・心理的虐待の4つに大別される。最近では、高齢者虐待も社会的問題になっている。夫婦や恋人などの関係にある者の一方が他方に虐待行為をした場合、ドメスティック・バイオレンス(Domestic Violence, DV)という。

ぎゃくてんい
逆転移
counter transference

フロイト(S Freud)は、治療の場面で治療者が患者に対して抱く転移を逆転移と呼んだ。逆転移には治療側が患者に向ける種々の感情的な態度や心理的反応が含まれる。当時は逆転移を生じない治療者の中立性が重視されたが、現在では、患者側の病理によって引き起こされる逆転移を治療的に活用する考え方がとられる。

きやりあはったつ
キャリア発達
career development

キャリアとは人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割のことをいう。D.Superのキャリア発達概念では、就業期の職業選択を生涯にわたる発達過程の一部であると考え、人は生涯を通してその時期にふさわしい適応能力を形成していく。人はその適応能力を基盤に、社会における自己の役割を果たすことを通して、「自分と働くこと」との関係づけやキャリア観を形成していくとされる。

きゅうせいき
急性期
acute phase

発症して間もない症状の比較的激しい時期を指し、一般的に処置・投薬・手術などが行われる。医療においては、おおよそ14日間以内が急性期の目安とされる。これに続く亜急性期は、病状がなお不安定ではあるものの、集中的な医療を提供することで、患者の状態改善を図ることが期待される時期で、早期リハビリテーションの開始時期となる。(→回復過程、回復期)

きゅうまひしょうじょう
球麻痺症状
bulbar palsy

延髄の病変で、舌咽神経・迷走神経・舌下神経の運動核、またはそれ以下の脳神経線維の両側性の障害により、嚥下困難、構音障害、咀嚼障害を生じる。咽頭反射が減弱・消失しやすい一方で、軟口蓋反射はかなり後期まで保たれているとされる。

筋萎縮性側索硬化症の進行性球麻痺では、舌の萎縮や構語・嚥下障害が段階的に起こり、コミュニケーションや食事などの能力障害の原因となる。

きょうか
強化
reinforcement

心理学の用語で条件反応をより発現しやすくすること。古典的条件づけにおける強化とは、条件刺激と無条件刺激を対呈示することである。一方、オペラント条件づけにおける強化とは、それを与える、あるいは取り去ることにより行動の自発頻度が上がる刺激をさす。

きょうちょうせい
協調性
coordination

随意的な運動を円滑に行なうために、多くの筋が調和を保って働くことをいう。筋が協調的に働くには、表在および深部感覚、筋の収縮力(運動力)、小脳や錐体外路系などからなる調整機構の3つの要素が関連し、関与する筋群が正しい順序、正確なタイミングで適切な量の収縮により行なわれる運動を協調運動という。

きょうどうさぎょうしょ
共同作業所
community workshop

近年、小規模作業所と呼ばれることが多い。障害のある人達(成人)の働く場・集う場・参加の場として1960年代より家族や支援者の「草の根運動」によって広まり、2006年には全国に約6,000カ所を数えている。法定外の事業所で、国・都道府県の補助金も少ないため運営は困窮したが、障害のある人達の地域生活を支える最前線として大きな役割を担ってきた。障害者自立支援法(2006年)により、2012年3月までに法定施設(生活介護、就労支援事業所、地域活動支援センター)への移行が進められている。しかし事業所にとっては、法人格(NPO)の取得、定員を満たせない、事務量の増加、補助金が少ない、応益負担の問題など、多数の課題を残している。全国組織に「きょうされん」(旧称:共同作業所全国連絡会)がある。

きょうはくせいしょうがい
強迫性障害
obsessive-compulsive disorder (OCD)

強迫行為を主症状とする神経症性障害のひとつである。本人の意志とは無関係に不快感や不安感が生じる強迫観念と、その強迫観念を打ち消すための行為が、不合理で効果がないとわかっているにもかかわらず、やめると不安や不快感が起きる。

きょうはくてきけいこう
強迫的傾向
obsessive attitude

たとえば、食物やカロリーなどへの強いとらわれ、徹底した摂食制限や痩せへの追求、痩せるために徹底的に運動に励むなどの過活動性がみられることから、予定や時間通りに行動しないと気が済まない性格的傾向を強迫的傾向という。(→強迫性障害)

きょうみ
興味
interest

人がある対象や行いに魅力や価値を感じ、それに向かって集中的な構えをとり、自発的な行動をするときに伴う情緒的緊張をいう。興味は意志や意欲、行動につながることから、障害をもつ人達のリハビリテーション活動では極めて重要で、作業療法では J.Matsutsuyu の作成したNPI興味チェックリストが翻訳され、広く用いられている。

きょうゆうたいけん

共有体験

sharing experience

他者と場と時間を共有し、同一の環境で作業活動と一緒に行うことで経験される、身体・生理・心理・社会的な様々な体験をいう。身体・生理的な機能・構造の共通性により、相互に類似した体験をしやすく、共通の感情をもちやすい。

きょくしよせいそんしょう・びまんせいそんしょう

局所性損傷・びまん性損傷

focal injuries

/diffuse axonal injury

局所性損傷は脳の局所に生じるもので、その部位と臨床症状は概ね一致する。しかし、びまん性損傷では損傷部位がはっきりしないことが多いため、病態把握が困難な場合がある。

きょじゃくこうれいしゃ

虚弱高齢者

frail elderly

健康で自立した高齢者と要介護高齢者との間に位置する一群の高齢者のこと。基本的な日常生活動作について、必ずしも介助が必要な状態ではないが、一人で行うには困難が生じている。適切な支援がない場合には、将来的に要介護状態へ移行する恐れがある。

きりつせいていけつあつ

起立性低血圧

orthostatic hypotension

臥位から起立させることにより、収縮期血圧が20mmHg以下に低下することをいう。循環血液量の減少、もしくは他の全身的な代謝性疾患による神経障害などによって起こる起立性低血圧を特発性起立性低血圧と呼ぶ。

きんいしゆく

筋萎縮

muscle atrophy

筋の太さは筋線維の太さからなっていて通常の筋活動によって維持されているが、麻痺、病臥などで長期間筋肉を使わなかったり、老齢による影響などによって太さが減じる。

きんきんちょう

筋緊張

muscle tone

筋の物理的・科学的性質からくる弾性と、刺激に対する反応などによって筋肉が持っている緊張。筋緊張は安静時筋緊張、姿勢・体位性筋緊張、運動時筋緊張の3つに大別される。

きんじきゆうりよく

筋持久力

muscle strength endurance

長時間筋の活動を持続できること。この筋持久力には、ある一定の力を持続的に発揮できる静的筋持久力と、ある一定の力を一定のテンポで反復して発揮する動的筋持久力とがある。

きんでんず

筋電図

electromyogram ; EMG

筋活動に際して筋線維が発生する電位変化を導出し、記録した電位変化の連続図である。神経インパルスが神経線維末端に達すると、神経筋接合部で分泌されたアセチルコリンが筋の終板膜部で化学的に受容され、膜電位の変化となり、この変化が一定以上になると筋線維膜にスパイク電位が発生する。この電位変化の記録が筋電図である。

きんりよく

筋力

muscle strength

筋力は随意的に筋を収縮させた際に現れる力を言う。出力される力は筋の横断面積に比例し、また生理的な筋長や収縮速度によって筋出力が異なる。筋出力は収縮による求心性収縮と伸張による遠心性収縮で力を発生する。一般的に筋力評価は求心性収縮で行い、ダイナモメータなどの機器で測定する定量的筋力と、徒手的に測定する定性的筋力に分類することができる。

きんりよくていか

筋力低下

muscle strength weakness

筋力は随意的な筋収縮により生じ、意図的な運動を出現させる力源となり、動作遂行時に筋緊張が変化する際の筋収縮によって引き起こされる力である。筋力低下には瞬発力と持久力の低下があり、その原因には神経損傷、筋病変、加齢、廃用性筋萎縮(固定性、廃用性)によるものがある。

くりていかるパス

クリティカルパス

critical path

もともとは生産工程やプロジェクトを管理する手法で、開始から終了までの時間的流れを指していたが、医療・福祉分野にも応用され、検査・治療・リハビリテーション・退院などの計画を明示し、在院日数の短縮、診療計画、チーム連携、患者への情報提供などの目的で使用されている。クリニカルパス、ケアマップと呼ばれることもある。

くりにかるリーズにんぐ

クリニカルリーズニング

clinical reasoning

臨床推論と訳されるが、臨床ではそのままクリニカルリーズニングと呼ぶことも多い。作業療法におけるクリニカルリーズニングとは、作業療法士が特定の対象者と接する臨床場面において、作業療法士の判断や行動を導く思考であり、その道筋である。

くるまいす

車椅子

wheelchair

身体機能障害により歩行困難となった者の移動に使われる福祉用具。日本では道路交通法により、車両ではなく歩行者として扱われている。種類としては駆動の力源や利用目的等により普通型、片手駆動型、チルト型・リクライニング型、スポーツ型(競技用)、介助用車いす、および電動車いすが挙げられる。

けあまねじめんと

ケアマネジメント

care management

介護保険や医療サービスとそれを必要とする人のニーズをつなぐ手法のこと。以前はケースマネジメントと呼ばれていたが、対象者を中心にケアをマネジメントするという考えから、日本では2000年に導入された介護保険制度で厚生省(当時)が「ケアマネジメント」の用語を採用し、その従事者をケアマネジャー(介護支援専門員)と呼ぶようになった。1) ニーズの確認、2) アセスメント、3) 支援プランの策定、4) サービスの実施(制度・資源の調整)、5) モニタリング、6) サービスの評価、の過程をもつ。

けいれつてきどうさ

系列的動作

sequential motions or behaviors

一般的には失行検査で用いるようなお茶入れや、タバコを吸う動作など、複数の物品を順序のある系列的な動きで行う動作をいう。作業療法士が関わる場面では、車いすの操作や更衣、歯磨きなど、多くのADLやAPDLも一種の系列動作といえる。

けっしょうせいちのう

結晶性知能

crystalized Intelligence

知能は単一のまとまりではなく、いくつかの質的に異なる能力(8～10の独立した因子)により構成されている。多因子からなる知能は流動性知能と結晶性知能という2つの共通因子に大別できる。流動性知能は新しい場面への適応を必要とする際に働く能力となる。

脳ないし個体の生理的成熟に密接に関係していると考えられる。生得的な知能であり、その場で発揮する。新規の問題を解決するために自分で方法を作り出し、解決する。一方、結晶性知能は過去の学習経験を高度に適用して得られた判断力や習慣(つまり経験の結果が結晶化されたもの)であり、流動性知能を基盤とし、経験の機会など環境因、文化因子により強く影響されると考えられている。ある課題を解決するために獲得した知識を割り当てて、組み立ててできた知能である。(→流動性知能)

げるすとまんしょうこうぐん

ゲルストマン症候群

Gerstmann syndrome

失書、失算、手指失認、左右障害の4症状よりなる認知障害をいう。脳の優位半球の頭頂葉の損傷で生じる。身体図式の障害を基盤とした症候群と考えられているが、4症状のみ出現することは少なく、その独立性については議論が多い。失語症を合併することが多く、また構成障害や半側空間無視を伴うこともあり、その合併する症状により4症状の内容も異なる。作業療法においては典型的な症状の同定のみに終わらず、注意深く評価し対処することが重要である。(→失書、失計算、手指失認、左右判別障害)

げんかいせってい

限界設定

limit setting

自己破壊的な衝動行為から患者を守ったり、安定した治療関係を維持したりするために、患者に守ってもらう約束(行動の枠組み)を設定することを指す。患者の様々な要求に対して、ここまではできるけれどここからはできないという限界を明示する。行動化が生じやすい境界性パーソナリティ障害(BPD)の治療では特に重要視される。(→BPD)

けんこうじょうたい

健康状態

health condition

ICFで用いられている用語で、病気(急性期あるいは慢性期)、変調、傷害、外傷を含む包括的な用語。さらに、妊娠、加齢、ストレス、先天性異常遺伝的要素のような状況も含んでいる。(→国際生活機能分類)

けんこうせいせいろん
健康生成論
salutogenesis

ラテン語で健康な、正常な状態にある、無傷の、無事な、安全な等の意味をもつ「salus」と、ギリシャ語で生成を意味する「genes」の合成語である。健康生成論の基本的な視点は、病気はさほど珍しい逸脱ではなく、人々はなぜ健康(health ease)と健康破綻(dis-ease)を両極とする「健康-健康破綻の連続体」(health ease/dis-ease continuum)上の望ましい極、つまり健康の極側にいられるのか、あるいは、ある時点でたとえどここの位置にしようとも、人々はなぜ健康の極側に移動しうるのであるのか、と問うことである。

けんこていこうか(てのでーしす)
腱固定効果(テノデーシス)
tenodesis action

1つの関節運動が多関節筋の伸張を生じ、他の関節の他動的運動を招く作用のこと。この原理を応用し、手関節の背屈により手指の屈曲を得て把持を可能にする動作をいう。C6レベルの頸髄損傷者の把持動作にみられる。

げんしはんしゃ
原始反射
primitive reflex

生下時からすでに存在している脊髄・脳幹レベルの反射群のことである。この反射の意義は生命維持、身体保護のための反射機構活動である

げんしよくふっき
原職復帰
return to original position

障害をもった人がリハビリテーション実施後に病前の職場に復帰することをいう。重度の障害をもった場合、原職復帰が困難なこともあるが、就労は活動と参加、QOLの観点からも重要で、「障害者自立支援法」(2006年)では就労支援が強化され、2008年の「障害者の雇用の促進等に関する法律」の改正(2008年)では法定雇用率の算定に精神障害者も含むようになった。なお、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(育児休業法)では、2005年の女性雇用管理基本調査の結果をもとに、厚労大臣指針にて「原則として原職又は原職相当職に復帰させることが多く行われているものであることに配慮すること」と定められている。

けんとうしきしょうがい
見当識障害
disorientation

人や周囲の状況(誰か、どういう関係か、何をしているか)、時間(年月日、時刻)、場所(地名、どのような場所か)など、自分自身が置かれている状況などが正しく認識できない状態を指す。脳血管障害(脳梗塞など)、アルツハイマー病、統合失調症の患者などにみられる精神的機能障害の一つで、認知症の主要な症状である。

けんりようご

権利擁護 advocacy

アドボカシーには政策提言の意味もあるが、日本では権利擁護の意味で用いられることが多い。認知症高齢者、知的障害者、精神障害者等で判断能力に制限がある者の権利を擁護・代弁する制度として、「日常生活自立支援事業」（旧地域福祉権利擁護事業）と「成年後見制度」がある。前者は福祉サービス利用時の手続き、預貯金の出し入れ、利用料などの支払い、年金や預金通帳などの書類保管を支援するもので、後者は財産管理、契約、遺産分割などの法律行為を支援するものである。

こういきのうしょうがい

行為機能障害 dyspraxia

感覚統合障害のひとつで、人が物理的環境に効果的に関わる際に必要とされる機能の障害（いわゆる不器用さ）を指す。行為機能（praxis）の障害はその重篤度や性質によって大きく2種類に分類される。一つは主として前庭情報処理の障害とリズム、順序性の障害、左右両半球機能の統合やラテラリティの障害によって特徴づけられる両側統合と順序性の障害（bilateral integration and sequencing）であり、二つ目は触覚情報処理の障害を基盤とする体性行為機能障害（somato dyspraxia）である。

こうかはんてい

効果判定 determination of the effect

治療・援助が対象者に有効であったか判断をすること。効率よく最大の効果（作業療法目標の達成）が得られるよう、毎回の作業療法実施の中で対象者の反応を考察することが基本である。効果判定のためには、初回評価と再評価の比較や目標達成の指標となる行動を継続的に測定する方法があり、単一症例研究法につなげていくことができる。

こうきのうこうはんせいはいったつしょうがい

高機能広汎性発達障害 pervasive developmental disorders

社会性、コミュニケーション、想像力の3領域に障害がみられるが知能指数70以上であり知的障害のない広汎性発達障害。

こうきのうじへいしょう

高機能自閉症 high-functioning autism

3歳くらいまでに現れ、他人との社会的関係の形成の困難さ、言葉の発達の遅れ、興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害である自閉症のうち、知的発達の遅れを伴わないものをいう。（→アスペルガー症候群）

こうじのうきのうしょうがい

高次脳機能障害 higher brain dysfunction

意識・注意機能、情動機能、視覚・聴覚的認識機能、言語機能、記憶機能、思考機能、遂行機能、行為計画の機能などの障害。

こうじゅうりよくしせい

抗重力姿勢

against gravity positions

生後1年間に、重力に抗して定頸、背臥位・腹臥位の抗重力伸展・屈曲、座位、立位へと発達していく。この抗重力姿勢の発達には手・目・口の微細運動機能の発達を保障する。

こうしゆく

拘縮

contracture

軟部組織の収縮により関節の可動性が制限されていることである。先天的なものには先天性内反足、先天性筋性斜頸、先天性多発性関節拘縮症がある。

こうじょうせい(ほめおすたしす)

恒常性(ホメオスタシス)

homeostasis

生物のもつ重要な性質のひとつで、生体の内部や外部の環境の変化にかかわらず、生体の状態が一定に保たれるという性質、あるいはその状態のこと。生物が生物である要件のひとつであるほか、健康を定義する重要な要素でもある。恒常性の保たれる範囲は体温や血圧、体液の浸透圧やpHなどをはじめ、病原微生物やウイルスといった異物(非自己)の排除、創傷の修復など生体機能全般に及ぶ。

こうせいてきさぎょう

構成的作業

constructive activities

部品を組み合わせて作品を仕上げるような作業の総称で、例えば、プラモデルやパズル、和紙工芸など、あらかじめ使用する材料や作成手順が明確に定められるものも多い。目的が明確で自由度が少ないため、実施者は作成の過程で何をすべきかという創造的思考を要せず迷いが少ないが、「できる-できない」、「簡単-難しい」、「きれい-汚い」、「成功-失敗」など、結果と体験が明確に示されやすいという特徴がある。

こうせいろうどうしょうへんいっばんしよくぎょうてきせいけんさ

厚生労働省編一般職業適性検査

general aptitude test

battery (GATB)

アメリカ労働省が開発した職業適性を評価する代表的な検査の一つで、わが国では厚生労働省編一般職業適性検査として使用されている。9つの適性能(知的能力、言語能力、数理能力、書記的知覚、空間判断力、形態知覚、運動共応、指先の器用さ、手腕の器用さ)を測定するもので、対象は中学生～成人(45歳程度)、所要時間は、紙筆検査(45～50分)、器具検査(12～15分)である。制限時間内にできるだけ早く正確に回答する最大能力検査で、個別でも集団でも実施でき、作業能力の評価にも用いられる。

こうぞうてきかんきょう

構造的環境

structural environment

主として生活する建物とその周辺地域を指すが、さらに広く地域全体の物理的構造も当事者の生活に影響を与えるため、交通網や、道路整備状況なども構造的環境に入れる場合もある。作業療法士はこうした構造的環境整備のスペシャリストとして期待されている。住宅内部のみに注目するのではなく、さらに広い視野をもつことが必要である。

こうそくせい かんきしょうがい

拘束性換気障害
restrictive ventilatory
impairment

肺の拡張が何からの原因で制限され、換気が不十分になった病態である。代表的な疾患には、間質性肺炎があげられる。％肺活量が80％未満で、1秒率が70％以上の場合が拘束性障害とされる。なお、閉塞性換気障害と拘束性換気障害の要素を有するものを混合性換気障害といい、％肺活量80％未満で、1秒率70％未満とされている。

こうそくせい しょうがい

拘束性障害
restrictive disorder

肺・胸郭系のコンプライアンスの低下により起こる換気障害である。肺の容積が縮小する異常であり肺活量の減少が特徴で、％VC(比肺活量)が80％以下である。

こうちせい

巧緻性
dexterity

細かい精密な動作を行なう能力をさし、一般には「手先の器用さ」などのように手の機能状況を表現する時に用いられる。手の巧緻性には、各指の分離した運動や複合運動の他、感覚・視覚のフィードバック、前腕・上腕・体幹などの身体部分の固定能力、それに知的能力を含めた精神・心理的状态などが関係する。巧緻動作とは、箸でつまむ、紐を結ぶ、ボタンをかける、などの動作をいう。

こうどう

行動
behavior

ヒトを含む動物の活動や行い全般を指す言葉で、「運動」、「行為」、「動作」などを含む概念として用いられることが多い。しかし、「行為」は一般に意図や目的をもつ人活動を指すのに対し、「行動」は無意識の活動(条件反射など)も含むより幅広い概念とされ、「行為」と「行動」を区別して用いる場合もある。

こうどうずいはんせい

行動随伴性
behavioral contingency

行動分析学で用いられる用語。行動を分析したときの「先行事象(行動のきっかけ)ー行動ー結果(環境の変化)」の一連の流れ、関係性のことをいう。三項随伴性、ABC随伴性ともいう。また、先行事象の前に確立操作という概念を加えたものを四項随伴性という。

こうどうせいぎょ

行動制御
behavioral control
/action control

行動発現に関して、誘発刺激(意欲を含む)が感覚系を刺激し、運動系に伝わり、行動として表現される。それを統合する(行動抑制・促進する)ことをいう。

こうどうへんようほう

行動変容法

behavioral modification

行動が学習される原理に基づいて、望ましい方向に変える治療教育法。不適切行動を減らし、それにとってかわる適切行動を身に付けることを目的とする。行動変容プログラムにはステップ・バイ・ステップ法がある。セルフ・モニタリング法、ピア・ラーニング法、行動強化法、フレミングなどがある。(→SST, 認知療法・認知行動療法)

こうはんせいはいったつしょうがい

広汎性発達障害(PDD)

pervasive developmental disorders:PDD

広義の自閉症と同義語であり、DSM-III(1980年)で公式の診断カテゴリーとして採用された。相互的対人関係のスキル、コミュニケーションスキルの発達の領域で重篤かつ広範囲にわたる障害と、常同的な行動パターン、限局された興味、活動によって特徴づけられる。DSM-IV-TRでは自閉性障害、レット症候群、小児期崩壊性障害、アスペルガー障害などが下位分類に挙げられている。(→自閉症スペクトラム)

こうやくせいしんけいしょうがい

絞扼性神経障害

entrapment neuropathy

末梢神経が走行の途中で、筋、靱帯などの圧迫、牽引、摩擦(関節運動などによる)が増加することによって生じる神経損傷。肘部管症候群、回内筋症候群、尺骨管症候群、後骨間神経麻痺など。

こうれいしゃかいたいさくきほんほう

高齢社会対策基本法

＊ ＊

1995年に制定された、わが国の高齢化の進展に適切に対処するための施策に関して定めたもの。基本理念は、高齢社会対策を総合的に推進し、経済社会の健全な発展と国民生活の安定向上を図ることを目的としており、「公正で活力ある社会」、「地域社会が自立と連帯の精神に立脚して形成される社会」、「豊かな社会」が構築されることである。前文には、「今後、長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会の形成が望まれる」として、社会のあるべき姿を提示した上で問題認識を表し、「社会のシステムが高齢社会にふさわしいものとなるよう、不断に見直し、適切なものとしていく」ためには、「国及び地方公共団体はもとより、企業、地域社会、家庭及び個人が相互に協力しながらそれぞれの役割を果たすことが必要である」と示している。

こうれいしゃぎやくたいほうし・ようごしやしえんほう

高齢者虐待防止・養護者支援法

＊ ＊

「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」(2005年制定2006年4月施行)の略称。高齢者虐待を防止することを目的として、高齢者虐待の防止等に関する国等の責務、高齢者虐待を受けた高齢者に対する保護のための措置、高齢者の養護者の負担の軽減を図るための措置等を定めることにより、高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する施策を促進し、高齢者の人権の擁護に資することを目的としている。

コーすりっぽうたいくみあわせてすと
コース立方体組み合わせテスト
Kohs block design test

コース(米国, 1920年)が開発した知能検査。各面が赤, 白, 青, 黄, 赤と白, 青と黄に塗り分けられた1辺3センチの立方体を組み合わせ、難易度順に並べられた17間の模様を作る課題で構成される。コース自身は、これを一般知能を測定する検査と考えたので、これによって精神年齢や知能指数が算出できるが、現代では、主として非言語性の能力を測るテストと考えられている。そのため、聴覚障害者に適するテストである。さらに、高年齢者や脳障害の後遺症患者にも適するテストであり、リハビリテーションの現場ではよく用いられる。

コーぴんぐ(たいしょ)
コーピング(対処)
coping

copeは「問題や仕事に対処する」という意味であり、外部環境の刺激や自分自身に生じた要求によって引き起こされた心理的ストレスの増大に対し、心理的ストレス反応を低減することを目的とした認知的または行動的な対処方法のことをコーピングという。対処行動には、状況を変化させる、問題を明確化するなどの「問題焦点型」、問題に対する情緒的な反応をコントロールしたり変化させる、あるいは情動的なストレスから逃避したり抑圧したりする「情動焦点型」、時間が解決するのを待つ「時間中心型」などがある。

ごーるたっせいすけーりんぐ
ゴール達成スケールリング
goal achievement scaling
(GAS)

クライアントの個別目標に対する介入後の到達度を測定する評価法である。介入前にあらかじめ、クライアントの課題と介入後に到達すると予測される結果、予測以上の結果、予測以下の結果を段階づけにより決定しておく。介入後に、クライアントの到達レベル(得点)を明らかにし、得点と課題の重みづけを公式にあてはめてゴール達成スコアを算出する。個々に生じるわずかな行動の変化を数値で示すことができる。

こくさいしょうがいしやねん
国際障害者年
international year of
disabled persons (IYDP)

国際連合は1976年の総会で「完全参加と平等」をテーマに1981年を国際障害者年と定めた。その翌年、国際障害者年の成果の恒常的維持を目指して「障害者に関する世界行動計画」の決議を採択し、1983～1992年の期間を「国連障害者の10年」と宣言した。その主な内容は、1)障害者の身体的、精神的な社会適合の援助、2)障害者に対して適切な援護、訓練、治療および指導と適切な雇用の機会保障、3)日常生活への参加の促進、4)社会参加権の周知徹底のための社会教育と情報の提供、5)障害の発生予防及び障害者のリハビリテーションのための効果的施策推進、などが挙げられた。

こくさいせいかつきのうぶんるい(あいしーえふ)

国際生活機能分類

international classification of functioning, disability and health (ICF)

人間のあらゆる健康状態に関係した生活機能状態から、その人を取りまく社会制度や社会資源までをアルファベットと数字を組み合わせて、記述・表現しようとするもの。国際疾病分類(ICIDH)の改訂版として、2001年5月世界保健機関(WHO)の総会で採択された。生活機能と障害(心身機能・身体構造、活動・参加)および背景因子(環境因子・個人因子)において、1桁レベルで34、2桁レベルで362、詳細には1424のコードで分類し評価できる。これを使用することにより、障害や疾病を持った人や家族、サービスを提供する人が、共通理解をもち、計画や評価、記録などの具体的手段を提供されることが期待される。また、調査や統計において国内はもとより、国際的にも比較検討する枠組みが提供される。

こころのりろん

心の理論

theory of mind

自分や他者の心の動きや欲求、情動、意図を推理したり、他者の持つ信念を理解したりする機能のこと。この機能は自他の行為について一貫性のある説明や予測を可能にするため、科学的理論に準じているとして「心の理論」と呼ばれている。「自分はある事実を知っているが、それを知らない他者はどの様に考えるか?」を問う誤信念課題を用いてその発達を調べる方法が考案されており、4～6歳までには基本的能力を獲得するとされている。広汎性発達障害などに生じる社会性やコミュニケーション障害との関連が深いと考えられている。(→自閉症スペクトラム)

こじんいんし

個人因子

personal factors

ICFの構成要素であり、年齢、性別、社会的状況、人生経験など個人に関係している背景因子。2002年日本語版では個人因子を含み整理されたが、社会的・文化的に大きな相違があるためICFで個人因子は分類コードを持たない。(→国際生活機能分類)

こじんじょうほうほご

個人情報保護

privacy protection

IT化の進展に伴い、個人情報保護がより一層重要視されるようになった。個人情報とは、ある個人を特定できる一切の識別情報をいう。氏名や住所、本籍地など基本的事項、家庭状況、資産や経済、学歴や経歴、支持政党や宗教などの情報である。個人情報に関する取り扱いについては「個人情報の保護に関する法律」(2003年5月30日法律第57号)で定められている。(→守秘義務)

こつしやく

骨萎縮

osteoporosis

腔既に形成された骨組織の骨量の減少した状態。骨萎縮は局所性、骨粗鬆症は全身性の病態に用いられることが多い。骨質が骨膜側より骨髓腔に向かって萎縮する場合は求心性萎縮、骨髓側から骨膜側に向かう場合は遠心性骨萎縮という。

こてんてきじょうけんづけ

古典的条件づけ classical conditioning

被験体の行動とは無関係に、条件刺激と無条件刺激を時間的に接近させて、反復して対提示する操作により、それが本来引き起こされなかった反応を安定して引き起こすようになる現象。条件刺激(CS)と無条件刺激(US)が同時に提示されると、最もよく学習が成立する。

こみゆにけーしょんえいど

コミュニケーションエイド communication aid

コミュニケーションに障害のある人が、残存機能や代償的機能を用いてコミュニケーションをとるための機器のことで福祉用具の一種。発声障害のある人が、ボタンを押して言葉を作り音声出力する「携帯用会話補助装置」や、パソコンのカーソルが一定の時間間隔で自動的に動き、目的の場所にきたときスイッチ入力をする「意思伝達装置」などがある。

こみゆにけーしょんしょうがい

コミュニケーション障害 communication disorder

表出性言語障害、受容－表出混合性言語障害、音韻障害、吃音症、特定不能のコミュニケーション障害の総称。

こゆうじゅようせいしんけいきんそくつうほう

固有受容性神経筋促通法 proprioceptive neuromuscular facilitation (PNF)

固有受容性神経筋促通法。筋、腱、関節にある固有感覚受容器に刺激を加えて随意運動の改善をはかる治療手技。

さいだいさんそせっしゅりょう

最大酸素摂取量 maximal oxygen uptake

運動中に体内(ミトコンドリア)に取り込まれる酸素の最大量をいう。体力の構成要素のうち全身持久力を示す指標であり、測定方法は運動中の呼気ガスを分析し、1分間に体内に取り込まれる最大の酸素量を算出する。最大努力で運動を行う直接法と、一定の運動から推定する間接法がある。

さいだいしんぱくすう

最大心拍数 maximal heart-rate

運動負荷を最大限に高め、心臓の拍動が最も早くなった時の心拍数。一般的には{最大心拍数=220－年齢}で推定される。

ざいたくけあ

在宅ケア home care

在宅で生活している個人や家族に対して行なわれる生活支援活動のこと。疾病や障害をもちながら在宅生活を送る人々の健康回復、家庭生活、社会生活能力の維持・獲得、および健康を害する危険性のある人々の生活の維持・改善や健康保持、疾病の予防などを、居住している場所を拠点として、その地域の条件や生活特性を生かして包括的・統合的・継続的に行なわれる保健・福祉・医療などのサービスをいう。具体的にはデイケア、デイサービス、機能訓練事業などの通所サービスと、訪問看護や訪問指導などがある。その他、在宅生活を継続するために生活支援機器の貸し出し・給付、入浴サービス、食事サービス、ショートステイなどがある。

ざいのうりよくぶんるい
座位能力分類
* *

正式にはHoffer座位能力分類(JSSC版). 高齢者・障害者が椅子・車いすに座る能力をセラピストや施設職員が簡易に評価できるように開発された分類. 座位に問題なし, 座位に問題あり, 座位がとれない, の3段階で評価する. 椅子に座った状態で問題点を発見し, 座位能力に合わせた対応ができる.

ざいほじそうち
座位保持装置
adaptive seating system

座位姿勢の保持が体幹および四肢の機能障害により困難となった障害児・者に用いられるもの. 機能障害の状況により, 立位姿勢や膝立ち姿勢などの座位以外の姿勢を保持する機能を有した装置も, 座位保持装置に含まれる. 座面, 背もたれ, ヘッドレストなどの各パーツと, それを支えるフレームからなり, 各パーツが分離しているモジュラー型と, 一体成形されているモールド型がある.

さぎょう(さぎょうかつどう)
作業(作業活動)
activities

日本作業療法士協会の定義では, 「日常生活の諸動作や仕事, 遊びなど人間に関わるすべての諸活動をさし, 治療や援助もしくは指導の手段となるもの」をいう. 世界作業療法士連盟(WFOT)では, 「人が自分の文化で意味があり行うことのすべて」としている. これらより作業療法で用いる「作業」とは, 対象者自らが文化的・個人的に価値や意味を見出し専心しているすべての活動をいう.

さぎょうきおく
作業記憶
working memory

短期記憶に代わって提唱された記憶のモデルで, 情報を一時的に保ちながら操作するための構造や過程を指し, 作動記憶とも呼ばれる. 音声・言語を扱う音声ループ, 視空間情報を扱う視空間スケッチパッド, そしてこれら2つを制御する中央制御部の3つから構成される. 短期記憶が, 言語情報の保存に着目したモデルであるのに対し, 作動記憶では認知的な機能を担うことが強調されている. (→短期記憶)

さぎょうすいこうのうりよく
作業遂行能力
occupational performance

したい作業, すべき作業, することを期待されている作業を実際に行う能力. その能力は作業技術と, 作業パターンにより左右される. 作業技術(performance skill)とは, 作業遂行能力の技術的側面で, 作業を効率よく上手に行う身体的能力をいう. 作業パターン(performance patterns)とは, その作業を完成させるまでの手順・方法・時間配分・労力の配分など一般的作業方法が含まれるが, 作業をする人の個人的な取り組み方も含む.

さぎょうすいこうぷろせすもでる

作業遂行プロセスモデル occupational performance process model(OPPM)

作業療法の流れを簡略化して示したもので、カナダ作業療法士協会のOPPMが知られている。カナダモデルでは、始めにCOPMを使ってクライアントの作業の問題を決定し、本人の価値観や診断などを考慮し作業療法の方針を決める(理論選択)。次に問題を引き起こしている理由を探り(原因の評価)、併せて問題を解決するのにプラスとなる要因を評価する(利点と資源の特定)。そして目標を設定し、本人と作業療法士が取り組む行動の計画を立て(目標設定と計画)、これを実行する。また、一定期間が過ぎたら再びCOPMなどを使って作業の問題を再評価する。(→カナダ作業遂行測定)

さぎょうすいこうぶんせき

作業遂行分析 occupational performance analysis

人が作業をどのように行うかを分析することをいう。作業療法では、一般的にADLやIADL、特定の作業課題などの遂行過程で、「できる」、「できない」、「どのような援助があればできるか」、という視点から観察評価が行われやすい。この作業遂行の特徴を量的に測定するために開発されたのが「運動とプロセス技能モデル」(assessment of motor and process model : AMPS)で、AMPSでは作業遂行を16項目の運動技能と20項目のプロセス技能に分けて測定(分析)する。

さぎょうてきおうもでる

作業適応モデル occupational adaptation model

このモデルでは、作業遂行がひとの自己主導(self-direction)や統御感(mastery)などの内的な適応過程を導くと考え、対象者が環境との相互作用のなかで作業役割に関わることを重視する。このため作業療法の介入では、対象者の内的適応(自己主導、統御感)を促進させる「意味のある作業」の遂行と、作業環境へのアプローチが重要視される。

さぎょうてきてきおう

作業的適応 occupational adaptation

適応とは、環境や境遇に反応し、その状況に合った形に変化することを指す。「人間作業モデル」における作業的適応とは、ある個人の生活する環境と時間の経過の中で、自分らしさを実感し、肯定的な作業参加の維持を達成することをいう。

さぎょうのうりよく

作業能力 occupational capability

広義には「一定の仕事を実際に速く効率的に処理する能力」を指す。どんな職業であっても、共通する作業遂行上の能力として次のものが挙げられる。1) 指示の理解、2) 作業手順の覚えの速さ、3) 記憶能力、4) 判断力と手際の善し悪し、5) 上肢の巧緻性、6) 手工具の利用、7) 作業の正確さ、8) 作業の速さ、9) 作業耐久性、10) 作業習慣、11) 作業態度。概念上は個人に属する作業上の能力であるが、実際の職場では、物理的・心理的な環境に影響される。

さぎょうぶんせき
作業分析
activity analysis

作業と人間の作業行為を生物的、心理的、社会的、文化的関係のなかで、構成する要素に分け、またその相互関係を明らかにするプロセス。また、作業そのものの特性とひとと作業のかかわりを、社会・文化、生理、心理、人の生活といった視点から分析し統合すること。「活動(分析)」と同義語として使用されているのが現状である。米国では「作業と人」との関連性の中で作業療法が実施されることを強調するために、「作業遂行」、「作業行動」および「作業行為」などの用語を用いて、いわゆる作業活動が分析されている。

さぎょうめんせつ
作業面接
activity based interview

「作業のもつ構造の各要素と被面接者との相互作用(interaction)を利用した面接」と定義される。言葉を主な交流手段とする通常の言語面接に対して、作業療法では作業と作業にまつわる言葉のやりとりを用いてコミュニケーションがはかれる。このように、作業と言葉の双方を用いる面接を作業面接と呼ぶ。

さぎょうりょうほうしぎょうむししん
作業療法士業務指針
occupational therapists
work guidelines

1989年に日本作業療法士協会が作成した作業療法士の業務指針。日本作業療法士協会では、高齢社会の到来と医療の高度化・専門化に対応する目的で、作業療法士が業務を適正にかつ円滑に遂行していくための指針を作成した。業務定型化を意図するものではなく、医療の発展や変容に応じて見直すことが付言されている。(作業療法ガイドラインを参照)

さぎょうりょうほうひようか
作業療法評価
occupational therapy
evaluation

評価とは、対象者の治療計画を立案するにあたり必要な情報を集約し整理することである。作業療法においては、通常初期評価として、出来る限り早い段階に一次評価を済ませ、日々の治療の中で随時再評価を繰り返す。検査・測定はもとより、ほかの種々の方法(観察、面接、作業活動)によって得られた情報を、整理・分析・統合・解釈するという作業も含み、治療効果を大きく左右するものである。

さぎょうりょうほうりろん
作業療法理論
theoretical concept of
occupational therapy

作業療法の根拠や理念を支える理論・モデルである。一例として、運動能力の回復や動作の代償を促進する「生体力学モデル」、クライアント中心の実践を重視する「カナダ作業遂行モデル」、課題遂行の認知的側面を重視する「認知能力障害モデル」、人間の作業を意志・習慣化・遂行能力から捉える「人間作業モデル」、神経発達のアプローチを基盤とする「運動コントロールモデル」、感覚情報の組織化を促す「感覚統合モデル」などがある。

さくせすふるえいじんぐ

サクセスフルエイジング successful aging

幸福な老いとも呼ばれ、だれもが幸福で生きがいに満ちた高齢期という意味。老年期において死や老化をそのまま受け入れるのではなく、これからできる生産的な行動とは何かを考える生き方をさす。

さんかせいやく

参加制約 participation restrictions

ICFでは、参加制約は「個人が何らかの生活・人生場面に関わるときに経験する難しさのこと」と定義されている。これは、一般人口の標準と比較して評価され、生活機能の構成概念の否定的側面をさし、機能障害、活動制限、環境因子の阻害因子と相互に作用している。（→国際生活機能分類、活動と参加）

ざんこりーぶんるい

ザンコリー分類 Zancolli classification

頸髄損傷者を残存運動機能の最下位髄節によってC5からC8までの4群に分け、それぞれをさらに残存機能によってAとB、2つのサブグループに分類する。C6髄節機能残存者は、サブグループBをさらに1から3までのサブグループに分類する。またC8髄節機能残存者は、サブグループBをさらに2つのサブグループに分類する。移乗・移動、更衣などの動作の自立の判断には、肘伸展筋および肩甲帯筋群の詳細な機能評価が必要であるが、ザンコリーの分類では、これらの筋群の機能を表現することはできないため、注意が必要である。

ざんぞんきのうれべる

残存機能レベル survival functions level

脊髄の損傷部位の一つ上位の脊髄のレベルを指している。例えば、第7頸髄の損傷の場合は、残存しているレベルは、第6頸髄より上位であるため、残存機能レベルC6となる。診断で「頸髄損傷C6」とある場合は、残存機能レベルC6を表している。

さんまひょう

三間表 sanmahyou

発達障害を対象とした作業療法において、実際の生活遂行状況を把握するために作成する表である。この表は、子どもの生活の時間、生活空間、人間関係の三つの「間」を24時間にわたって調査し図式化して作成する。

しかくしつにん

視覚失認 visual agnosia

視覚を介する対象の認知障害。認知の対象により、物体失認（狭義の視覚失認）、相貌失認、同時失認、色彩失認などに分類されている。物体失認は、視力や視野などの要素的な視覚は保たれているにもかかわらず、物品の認知ができず、他の感覚を用いると認知が可能となる。相貌失認は、よく知っているはずの人の身近な人や有名人の顔が識別できない。同時失認は、部分部分の視覚的認知は保たれているのに、それらの関係がわからず、全体像がつかめない状態である。色彩失認は、色名の呼称や色名から正しい色を選択するときの障害である。

じきゅうりよく

持久力

endurance

全身性の心肺持久力と局所性の筋持久力に分類される。いずれの持久力も日常生活を行う上で不可欠な身体機能を持続的に発揮する能力のことである。全身性の持久力は、作業や運動強度に応じて心肺器系と筋骨格系の酸素運搬能力の程度を評価する。一方、局所性の持久力は、体幹および四肢が重力に抗して、持続的に姿勢保持できうる耐久能力を評価する。

しこうかんしつにん

視空間失認

visual spatial agnosia

個々の対象物が空間において占める位置や、物と物との空間的関係に対する視覚による認知障害をいう。視空間失認 (visual spatial agnosia) の分類の仕方はさまざまであるが、次のようなものが含まれる。①視空間知覚障害－対象物の視空間内定位の障害、対象物の長さや大きさを比較する能力の障害、立体視の障害など、②半側空間無視、③Balint症候群－精神性注視麻痺 (眼球運動は正常だが、視線を随意的に移動させて対象を次々に注視することの障害)、視覚失調 (運動は正常だが、視覚的に捉えた対象物を手で捉えることの障害)、空間性注意障害 (注視した1つの対象物以外の物を無視する症状)。 (→半側空間無視)

しげき

刺激

stimulus

受容器が自然の状態で選択的に受容する刺激をいう。感覚受容において、目や耳などの受容器は、光や音など異なる種類の刺激のうち、ある特定の刺激を受容するように分化している。

しげきせいせいぎょ

刺激性制御

stimulus control

それが生じた直後の環境変化により変容しうる行動をオペラント行動という。あるオペラント行動の反応率を制御する機能を獲得した刺激を当該オペラントの弁別刺激といい、弁別刺激によりオペラント行動の反応率が制御されることを刺激性制御という。

じこかん

自己感

sense of self

自己に関する直接的・体験的な感覚をいう。統合失調症では、1) 身体に関する体験の統一性と統合性の喪失、2) 内的な生氣感情の低下、3) 主観性・主体性の感覚の低下、4) 実感のなさや体験の不全感と断片化、5) 自分という感覚の不連続性、などの自己感の障害がみられやすい。

じここうりよくかん

自己効力感

self-efficacy

ある行動を起こす前にその人が感じる遂行可能感、これだけのことができるであろうとする効力期待であり、この高さが遂行行動の強さを決定する。これは行動を事前に予測する力のある媒介概念であり、自分自身がやりたいと思っていることの実現可能性に関する知識ある。

じこじつげん

自己実現 self-actualization

米国の心理学者・アブラハム・マズローが、「人間は自己実現に向かって絶えず成長する生きものである」と仮定し、人間の欲求を階層で理論化した最も高次の欲求のこと。人間の基本的欲求を低次から、1) 生理的欲求 (physiological need), 2) 安全の欲求 (safety need), 3) 所属と愛の欲求 (social need/love and belonging), 4) 承認の欲求 (esteem), 5) 自己実現の欲求 (self actualization) とし、自己実現は、自分の持つ能力や可能性を最大限発揮し、具現化することを指す。すべての行動の動機が、この欲求に帰結されるようになるというものの。

じこせんたく・じこけつてい

自己選択・自己決定 self-determination, self-choice

当事者が自分の考えでものごとを選択し、決定すること。自己選択・自己決定には責任が伴うため、当事者の理解力に応じた選択肢のメリット・デメリット、リスクを考える材料を提供し、整理を手伝い、当事者が揺れたり悩んだりしながら選択・決定するのを支援する必要がある。

じこどういつせい

自己同一性 self-identity

エリクソン (E,H Erikson) によって提唱された青年期の発達課題である。自分とは何者か、自分の由来、現在、そして未来はどのようになっていくのかについて答えを見出そうとする心の動き。時間的な自己意識と一貫性と連続性の上に成り立つ主体的な自己意識であり、さらにその自己を他者が一貫性と連続性があるものとして認知しているという相互性によって与えられた安定感、自己評価によって裏打ちされた確信である。

じことうせいかん

自己統制感 sense of self-control

物事を自分でコントロールしようとする感覚を指す。内的な自己統制感 (自分の能力によって結果がコントロールされているという信念) をもちやすいタイプと、外的な自己統制感 (運や他者によって結果がコントロールされているという信念) をもちやすいタイプがあり、意志の強さ、有能感、自己効力感などと関係する。

じこにんしき

自己認識 self-awareness

自分自身が現在どのような状態にあるか、どのような特性をもつかを客観的に理解することで、私についての考え、あるいは理解をさしている。自己認識は自身の考えや行動の特性に関わり、「〇〇についてはこういう考え方をする」、「このような状況ではこのような行動をとる」などは自己認識を基礎に語られるものである。また、自己認識は外部 (他者) から与えられる自分に関する認識が影響を及ぼす。

じこひょうげんかつどう

自己表現活動

self-expression activities

自分の感情, 思い, 意志などを表出する作業活動の総称である。言語表現(詩歌, 記述, 話し合い)や身体表現(球技, ダンス, ロールプレイ)をともなう活動がその代表であるが, 絵画や手工芸などの創作活動や, 材料・道具の使い方, 仕上がった作品の扱い方など, 作業療法で用いる作業活動の多くが自己表現の要素をもつ。

しきていめん

支持基底面

base of support

物体の底面の縁から縁の間の面積のことを支持基底面という。人が立っている場合, 両足(裏側)を線でつなげてできる面と考えることができる。支持基底面は安定性に関与し, 面積が広ければ広いほど力学的に安定する。

じじょう

自助具

self-help device

身体機能の低下によって, 自分自身で行うことが困難となっている日常生活の動作を可能にするために, あるいは, より容易に自分で行えるようにするために, 特別に工夫された道具。食事, 整容, 更衣, 入浴, 排泄, 家事, コミュニケーション, 趣味活動など, 様々な日常の動作に関するものがある。市販されているものもあるが, 個々の使用者に適したものにするために, 作業療法士などが自作する場合もある。

しすてむりろん

システム理論

system theory

個々の要素が有機的に関係し合い, 相互作用を通して全体としてまとまった機能を発現している要素の集合体であるとする理論。一般システム理論は, 1950年代に提唱され, 電子回路やコンピュータなどの人工物, 生物の身体, 社会集団など, ミクロからマクロまで様々な現象をシステムとしてとらえ, これら多様なシステムに適用できる一般理論を構築しようとするもの。システム理論の役割は, 存在論, 科学哲学, 物理学, 生物学そして工学から, 理論的な原則を集めることであり, 用途は地理学, 社会システム科学, 政治学, 組織論, マネジメント, 心理療法(家族治療を含む), 経済学その他を含めて多数の分野にわたる。

しせいせいぎょ

姿勢制御

postural control

姿勢を制御すること。ほとんど意識に上ることのない自律的反応であるとともに, あらゆる随意運動の一部であり背景でもある。

しちかく

視知覚

visual perception

視覚に関する知覚で, 色, 形態, 空間内の位置などを判断する。Frostigによると, 視覚的刺激を認知して弁別し, それらの刺激を以前の経験と連合させて解釈する能力。

しつかんじょうしょう
失感情症
alexithymia

知性と情動の交流が遮断され、情動に対する気づきとその表現が失われた状態を示す。患者は自己の感情の認知や表出が困難であるため、ストレスが溜まると身体化症状を呈しやすい。一般に社会適応は良好で、むしろ過剰適応の傾向がみられやすい。神経症患者や抑うつ患者に比べて心身症患者では失感情症の傾向が強いとされる。

しつご
失語
aphasia

脳の限局病巣によって生じる言語の内容的な理解と表出の障害をいう。口唇、舌、軟口蓋、咽頭などの構音器官の運動麻痺や協調運動障害などによる構音障害は含まない。一般的には、発語、聴理解、読字、書字の障害を指し、ジェスチャーや顔の表情などによるコミュニケーションの障害は含めない。類型としては、ブローカ失語 (Broca's aphasia)、ウェルニッケ失語 (Wernicke's aphasia)、全失語 (total aphasia)、伝導失語 (conduction aphasia)、健忘失語 (amnesic aphasia)、超皮質性運動失語 (transcortical motor aphasia)、超皮質性感覚失語 (transcortical sensory aphasia) などがあげられる。

しっこう
失行
apraxia

「脳の器質的病変によって起こる症状の一種で、運動器官の麻痺や意志の欠如には起因しないところの目的動作遂行の障害」と理解されている。Liepmannははじめ、症例MTの所見に運動性失行 (motorische Apraxie) の語を当てはめていたが、のちに他症例の検討を重ね、「観念運動失行」、「観念失行」、「肢節運動失行」の3つの型を分離した。その後KleistとStrauss(1934)が「構成失行」を、Brain(1941)が「着衣失行」の概念をつけ加えた。

しっしょ
失書
agraphia

脳病変により書字が障害された状態をいう。失行、失認、失語はなく、書字障害のみ見られるものを純粹失書という。責任病巣としては、左前頭葉第2前頭回脚部や頭頂葉上方後部、左視床などが考えられている。同じく、失語とは独立して、読字と書字が障害されるものを失読失書という。左角回病変によるものが多い。この他、失語症の部分症状として出現する失語性失書、構成行為の障害によって起こる構成失書、筆記具の使用障害による失行性失書、視空間失認に伴う空間性失書、脳梁損傷で左手のみに書字障害が生じる離断性失書がある。

しつてきけんきゅう

質的研究

qualitative study

人の行動、感情、思考などのありのままを観察・記録し、それらを材料として、そこから見出された事象の意味を解釈し、結果を文章に記述する研究方法である。1980年前後から、数値を扱わない研究として、民族誌学的研究、事例研究、生活史研究、現象学的研究などとして登場した。変数や状況をコントロールしない研究なので、非実験的研究とも呼ばれる。グラウンデッドセオリー、ケーススタディー、KJ法を用いた分析などがある。

しつにん

失認

agnosia

局在性の脳病変によって起こる、ある感覚を介する対象の知覚と認知の障害。障害はその感覚の異常、知能低下、意識障害などに起因しない。なお、他の感覚様式を用いればその対象を認知できる。

していつういんいりょうきかん

指定通院医療機関

outpatient medical care given

医療観察法制度において、裁判所により通院決定を受けた対象者の通院治療を行う医療機関。厚生労働省の指定制である。2010年現在、民間病院を中心に382箇所が指定されている。訪問看護、デイケア、外来作業療法など、外来機能の充実した医療機関が指定を受けることが多い。（→医療観察法、司法精神医療、指定入院医療機関）

していにゅういんいりょうきかん

指定入院医療機関

designated inpatient
medical care

医療観察法制度において、裁判所により入院決定を受けた対象者の入院治療を行う医療機関。厚生労働省の指定制である。2010年現在、国公立20箇所(484床)が開棟している。事件時の行動の振り返りと内省、病状悪化と他害行為を防止するための対処法の学習など、多職種チームによる積極的なアプローチが特徴である。（→医療観察法、司法精神医療、指定通院医療機関）

じどうしこう

自動思考

automatic thought

ある状況下で瞬間的に現れる考えやイメージで、その人が現実をどのようにみているかが現れる。例えば、不安な時には「何か嫌なことが起こりそうだ」という考えが浮かび、その後の行動が支配されやすい。認知療法・認知行動療法では、こうした対象者の自動思考の同定と検討が治療初期の目標となる。（→認知療法・認知行動療法）

じどうそうだんじょ

児童相談所

child guidance center

児童福祉法に基づいて設置された児童福祉の専門機関。都道府県、政令指定都市、中核市に設置される。業務は、児童およびその家庭に関する様々な問題に関する相談、調査、判定、指導、ならびに児童の一時保護などがある。

じどうふくしほう

児童福祉法

child welfare law

社会福祉に関連する主要な法律のひとつで、1947年に制定され、以後何回か改訂が行われている。児童福祉の理念と福祉を担当する組織、各種施設および事業に関する基本原則を規定している。

しにあかいがいぼらんていあ

シニア海外ボランティア

senior overseas volunteer

開発途上国の公的機関等に所属し、日本のシニア世代の持つ高い技術力を生かし指導、助言、調査を通じて、開発途上国の人材育成を図り、ひいては国造りに協力するボランティア。協力分野は、計画・行政、公共・公益事業、農林水産、鉱工業、エネルギー、商業・観光、人的資源、保健・医療、社会福祉の9分野。

じへいせいしょうがい

自閉性障害

autism

3歳くらいまでに症状が現れ、①社会的な相互交渉の質的な障害、②コミュニケーション機能の質的な障害、③活動と興味の著しい限局性(こだわり)の3つを主な特徴とする行動的症候群である。自閉症と呼ばれることもある。(→広汎性発達障害)

しほうせいしんいりょう

司法精神医療

forensic mental health services

触法精神障害者に対する精神医療であり、日本においては、主に「医療観察法制度」における指定入院医療機関または指定通院医療機関における精神医療を指す。対象は重大な他害行為を行った精神障害者で、検察官の申立てによって裁判所が指定入院医療機関への入院を決定する。(→医療観察法)

しほうせいしんかさぎようりょうほう

司法精神科作業療法

occupational therapy in
forensic psychiatry

司法精神医療のなかで行われる作業療法。主に医療観察法制度のもとで重大な他害行為を行った対象者に対して実施される作業療法を指し、指定入院医療機関または指定通院医療機関において、多職種との連携のもとで実施されるのが特徴である。

しゃかいさいてきおうひょうかしゃくど

社会的再適応評定尺度 social readjustment rating scale

ライフイベントに伴うストレスの程度を示した尺度。結婚を50、配偶者の死を100として、ある生活上のストレスイベントが起きてから、もう一度、もとの社会適応を取り戻すのに必要な時間を調査結果により求めたもの。この得点が高い生活上のイベントほど、もとの生活に戻るまでに時間がかかる大きなストレスイベントであるということになり、この評価点数を「ストレスマグニチュード」「ストレスマグネチュード」と呼び、生活におけるストレスの大きさの指標として用いる。

しゃかいさんか

社会参加 social participation

共同の生活を営む人間の集団や世の中といった地域に関与したり、一翼を担ったりすること。国際生活機能分類においては健康状態の重要な構成要素。社会参加を推進する上で問題となるのは、「引きこもり」などにみられる意欲や目的、役割意識の低下、家族関係の悪化、地域および近隣との交流の減少などがあげられる。その対策として、訪問による援助に加え、主として通所サービスを活用しての対人交流・仲間づくりに向けた援助を行う。

しゃかいしげん

社会資源 social resource

個人や集団の生活上の諸問題を解決し、または充足するために役立てられる各種の施設、制度、機関、知識や技術などの物的、人的資源、さらに集団や個人の有する知識や技能の総称。社会資源は、公式に提供するかによってインフォーマルセクターとフォーマルセクターに分類したり、自助・共助・公助といった資源を提供する側の立場を分類したりする方法などがある。

しゃかいせいいかつかんきょう

社会生活環境 environment of social life

本人の主たる生活の場である家庭、施設、職場、学校などを取り巻く社会・経済・文化的環境のこと。障害福祉サービスを利用できる社会資源がどの程度整備されているかが大きな要因となる。

しゃかいてきがくしゅうりろん

社会的学習理論 social learning theory

人間行動の習得と制御における認知機能の重要性の認識に立つて、学習理論を拡張、発展させた理論。Bandura, A. によって確立され、社会的習慣、態度、価値観、行動などは、周囲の人たちの模倣や、モデルの観察学習(モデリング)を通して習得されるというもの。モデリングには、注意過程、保持過程、運動再生過程、動機づけ過程の4つの下位過程が働いている。(→社会的動機づけ)

しゃかいてきこうどうしょうがい

社会的行動障害

social behavioral disorder

すぐ他人を頼る, 子どもっぽくなる(依存, 退行), 無制限に食べたり, お金を使ったりする(欲求コントロールの低下), すぐ怒ったり笑ったりする, 感情を爆発させる(感情コントロール低下), 相手の気持ちや立場を思いやることができず, よい人間関係が作れない(対人技能拙劣), 一つのことにこだわって他のことができない(固執性), 意欲の低下, 抑うつなどを総称したもの. 高次脳機能障害や精神疾患などでみられる.

しゃかいてきどうきづけ

社会的動機づけ

social motivation

生理的動機づけを基盤として, 発達の過程で家族や友人との関係, 職場での関係などの経験を通じて獲得された動機. 他者との親密な関係を築きたい, 他者から称賛を得たい, 他者との競争で優れた結果を出したいなどがある. (→動機づけ)

しゃかいふっきちょうせいかん

社会復帰調整官

a rehabilitation coordinator

医療観察法に基づき, 精神障害者の社会復帰を支援するため, 法務省が新設して, 各地の保護観察所に配置. 同法の対象者が退院した後, 居住地にある病院や自治体の連携の中心となり, 生活状況の観察などを行い, 医療や地域生活など全般の調整役を担う. (→医療観察法, 司法精神医療)

じゅうかんきょうせいび

住環境整備

* *

対象者の持っている能力を十分発揮して暮らしやすいように生活環境を整えること. 地域において作業療法士に求められる役割の一つであるが, 対象者本人だけではなく, 家族にも心地よい住環境を調整しなければならない.

じゅうきよにゆうきょうしえんじぎょう(じゅうきよさぽーとじぎょう)

住宅入居等支援事業(居住サポート事業)

* *

賃貸契約による一般住宅への入居を希望しているが, 保証人がいない等の理由により入居が困難な障害者に対し, 入居に必要な調整等に関わる支援を行うとともに, 家主等への相談・助言を通じて障害者の地域生活を支援する事業. 実施主体は市町村である.

じゅうしょうしんしんしょうがい

重症心身障害

severe motor and
intellectual disability

身体障害, 知的障害が重複し, かつそれぞれの障害が重症であること. 大島の分類では, 寝たきりおよび座位までの運動機能と精神機能(IQ35以下)を重複するとしている. (→大島の分類)

じゅうたくかいぞう
住宅改造
housing repair

既存の住宅を、そこに住む人の機能に応じて間取りを変更したり、段差の解消、手すりをつけるなどして生活しやすいように改造すること。住環境の整備、住宅改修ともいわれる。

しゅうだん
集団
group

人や物の集まりのこと。作業療法など治療・訓練・教育などで用いる場合、「2人以上の人で構成され、構成メンバー間に何らかの相互の関係や作用がある集まり」を指す。集団は治療者患者関係や作業活動と共に重要な治療因子である。個人に対して行なうことを複数に対して行なうマス効果から、集団力動を活かす集団心理療法的効果まで、目的に応じてさまざまに利用されている。別な視点からは、集団の成熟過程に伴う相互作用を利用する場合と、目的に応じMoseyの示す集団レベル（並列もしくは課題）の場を維持し、だれでもいつでも同じように受け入れられる「場」として利用する場合とがある。

しゅうだんさぎようりょうほう
集団作業療法
group occupational therapy □

複数の対象に対して集団場面で行なわれる作業療法の総称。広義の集団療法に類する。すなわち言語に対し補い合う媒介として作業活動を用いる集団心理療法から、身体機能の回復・維持・発達などを目的とする作業療法に対して、集団の機能を用いる訓練・教育的集団療法まで、幅広い意味で使用されている。作業活動を媒介にすることで、非言語的なコミュニケーション機能（身体感覚レベルの共有体験や共通感覚など）を生かし、小児のように言葉が十分発達していない者や、認知症や精神症状などの影響で言葉が通常のコミュニケーション機能を果たさない対象にまで、幅広い働きかけが可能になる。そして集団で作業の過程、結果を共有するため、役割分担など、メンバー相互の位置関係を設定しやすく、グループや個人の課題が明確になる。（→集団）

しゅうだんりきどう（ぐるーぷだいなみくす）
集団力動
group dynamics

物理的な力のように集団の場にも何らかの力が働いているという考え方から1930年代にLewinが用いた用語である。集団は構成員の総和以上の性質をもち、内外からの力によって変化し、そのプロセスには一定の法則があるという点が集団力動の基本仮定となる。集団力動では集団プロセス（発生-発展-消滅）の法則や、集団を構成する人の相互関係、集団との関係、集団間の関係が力学的視点で取り扱われる。個人が集団から影響を受けて変化し、個人の変化が集団に影響を与えるという集団力動の視点は、狭義の集団精神療法に始まり、作業療法や教育・訓練を目的とした集団まで幅広く応用されている。（→集団、集団作業療法）

しゅうまつき
終末期
terminal

治療不可能な疾患に冒され、回復の見込みがなく遠からず死に至ると認められた患者の状態、またはその時期をさす。

しゅうろういこうしえん
就労移行支援
transition support for
employment

障害のある人たちの一般就労を促進する支援を指す。障害者自立支援法の就労移行支援事業では、労働施策との連携のもとに、65歳未満で企業等への就労を希望する者、技術を習得し在宅で就労・起業を希望する者等を対象に、一般就労等への移行に向けて事業所内や企業における実習、適性に合った職場探し、就労後の職場定着のための支援などが行われる。（→就労支援）

しゅうろうしえん
就労支援
job assistance

仕事に就くための支援をいう。障害者自立支援法下では、一般企業や家庭内就労ができるように支援する「就労移行支援事業」と、雇用契約を結んで事業所内で就労を支援する「就労継続支援事業（雇用型）」、勤められるようになった事業所を継続できるよう支援する「就労継続支援事業（非雇用型）」とがある。（→就労移行支援）

しゅうろうしえんきき
就労支援機器
* *

障害者や高齢者が就労するときの身体的・心理的負担を軽減して、職業生活の維持に役立つ機器。パソコンの画面情報を音声で読み上げてくれるソフトや、画面情報を拡大表示するソフト、オフィスでの使用に配慮した電動車いすなどがある。

じゅさんしせつ
授産施設
vocational aid center

一般雇用が困難な障害者に訓練を行ない、かつ職業を与え、自活を援助することを目的とする福祉施設であり、1)身体障害者福祉法による更生援護施設に含まれ、入所型と通所型、重度者の入所型と通所型、2)精神薄弱者福祉法による援護施設に含まれ、入所型と通所型、3)精神保健法による社会復帰施設に含まれ、入所型と通所型などがあつた。障害者自立支援法施行により通所型のものは、就労移行支援事業と就労継続支援事業に2012年3月までに移行が進められている。新制度下では、障害の種別を問わず相互利用が促進されており、日中活動の場としての支援事業と居住支援サービスという枠組みで整理される。（→共同作業所）

しゅだんてきにちじょうせいかつどうさ(あいえーでいーえる)
手段的日常生活動作(IADL)
instrumental activities of
daily living

LawtonとBrodyによって提唱されたADLを社会生活まで拡大しようとした概念。彼らによる「手段的生活活動のスケール」には、「電話の使用」「買物」「食事準備」「家屋維持」「洗濯」「乗り物利用」「服薬管理」「家計管理」などが含まれている。

しゅちょう

腫脹
swelling

臓器が充血などにより体積を増している状態。疼痛・発赤・熱感にならぶ炎症の4大徴候の一つ。病的な刺激が加わると細胞が障害され、ヒスタミンやブラジキニンなどの物質が放出して、血管系の反応が誘発または促進される。これによって血管壁の透過性が亢進され、血液成分が血管外へ出ることによって細胞障害付近に血液成分が貯留し、体積の増加が起こる。

しゅひぎむ

守秘義務
confidentiality

業務上で知り得た患者等の個人情報(秘密)を守る義務。守秘義務は、公務員、弁護士、医師、歯科医師など、その職務の特性上秘密の保持が必要とされる職業について、それぞれの法律により定められている。これらの法律上の守秘義務を課された者が、正当な理由なく職務上知り得た秘密を漏らした場合には、処罰の対象となる。

じゅんかん(けい)

循環(系)
circulating system

心臓を原動力として血液を循環させ、栄養物・酸素などを運搬、かつ老廃物を排泄する基本的な生理機能のひとつで、通常は心臓の自動能や自律神経系の働きにより、様々な状況に合わせた調節がなされている。

しゅんぱつりょく

瞬発力
muscle power

力を出力するタイミングに合わせ、筋力と速度を乗じた力が瞬時に発揮する筋パワーである。体力測定では垂直跳び、立ち幅跳び、走り幅跳びなどのジャンプ力とソフトボールやハンドボールなどの遠投などがある。スポーツに求められる力であるが、日常生活の中では、重い荷物や家具を移動するときに発揮する力である。

じゅんびてきしゅだん

準備的手段
* *

アメリカ作業療法協会が定めた統一用語の「作業療法遂行モデル」に基づき、身体障害領域における治療手段を連続性のあるものとして説明した。その連続的治療手段の第2段階で、治療的手段としての目的活動の基準を備えていないが、目的活動の一部の動作を取り出して治療的に活用している手段を準備的手段という。その治療用具としてはサンディングボード、積み重ねコーン、積み木、認知・運動技能の訓練用ペグボードなどがある。

しょうがい

障害
disorders

個人の精神、身体における一定の機能が、比較的恒久的に低下している状態で、疾病あるいは健康状態の変調により心身機能・身体構造、活動および参加に支障をきたした状態、またはその原因となるもの。生理的レベルでとらえた障害である機能障害 (Impairment)、個人レベルでとらえた障害である能力障害 (Disability)、社会的レベルで捉えた障害である社会的不利 (Handicap) に分類されることが多いが、環境因子や個人の特性に左右されるため、国際生活機能分類 (ICF) では、活動における障害を活動制限 (activity limitations)、参加における障害を参加制約 (participation restrictions) と呼ぶ。(→国際生活機能分類)

しょうがいがくしゅう
生涯学習
lifelong learning

人々が自己の充実や生活の向上のために、各人の自発的意志に基づき、必要に応じて自己に適した手段・方法を選んで行う生涯を通じての学習。またそれを支える行政的条件を整備することを含む。

しょうがいしゃこようたいさくきほんほうしん
障害者雇用対策基本方針
disabled employment
policy measures

「障害者の雇用の促進等に関する法律」に基づき、国の5カ年間（2009年度から2012年度まで）の障害者雇用対策の展開のあり方についての基本方針が述べられたもの。事業主、労働組合、障害者その他国民一般に広く示すことによって、障害者の雇用の促進およびその職業の安定をはかることを目的としている。

しょうがいしゃじりつしえんほう
障害者自立支援法
services and supports for
persons with disabilities act

2006年4月に施行され、障害者施策を三障害一元化、利用者本位のサービス体系へ再編、就労支援を抜本的強化、支給決定を透明化・明確化、安定的な財源の確保の5つのポイントをもとに、障害者が地域で暮らせる社会を目指す法律である。応能負担から応益負担としたことなど、多くの問題が指摘され2013年8月までに、大幅に見直される予定である。

しょうがいしゃようしゅうしょくれでいねす ちえつくりすと
障害者用就職レディネス チェックリスト
effectiveness of
employment readiness
checklist for the disabled
(ERCD)

障害のある人の、一般企業で働くための準備性を評価する質問紙法。チェックリストは9領域44項目から成り、人が就職して働く場合に、職場の物理的・心理的・社会的環境に適応するために必要となる条件を、必要最小限度の範囲で網羅している。結果はプロフィールと尺度得点で示され、プロフィールは心理的・行動的条件のどの側面で準備が整っているかを視覚的に捉え、尺度得点によって就職の準備性の程度を知ることができる。

しょうがいじゅう
障害受容
acceptance of disability

人が障害を受け、回復が期待通りにならないことを知ったのち、社会的、心理的に適応するまで、苦しく葛藤のある心理状態を段階的に進み、ある時期に障害と共に生きることを受け入れる状態に達するという考え方、またはその状態。Wrightの「価値の転換」が、その後の受容の本質として障害後の心理過程の最終段階に位置づけられた。わが国では、キューブラー・ロスの「死の受容過程」が身体障害後の受容過程として引用される傾向があるが、多くの当事者や支援者から、「障害受容」という言葉に、不快さや不可解さを抱く人がいることも指摘されている。

じょうきょうぶんせき

状況分析

situational analysis

ライヒ(Reich, W., 1933)が性格分析として用いたのが始まりである。患者の態度や反応を治療状況の現実因子(治療構造)と結びつけながら検討していく分析技法で、態度・振る舞い分析と呼ばれる。現在では、広く患者の置かれた状況を理解する構造的視点として受け継がれている。

じょうしきのう

上肢機能

upper-limb function

到達、把握、放し、操作の機能からなり、それらの機能が相互に作用して身辺処理や学業・仕事、遊び・余暇活動の大部分を行っている。それらは手の運動機能としてみえるが、視覚機能、知覚・認知機能と複合したものであり、行為の目的や意思などとも関連した機能である。

しょうてんてきちゅうい

焦点的注意

focal attention

外界から入ってくる多くの刺激の中から特定の刺激だけを選び出す働き。一つへの注意によって、他の刺激の情報源を遮断して意識にまで及ばない状態。例: テレビに集中していて誰かが部屋に入ってきたことに気づかないなど。

じょうどう

情動

emotion

急激に生じ数秒から数十分という短い時間で終わる比較的強い感情である。狭義には快—不快を両極とし、様々な中間層をもつ状態。ただし、一般的な「怒り」「喜び」「悲しみ」を情動とするか、感情とするかは、心理学、脳科学、医学、認知科学の研究者の立場により異なる。(→感情)

じょうどうこうい

常同行為

stereotypic behavior

同じ行動や行為を何度も繰り返し続ける症状で、統合失調症の緊張型、自閉症、アルツハイマー型認知症、脳炎後遺症などの疾患で見られやすい。統合失調症では意志発動の障害に含まれる。

しょうひえねるぎー

消費エネルギー energy consumption

ヒトが活動によって消費するエネルギーのことでキロカロリーで表す。身体活動の強度を表す単位

METS(metabolic equivalents)は、ある活動が安静時の何倍に相当するのかわを示す。METSにそれを実施した時間をかけたものを「エクササイズ」という単位で表し、そこからその活動による消費エネルギーを算出することができる。例: 体重50kgの人が、30分間ジョギングをした場合、

エネルギー消費量 = $1.05 \times 50 \text{ (kg)} \times 6 \text{ (METS)} \times 0.5 \text{ (時間)} = 157.5 \text{ kcal}$

しょうひせいかつようせいひんあんぜんほう

消費生活用製品安全法 consumer products safety act

「消費者が日常使用する製品によって起こるケガ、やけど、死亡などの人身事故の発生を防ぎ、消費者の利益を保護すること」を目的とする。製品の安全確保をはかるため、安全性に関する基準の作成・検査、合格した製品(福祉用具も含む)には「SG (Safety Goods) マーク」を表示できる。2007年の改正では、重大事故が発生した場合、製造事業者または輸入事業者は国への事故報告が義務となり、情報の公表を通じて類似事故の防止がはかられている。

しょうへき(ばりあ)

障壁(バリア) barrier

障壁(バリア)という語彙は「さえぎるもの、じゃまになるもの」と訳される。段差があったり、幅員が狭かったりして車いすで通れないなど、物理的なもの(物理的なバリア)、社会のルールも含め、障害の有無や等級によって資格などが制限される(制度的バリア)、文化活動をするチャンスや必要な情報が平等でない(文化・情報面でのバリア)、認識不足のため弱者には適さない街づくりや言動によって相手を傷つけたりする(意識上のバリア)などが考えられる。その半面、自分を守るもの、乗り越えるべき壁という肯定的な捉え方をする場合もある。

じょうほうしよりあぷろーち

情報処理アプローチ processing approach

脳の機能全体を情報処理の過程と捉えて、コンピューターのソフトウェアにたとえて脳内活動をモデル化するアプローチ。人間の知覚過程を情報処理過程とみなして考える。ノーマンらによって提唱され、情報処理の対極的な2種類の仕組みがある。ボトムアップ処理は、データ駆動処理(data driven processing)ともいわれ、感覚入力のデータ群によって駆動され、スキーマを見出し、上位概念や枠組に取り込まれていく。トップダウン処理は、概念駆動処理(conceptually driven processing)ともよばれ、既存の記憶に依存し、概念や理論などから駆動され、入力データを予想や仮説、期待などのもとに処理をする。

しよくぎょうきょうみけんさ

職業興味検査

vocational preference inventory (VPI)

職業に関する興味や関心の方向性を調べる検査。160の具体的な職業に対する興味・関心の有無の回答から、6種の職業興味領域尺度と5種の傾向尺度(心理的傾向)に対する個人の特性を測定する。職業及び働くことに関しての動機づけや情報収集、キャリアガイダンスでの使用等に適した検査方法。

しよくぎょうのうりよく

職業能力

vocational capability

職業を得て就業できる能力をいう。特定の職業(作業)に対する専門的知識・技術の有無にかかわらず、職業全般にわたって必要とされる能力のことである。具体的には以下の通りである。1) 精神・身体的能力、作業体力および持続力、上肢や下肢の運動機能、視力・聴力などの5感機能、知的能力および通勤能力などがある、1) 職業適性(職業領域と個人の能力との相関: Superはこの適性について「適性は能力であり潜在的可能性である」と述べている)。3) 身体機能や学業、性格など現在保持されている人格的総合能力の他、職業生活持続には、4) 作業遂行を核とした作業能力、5) 心身の健康管理能力、6) 身辺処理能力や対人関係能力を核とする社会生活能力、7) 余暇活用を含めた社会資源利用の能力。

しよくぎょうひょうか

職業評価

vocational evaluation

国際労働機関の示す障害者の職業的リハビリテーションの基本原則(ILO勧告第99号)では、職業評価を「障害者の就業の可能性、援助方針の決定あるいは方針修正を目的として行なわれる、身体的、心理的、および職業技能的各側面から探索を行なうもの」としている。これには、職業訓練や職業指導の対象となる前の準備状況を見る職業前評価や、職業選択の目安となるような特定の職務遂行能力を見る評価が含まれる。評価に関わる職種は作業療法士、ケースワーカー、心理士、職業指導員などで、作業療法では「職業前評価」として特に心身機能、職業生活を継続させる生活技能と作業能力を、検査、観察、面接、作業活動などを用いて評価する。(→職業能力)

しよくぎょうまえくんれん

職業前訓練

pre-vocational training

職業人としての資質(体力、耐久性、労働習慣、基礎知識など)や職業の準備性を高めるために行なわれる指導・訓練をいう。作業療法では、心身の基本的能力の維持・改善、社会生活能力の改善・開発、作業能力の改善・開発、心身の健康維持管理能力の獲得などが目標となりやすい。具体的な作業手順の学習、作業習慣、職場適応などは、訓練室で練習するよりも、「その場での訓練」が有効であることが知られている。(→ブレイス・ゼン・トレイン)

しよくぎょうりはびりてーしょん

職業リハビリテーション

vocational rehabilitation

障害があるために就労が困難になっていたり、維持していくことが難しくなっている人に、仕事を通じた社会参加と自己実現、経済的自立の機会を作り出していく取り組み。具体的には、障害者手帳の所持者に限らず、身体的、知的、精神的な理由により援助が必要と思われる人に対し、職業相談、職業評価、職業訓練、職業指導、職業紹介などの職業的なサービスのほかに、職業生活に就きそれを維持向上させるために必要な福祉的な方法を提供する。企業や官公庁での雇用、自営、福祉的就労など、収入を得る目的で生産活動に従事することが目標となる。（→就労支援、就労移行支援）

しよくこうどういじょう

食行動異常

uncontrollable appetite

食思不振、拒食、摂食制限、隠れ食い、盗み食い、過食、過食嘔吐などの摂食行動の異常を指す。その背景には、ストレスや対人関係の悩み、痩せ願望、肥満恐怖、関心の引き寄せなどがあるといわれ、摂食量の低下が持続するとさらに摂取量が減少したり、過食嘔吐が生じることもある。

じよくそうよぼう

褥瘡予防

pressure sore prevention

褥瘡を予防すること。褥瘡の発生原因では「限局性の圧力」に加え、「皮膚の耐久性の低下」が影響している。「限局性の圧力」は、圧迫やズレによる皮膚の血液循環の低下、皮膚組織の虚血、壊死を引き起こす。予防には、体位変換など可動性や活動性の向上をはかり、適切な体圧分散寝具の選択や体位変換、座位保持のための車いすやクッションの選定を行う。また、日中はベッドから「離床」し、車いすや椅子に座って過ごすよう支援することが重要となる。褥瘡対策に関する診療計画書の中で、ベッド上での危険因子の評価と合わせて、椅子上での座位姿勢の保持、除圧の評価、看護計画が褥瘡予防として挙げられている。椅子上での対応とはシーティング対応のことで、医療機関・地域支援においてもシーティング技術の対応が必要である。

しよくむしこうほう

職務試行法

trial law duties

障害者職業センターの事業で、障害のある人が実際の職場で実習・訓練を行い、職業能力や適性などを評価する。当事者にとっては、どんな仕事を選んだらいいのか、仕事に就くためにはどのような点を解決していけばいいのかなど、自分自身の職業志向とのマッチングや職業能力の自己評価に役立つ。試行期間は3週間以内で、事業所には利用料が支払われる。

しよくむぶんせき
職務分析
job analysis

特定の職務の遂行に必要とされる知識・経験・能力や作業環境などを明らかにし、職務の内容を明確にするための分析をいう。職務分析は職務給の決定、人員の採用・配置・教育訓練などのために行われる。最近では、従来の年功型賃金体系から職務給型の賃金制度へと切り替える企業が増えてきており、職務分析の重要性が指摘されている。

じょぶこーち
ジョブコーチ
job coach

障害者が一般企業で働けるよう、対象者と企業の双方を支援する就労支援の専門職を指す。職場で対象者に仕事を教えるという役割に加え、本人と職場のアセスメント、職場開拓、ジョブマッチング、フォローアップなど役割を担う。2002年度より「職場適応援助者」事業として始まり、2005年10月に「職場適応援助者助成金」が創設され今日に至っている。この制度では、1)障害者職業センター、2)民間社会福祉法人等(第1号)、3)障害者を雇用する企業(第2号)に所属するジョブコーチがあるが、2)と3)が助成金制度となったことにより、身近な地域で必要な援助を行うことが期待されている。(→就労支援、オンザジョブトレーニング)

じりつしえんいりよう(せいしんつういんいりようひ)
自立支援医療費(精神通院医療費)
grant of medical expenses

精神科通院医療費の負担を軽減する制度で、自己負担額は医療費の1割となる。また、世帯の所得状況や障害・疾病の内容によって軽減措置がはかられ、1カ月あたりの負担上限額が設けられている。診察等の医療行為のほか、薬代、訪問看護、精神科デイケアも対象である。

じりつしんけいけい
自律神経系
autonomic nervous system; ANS

循環、呼吸、消化、体温調節、代謝、排泄などの生命維持に必要な機能を環境の変化に対して調節し、恒常性の維持を行う神経。植物神経とも言われ、随意的制御を受けない。交感神経系と副交感神経系に大別され、原則的には両者は拮抗的に作用する。

じりつしんけいしょうがい
自律神経障害
autonomic nervous disorder

脊髄を経由する交感神経の遮断による副交感神経優位の状態から生ずる起立性低血圧など種々の症状。

じりつせいかつ

自立生活

independent living

障害のある人が、たとえ日常生活で介助者のケアを必要としても、自らの人生や生活のあり方を自らの責任において決定し、また、自ら望む生活目標や生活様式を選択して生きる行為、すなわち「自己決定」や「自己選択」の保証された生活を自立生活という。

しんけい・きんしつかん

神経・筋疾患

neuromuscular disease

脳・脊髄および末梢神経などの神経系、もしくは筋肉自体の病変によって運動に障害をきたす疾患のことをいう。病変の部位や程度によって、運動障害、感覚障害、疼痛、痙攣、意識障害、言語障害、嚥下障害、精神症状、自律神経症状など多様な症状を呈する。代表的な疾患としてパーキンソン病、脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症、ギラン・バレー症候群、筋ジストロフィーなどがある。これらの疾患の多くは、厚生労働省の定める特定疾患に指定されている。

しんけいしゅうふくじゅつ

神経修復術

nerve repair

非回復性の神経麻痺の場合、外科的に神経の修復を行うもの。神経の損傷状態に応じて、神経剥離術、神経縫合術、神経移植術、神経移行術がある。

しんしんきのう

心身機能

psychosomatic function

国際生活機能分類で用いられている構成要素の一つ。精神機能、感覚機能、音声発話機能、心血管・血液・免疫・呼吸器系機能、消火器・代謝・内分泌系機能、尿路・性・生殖機能、神経筋骨格・運動機能、皮膚と関連する構造、まで人間全体の生理機能のことをいう。（→国際生活機能分類）

しんせん

振戦

tremor

全身および身体の一部に起こる規則的な不随意運動を指す。安静時振戦、動作時振戦、本態性振戦などに分けられる。パーキンソン病においては安静時振戦が認められる。

しんたいかつどう

身体活動

physical activity

ヒトが安静にしている状態より多くのエネルギーを消費する全ての営みのことをいう。健康づくりのための運動として、日常の生活活動や体操などの運動からなる身体活動を増やすことが大切であるとされている。

しんたいこうぞう
身体構造
physical structure

ICFで用いられている用語で、身体系に沿って分類される器官、肢体とその構成部分の身体の解剖学的構造のことをいう。

しんたいこうそく
身体拘束
body restraint

厚生労働省は1999年3月に次の11の行為を身体拘束と定義した。1)徘徊防止のため車椅子やベッドに体幹や四肢をひも等で縛る。2)転落防止のためベッドに体幹や四肢をひも等で縛る。3)自分で降りないようにベッドを柵で囲む。4)点滴・経管栄養のチューブを抜かないように四肢をひも等で縛る。5)チューブを抜かないように又は皮膚をかきむしらないように手指の機能を制限する手袋をつける。6)車いすずり落ちたり立ち上がったりにしないように、抑制帯、腰ベルト、車いすテーブルをつける。7)立ち上がる能力のある人の立ち上がりを妨げるような椅子を使用する。8)脱衣やおむつはずしを制限するために介護衣(つなぎ服)を着せる。9)他人への迷惑行為を防ぐためにベッドなどに体幹や四肢をひも等で縛る。10)行動を落ち着かせるために向精神薬を過剰に服用させる。11)自分の意志で開けることのできない居室等に隔離する。本来、利用者の意思に反し行動制限する為の行為はすべて身体拘束とみなすべきで、これらを防ぐためには「人権」への配慮にもとづく安全な「環境づくり」が不可欠となる。

しんたいしょうがい
身体障害
physical disability

身体のあらゆる意味での障害の一般名。行政的には身体障害福祉法に規定された肢体不自由、視覚障害、聴覚障害、言語および嚥下の障害、呼吸機能障害、循環機能障害などに分類される。

しんたいずしき
身体図式
body schema

自己の身体に関する地図(mental map)で、視覚要素が優先する身体像(body image)や、知的要素が優先する身体概念(body concept)と同義に用いられることが多い。身体図式(body schema)は前庭覚、固有受容覚、触覚が統合されて形成するとされ、視覚や言語の統合を必要としない。すなわち自己の身体が空間に占める状態を即時に中枢神経系に反映するもので、重力を基準にした身体各部の位置関係を知覚する。

しんたいひょうげんせいしょうがい
身体表現性障害
somatoform disorder

身体的な検査所見では何ら原因となるものはないにもかかわらず、繰り返し様々な身体症状を訴える。周囲の注意を引こうとする演技的要素があり、DSM-IVでは临床上、身体化障害、転換性障害、疼痛性障害、心気症、身体醜形障害などをまとめていう。

じんてきかんきょう

人的環境

human environments

人的環境とは、家族、親類、近隣の人々を指すが、特に家族環境は当事者の生活に大きな影響を与える。中でも当事者の生活の鍵を握るキーパーソンは生活のあり方を決定づける重要な存在である。作業療法士はキーパーソンが誰で、具体的役割は何かを、当事者の生活に対するキーパーソンの価値観を含め把握する必要がある。

しんりきょういく

心理教育

psycho education

精神障害などの受容しにくい問題をもつ人またはその家族に対し、正しい知識や情報を心理面への十分な配慮をしながら伝え、病気や障害の結果もたらされる諸問題・諸困難に対する対処法を習得してもらうことによって主体的に療養生活を営めるように援助する方法をいう。

しんりしゃかいてきりはびりてーしょん

心理社会的リハビリテーション

psychosocial rehabilitation

医学的リハビリテーションに対して、疾病の治療よりも精神障害をもつ人自身の社会的役割や人生上の希望を尊重する立場。1951年代の米国の「クラブハウス活動」に端を発した。症状の悪化や回復はストレスや社会的な関係性の中で生じると捉え、対象者が主体的な生活を送れるよう心理面・社会面からの関わりを重視する。（→心理教育）

しんりょうほうしゅうせいど

診療報酬制度

reimbursement system

健康保険制度における保険診療を実施する際の医療行為、診療の対価としての報酬基準（施設基準および報酬点数等）を定めた制度である。保険医療機関及び保険薬局は報酬としてその基準に従って保険者から受け取ることになる。これには、医療従事者の医療行為に対する対価である技術料、薬剤師の調剤行為に対する調剤技術料、薬剤の薬剤費、医療材料費、検査費用などが含まれる。診療報酬は、物価や人件費などの変動に合わせ、2年に1度の頻度で改定が行われ、中央社会保険医療協議会（中医協）等の議論を踏まえ厚生労働大臣が決定している。

ずいいうんどう

随意運動

voluntary movements

動物の主体的な意志によって起こる運動で、自らの意思によって制御される運動。

すいこうぎのう

遂行技能

performance skill

課題を行う際にそれを円滑に達成する能力のこと。課題を行う人が、その課題が行われている環境や物と関わり、課題の進行に合わせて問題に対処していく能力で、運動技能、プロセス技能、コミュニケーションと交流技能などに分けることができる。自ら目標を定め、計画性を持ち、必要な方法を適宜用い、同時進行で起こる様々な出来事を処理し、自己と周囲の関係に配慮し、長期的な展望で、持続性を持って、行動することなどを行う能力。単一な機能ではなく、目標に到達するための認知機能の柔軟性、必要な情報と反応を選択する集中力、ないしは選択的注意、自ら方法を見出し柔軟な思考で多くの要素を見出す発散性思考ないしは流暢性なども含まれ、明確な概念となっていないものも多数あると考えられている。

すいこうど

遂行度

performance level

ある作業や活動を達成しているとする度合い。COPMのスコアでは、特定の作業を対象者が、自分ではうまくできると思うかどうかを示す尺度。10段階で回答するもの。1は全くできない、10はとてもうまくできる、を意味する。（→カナダ作業遂行測定）

すいたいがいりうけいうんどうしょうがい

錐体外路系運動障害

extrapyramidal tract
system movement
disorder

錐体外路系とは錐体路系と小脳系を除いた運動路の総称である。大脳や脳幹の深部にある基底核と大脳皮質の運動関連領域と連携する運動系で小脳系とも密接に関連して、運動がスムーズにむだなく行われるようにコントロールしている。この系統が障害されることであり、部位によって不随意運動ないしパーキンソン症候群が起こる。

すいみんしょうがい

睡眠障害

sleep disorders

入眠、睡眠に何らかの異常がみられる状態を指し、睡眠に障害が生じると身体や精神に不調和をきたす。大別すると睡眠異常、睡眠時随伴症、内科・精神科的睡眠障害、その他として短時間睡眠、長時間睡眠などがあげられる。ストレスと関連する多くの疾患で睡眠障害が生じやすい。

すきーま

スキーマ

schema

個人の中にある一貫した知覚・認知の構えや図式のこと。すなわち、個人が世界をどのように構造化して把握しているかということを示すもので、ドイツ語読みでシェーマともいう。スキーマは過去の学習や経験に基づいたものであり、自分自身を個人として、集団の一員として規定するための信念体系、あるいは基本法則ともいえる。そして個人がある出来事に特定の意味を与える規則にもなる。例えば、ボディスキーマが自動車運転の基礎となり、車両感覚に影響を与える。

すくりーにんぐけんさ

スクリーニング検査

screening examination

健康者をも含めた集団から、目的とする疾病についての広く潜在的な変調がないかを確認するための検査。医学的なふるい分けとしての役割から選別検査ともいわれる。標準値と比較してふるい分けを行う方法で、検査としては、比較的簡単で正確、かつ安価で、多数に対して短時間でできるものが望ましいとされている。なお、スクリーニングでさらに検査が必要とされた者には、次いで精密検査により、診断の確定が行われる。

すどれすたいしょ

ストレス対処

stress coping

強すぎる・長すぎるといった過剰なストレスに対し、体調を損なわないようにする方法。対処の仕方は様々だが、まずどういう状況でストレスを受けやすく、どのような反応が出るかなどの傾向を知ることがその対処法を考えるときのポイントになる。ストレスを和らげる工夫や対処を行い、ストレスとの付き合い方を学ぶことは、体調を整えたり、維持をするためにも欠かせないことである。

すとれんぐすもでる

ストレングスモデル

strength model

病気によって障害された機能の改善に焦点を当てる医学モデルとは異なり、本人のもつ強さと本人を取り巻く環境の強さに注目し、その能力や長所を伸ばしていくアプローチ哲学である。自分の長所を活かし、目標を達成するために環境（支援者やサービスなど）のもつ力を活用し、エンパワメントを高め、希望と自尊心、成功感と満足感、自立と質の高い生活を実現することを目指す。

すぴりちゅありてい

スピリチュアリティ

spirituality

霊魂や神などの超自然的存在との見えないつながりを信じる、または感じることに基づく思想や実践の総称で、普遍性・共通性を志向する概念である。カナダ作業遂行モデルでは人間を把握する視点としてスピリチュアリティを重視し、その基本的概念として、ヒトに生得的に備わっている自我の本質。ヒトがまさに唯一無二の存在であるという資質。意思、動因、動機の表現。自己決定と自己規制の源泉などを強調している。（→カナダ作業遂行測定）

すぶりんと
スプリント
splint

作業療法や手外科領域のリハビリテーションに携わるセラピストが製作する治療用仮装具。スプリントを装着することで、関節症状の軽減、治療的役割、代償や訓練器具としての役割が期待できる。装着の目的は様々で、固定、支持、矯正、保護、代用、代償、機能の変換、筋機能の改善、関節可動域訓練などがあげられる。材質は軽量で熱可塑性のものが中心で、毎日調整が可能である。

せいかつかだい(らいふたすく)
生活課題
life tasks

人間の一生という長期的な視点である「ライフサイクル」と、日々の暮らしの1コマである「作業活動」をつなぐ「中間的な概念」であり、個人の“人生の目標”を具体化し達成するために、一定期間・持続的・平行的に取り組む「いくつかの作業occupation」の集合体をいう。

せいかつかんきょう
生活環境
daily life environment

人間が生きていく中・日々の生活において、その人を取り巻くものや状況の全てを指す。それらは、特定の物理的・社会的特徴をもち、人の生活に文脈をもって影響を及ぼす。

せいかつかんれんどうさ(えーびーでいーえる)
生活関連動作(APDL)
activities parallel of daily living

日常生活の基本動作(ADL)に比べ、交通機関の利用・家事動作等の応用動作を含む、広い生活圏での活動をさす。

せいかつきのう
生活機能
daily life functioning

ICF(国際生活機能分類)のfunctioningの訳語で、心身機能・身体構造から社会参加や活動をも視野に入れた包括的な用語。

せいかつぎのう
生活技能
living skills

日常の暮らしのなかで繰り返す家事や生活を維持する諸活動、社会における他者との交流、交通機関や社会資源の利用、余暇の過ごし方といった生活する上で必要なすべての活動についての知識と技術を指す。

せいかつこうい
生活行為
daily performance

人が生活していく上で営まれる生活全般の行為のこと。生活全般の行為とは、セルフケアを維持していくための日常生活動作(ADL)の他、生活を維持する手段的日常生活動作(IADL)、仕事や趣味、余暇活動などの行為すべてを含む。

せいかつし
生活史
life history

生物の一生にわたる変化の様子を、その生活に即して考える場合に用いる言葉である。つまり、どのように生まれ、どのように育ち、どのように繁殖し、どのように死んで行くかを述べる訳である。

せいかつしえん
生活支援
life support

生活上の能力を具体的に評価し、具体的な治療計画にもとづいて支援をしていく事。実際の生活に活用できるように生活技能の開発や生活環境の整備と創造を目指す。

せいかつじかん
生活時間
* *

生活時間の研究では一定の時間(通常1日24時間)を個人がどのように消費したかを記録し、時間配分の主要な傾向を分析したり、集団間の比較検討を行っていく。日本人の生活時間に関する代表的調査として、国民生活調査(NHK)と社会生活基本調査(総務省)がある。

せいかつしゅうかん
生活習慣
life-style

行動様式や価値観、暮らしぶり、日常繰り返されている生活様式のこと。個人的差に加えて、家族因子、社会的因子が大きく影響を及ぼす。

せいかつもでる
生活モデル
life model

専門職者が主導するサービス提供方法(援助方法)ではなく、サービス対象者の生活状況や社会生活を全体として把握し、対象者の主体性、選択性を尊重した援助方法

せいしんかでいけあ
精神科デイケア
psychiatric day-care

1974年に精神障害者の社会生活機能の回復を目的に制度化された。グループを中心にプログラムが実施され、1日6時間が標準とされている。長期の利用者も多く、「今後の精神保健医療福祉のあり方等に関する検討会」(2009年)では、一般就労の支援を図るなど、患者の症状やニーズに応じた機能の強化や分化を図っていくことが課題となっている。(→デイホスピタル)

せいしんしょうがいしゃかいせいかつひょうかしやくど(らすみー)
精神障害者社会生活評価尺度
life assessment scale for
the mentally ill (LASMI)

精神障害者の社会生活上の課題を包括的に把握するための評価尺度で、生活の不安定性や現実離れといった、既存の評価尺度にはない経時的、心理的評価項目を含んでいる。入院生活から社会的自立まで、社会生活の多様な場面において使用できる。臨床で簡便に使用でき、信頼性、妥当性が確認されている。

せいちゅういきんぐん
正中位筋群
* *

胎齡28週頃には子宮内で足蹴り運動をすると、下肢が子宮壁から身体の中心部へ押し返される。それにより正中位筋群(腹筋群)の成長が開始し、末梢の運動を制御するために必要な体幹の筋緊張が発達する。出生後は正中位筋群の働きにより抗重力屈曲、抗重力伸展、体幹・骨盤の回旋が発達していく。正中位筋群の発達には身体図式としての身体の正中軸を形成し、空間概念の発達の基盤となる。

せいてきすぷりんと
静的スプリント
static splint

スプリントの構造に動的な部分をもたないもの。機能面からみて機能的スプリントと非機能的スプリントに分けられる。

せいめいしすてむ
生命システム
biological system

人間は約60兆個の細胞から構成されているが、その細胞を1個の全体へと「有機的に構成」(organization)しているのが生命(life)である。また複数の構成要素が有機的に組み合わせられ、まとまりをもつ全体をシステムという。このように生命システムという場合は、生命を物質(細胞)より構成される機械論として考える立場をとる。

せいりてきくつきよくい
生理的屈曲位
* *

胎齡28週頃から胎児は大きくなってくるため子宮壁による包み込みを受けて屈曲姿勢となる。これにより新生児は屈曲の筋緊張が優位となり、脊柱や肩甲帯、下肢の可動性は制限された生理的屈曲位をとって姿勢を安定させている。この生理的屈曲位であることから手と口、手と手、手と目が出合いやすく、上肢機能、視覚機能、口腔機能の発達に有利な姿勢である。

せいりてきどうきづけ
生理的動機づけ
motivation

生命を維持し、種を保存させるための生理的な欲求(空腹、睡眠、排泄、身体的損傷回復など)の欠乏状態からの回復をもとに生じる動機。

せかいさぎょうりょうほうしれんめい
世界作業療法士連盟
world federation of
occupational therapists
(WFOT)

WFOTは1952年米国、英国など10カ国が発起国となり作業療法の啓蒙と発展ならびに資質の維持向上を目的に創設された作業療法の国際的機関。1959年に世界保健機構(WHO)と連携し、1963年には国連より非政府組織(NGO)として認証され、わが国は1972年に加盟した。WFOTの指針や基準は作業療法士における国際基準であり質を保証するものとして用いられ、2010年現在WFOT加盟国は69カ国に上る。

せつしょく・えんげかてい
摂食・嚥下過程
* *

食物が認知され、口腔、咽頭、食道を経て胃に達するまでの過程で、先行期・準備期・口腔期・咽頭期・食道期の5過程からなる。

せつだんぶい
切断部位
amputation region

切断された部分またはその場所。上肢の切断部位は、米国整形外科学会は断端長の長さを百分率で表し、切断部位が15分類される。両側上肢切断の場合は、Carlyle Indexを切断者の身長に乗じて決める。国際標準化機構は、切断部位が10分類される。下肢の切断部位は、骨盤切除、股関節離断、大腿切断、膝関節離断、下腿切断、サイム切断、ショパール離断、リスフラン離断、中足骨切断、足指切断となる。

せんこうしそうさ
先行子操作
antecedent control procedures

行動変容技法のひとつ。刺激性制御の原理を応用し、先行事象のうちの物理的環境や社会的環境の一部分を操作して、望ましい行動を増やしたり、望ましくない行動を減らしたりする手法。

ぜんとうようきのう
前頭葉機能
prefrontal cortex activity

言語、行為、認知、記憶など、ある程度独立性を有した高次脳機能を制御し統合する働きをもった、より上位の機能である。いわゆる遂行機能とほぼ同義に使われている。

ぜんぱんせいふあんしょうがい
全般性不安障害
generalized anxiety disorder

不安障害の一つで、仕事や学業、将来、天災、事故、病気など、日常の様々なできごとに対し、理由が明確でない過度な不安が長期間続き、日常生活にも支障をきたす。不安やイライラ、落ち着きのなさ、易疲労感、集中力低下、筋緊張感、睡眠障害などがみられる。

そうきょくせいしょうがい
双極性障害
bipolar disorder

気分障害の一つで、かつては「躁うつ病」と呼ばれていた。躁状態とうつ状態を繰り返す疾患で、躁状態を伴う双極I型障害と、軽躁状態を伴う双極II型障害に区分される。双極性感情障害と呼ばれることもある。他の精神疾患に比較し生涯有病率は低いが自殺率が高く、再発を繰り返すこともあり長期的な治療・リハビリテーションが必要となる。（→感情障害）

そうきりしょう
早期離床
early ambulation

臥床を続けていると廃用症候群と呼ばれる心身の機能低下を起こす。このような状態にならないために、全身状態が落ち着いた時点で早期から座位や立位・歩行を行うことをいう。

そうぐ
装具
orthosis

四肢又は体幹の機能に障害を負った場合において、当該機能の回復、低下を抑制、または補完するための器具機械。上肢に用いる装具を上肢装具、下肢に用いる装具を下肢装具、体幹に用いる装具を体幹装具という。また、作業遂行領域の活動(身辺処理活動・余暇的活動・生産的活動)を行いやすくする器具がある。JISの定義は、「四肢・体幹の機能障害の軽減を目的として使用する補助器具」である。

そうしつたいけん
喪失体験
loss experience

強く愛着を持つ近親者などの喪失や死別により、心のよりどころを失い、事実を受け入れられない感情、罪悪感、怒り、見捨てられ感などの悲嘆反応が生じること。転勤や転居、異動や失業など、環境や役割の変化も喪失体験となることがあり、うつ病を引き起こすこともある。喪失を受け入れ悲しみを乗り越えるには1年程度の時間が必要とされ、この体験をフロイトは「悲哀の仕事」(mourning work)と呼んだ。

そーしゃるさぽーと
ソーシャルサポート
social support

物質的な援助でなく、周囲の人たちとの人間関係によりもたらされる援助のこと。ソーシャルサポートには情緒的支援、道具的支援、環境についての情報支援、自己評価に関する支援などがあり、直接的に心理的ストレスを低減したり、間接的にストレスフルな状況に対する認知パターンに働きかけたりして、心身の健康を促進する効果をもつ。職場における組織内の人間関係や、子育てにおける家族支援、バーンアウトの問題など、対人関係が希薄化した現代社会ではその必要性が増している。

そくしけいせい
側枝形成
* *

神経線維がちょうど芽を出すように新しく枝分かれしていく現象を側枝発芽といい、他の神経との間に側枝接続し情報の流れを作っていくこと。

そくていしょうがい
測定障害
dysmetria

随意運動時に目標物に対して正確に四肢が到達せずに、目標を行き過ぎたり(測定過大)、到達せずに手前で止まる(測定過小)現象を指す。

そくほういじょう
側方移乗
transfer

車いすと移乗対象を(ほぼ)平行に接し、プッシュアップで体重を支持し側方へ移動させる移乗。頸髄損傷者ではC7以下で可能となる。

だーめんこるせつと

ダーメンコルセット

damen corset

体幹装具の一つで、腰痛症の腰部の運動制限・保護を目的とする腰仙椎装具。材料は布を主体とする軟性装具で、その装具の総称である。

たいいいんそくしんしえん

退院促進支援

promote and support discharge

入院の長期化を防ぐとともに、長期在院者の退院を促進するための支援である。地域生活への移行を円滑化するためには、早期リハビリテーション、家族を含めた心理教育、地域の支援機関との連携などがポイントとなる。障害者自立支援法の精神障害者退院促進支援事業では、①対象者への退院の啓発活動、②退院に向けた個別支援計画の作成、③院外活動への同行支援、④対象者・家族に対する相談・助言、⑤関係機関との連絡・調整支援等を行い、精神障害者の円滑な地域移行の促進を目的としている。

たいえきへんどう(ねっしょうせいしよく)

体液変動(熱傷性ショック)

shift of body fluid

重症熱傷受傷直後に起こる体液変動は血管壁透過性亢進により循環血液量と機能的細胞外液量が減少する状態のことであり、熱傷性ショックはこの急激な体液変動により、血圧低下、浮腫、尿量の減少などを呈する状態をいう。

たいおうこうどう

対応行動

correspondence behavior

子どもが他者や自分を取り巻く環境との間で、時・場・対象との「つりあい」がとれるようにする行動のこと。

たいこう

退行

regression

すでに発達したある段階から、より未分化な、あるいは未成熟な以前の発達段階に逆戻りすることをいう。例えば、排泄が自立していた幼児に弟か妹が誕生すると、(親の愛情を得るために)おもらしをするようになることがある。これは以前の発達段階に戻り、そこで満足を得ようとする無意識的な行動であり、精神分析でいう防衛機制の一つである。退行は常に病的な結果を意味するとは限らず、例えば、遊び、レクリエーション、睡眠などは人間が健康な生活を送るうえで必須な要素であると同時に、自我のコントロール下における一時的退行とも考えられる。

たいしゃとうりよう(たいしゃりつ)

代謝当量(代謝率)

metabolic equivalents (METs)

METsは時間あたりの日常生活や運動のエネルギー量が、安静時代謝の何倍に相当するのかを求めた単位である。したがって1METは安静座位姿勢で体重1kgあたりに、1分間で消費する酸素摂取量3.5mlに相当する。通常は、7METs以上の運動能力があれば日常生活上の問題はないが、セルフケアに限れば、4METs程度が目安となる。

たいしょうしかん
対象疾患
target disease

作業療法の対象となっている疾患を指す。注意が必要なのは、国際疾病分類では、原因疾患を挙げることになっている点である。例えば「切断」では、原因疾患が、糖尿病による壊疽ならば内分泌・栄養及び代謝疾患の「糖尿病」が対象疾患となるし、外傷性ならば損傷、中毒及びその他の外因の「その他」が対象疾患になる。脳腫瘍では、「新生物の悪性新生物」か「良性新生物及びその他の新生物」が対象疾患となる。

たいしょうしゃ
対象者
client

広い意味では作業療法が適応となる人々すべてであるが、論文や報告書などに使われる場合は作業療法士が作業療法を提供する(した)人を総称する。医療保険では「患者」、介護保険では「利用者」と称することが多い。

だいしょうしゅだん
代償手段
compensatory approach

障害により失われた機能を別の手段で補うこと。記憶障害のため覚えられないときに手帳を導入したり、注意障害のため次の作業に移ることができないときにアラームを活用するなど。外的補助手段ともいう。

たいしょうそうしつ
対象喪失
object loss

自分にとってのかけがえのないものを失うことをいう。対象喪失がうつ病の発症につながることもあり、それをどう体験するかがメンタルヘルスにとって重要となる。愛情や依存対象の喪失(肉親との死別や離別、失恋、子離れ、ペットの死等)、慣れ親しんだ環境の喪失(引っ越し、転校、卒業、転勤等)、身体の一部の喪失(手術や事故等)、目標や自己イメージ、所有物の喪失など、あらゆる事柄が含まれる。(→喪失体験)

だいしょうどうさ
代償動作
compensation movements

神経筋疾患の子どもの代償動作は、活動を成功させる適応的方策である。また、身体概念の発達状況を類推することもできる。適切に代償動作を駆使して、活動の成功を支援するために、代償動作の様式を詳細に観察する。

たいじんかんけい
対人関係
personal relationship

人間関係と同義に扱われ、人と人との間に生ずる心理的・情緒的な関係を指す。アメリカの精神科医ハリー・スタック・サリブアン(H.S. Sullivan, 1892-1949)はS.フロイトの性欲理論(リビドー仮説)を否定し、「精神医学は対人関係論である」として、人間の精神発達プロセスに与える社会文化的要因、対人関係の要因を重視した。Sullivanを中心とする人間関係学派では、精神障害が対人関係の場で発生し、治療もまた治療者との対人関係を通して可能と考える。

たいせいけいせい

耐性形成

tolerance

依存性物質は長期に摂取を続けると効きにくくなる(耐性の形成)ものも多く、以前と同様の効果を求めて摂取量が増加する傾向にある。耐性が形成されやすい物質には覚醒剤・モルヒネ・アルコール・ニコチンなどがある。

だいりきょうか

代理強化

vicarious reinforcement

バンデューラ(Bandura, A.)が明らかにしたモデリングによる学習過程(観察学習)で、モデルへの強化によって学習者が間接的に強化を受けることをいう。つまり、他人がある行為の結果として報酬を得たことを観察し、自分もそうしようという思いを抱く(代理で強化される)。「人の振り見て我が振り直せ」も同じ。代理強化の考え方は啓発や態度変容を目的とするCMなどで用いられ、例えば、麻薬の危険を知らせる青少年向けのメッセージを、青少年があこがれるサッカー選手などが訴える。

たしよくしゅれんけい

多職種連携

multi-disciplinary collaboration

「協働」とともに1990年代後半より、医療・介護領域で用いられるようになった概念。多くの職種が連携して対象者へのサービス・生活支援を行う方法を指す。介護保険制度(2000年)以降、ケアマネジメントの手法が取り入れられ、診療報酬にも多職種協働に対する評価が新設されるなど、高齢者や障害者のもつ多様なニーズに応ずる、複合的なサービス提供の手段として重要視されている。

たっせいどうきづけ

達成動機づけ

achievement motivation

評価を伴う達成状況において高いレベルで目標を達成しようとする形態の動機づけをいう。マレー(Murray)は、人間には高水準の目標を達成しようとする欲求があり行動が規定されると仮定し、達成動機は成功願望と失敗恐怖の二つの欲求から構成されるとした。達成動機が高い人は内的要因である能力や努力に原因が帰属すると考え、達成動機が弱い人は外的要因である問題の困難性や偶然性に原因が帰属すると考える傾向が強い。(→動機づけ、社会的動機づけ、外発的動機づけ、内発的動機づけ、内的要因)

たとうせい

妥当性

validity

あてはまること。検査の妥当性とは、測ろうとする対象を検査が実際に測定しているかを指している。妥当性は内容妥当性、基準関連妥当性、構成概念妥当性到大別できる。

たもくてきとれーすほう

多目的トレース法

tracing

手のスプリントの製作時、手を解剖・運動学に沿ってトレースし、様々なスプリントの製作を可能とする製作手段である。

たんかしそうぐ
短下肢装具
ankle foot orthosis

下肢装具で、下部より足底に及び、足関節を制御し、間接的に膝関節を支持する。支柱付きやプラスチックのものもあり、免荷装具もある。

たんききおく
短期記憶
short-term memory

記録から想起までの時間が数秒から数分までの記憶をいう。短期記憶は即時記憶(immediate memory)と呼ばれることもある。短期の記憶の中で、感覚刺激の後にごく短時間感覚した内容を保持する機能を短期記憶から分けて、感覚記憶として分類する考え方もある。情報処理の過程で使われる短期記憶は作業記憶(working memory)と呼ばれる。(→感覚記憶)

ちいきかつどうしえんせんたー
地域活動支援センター
local activity support center

障害者自立支援法第80条第1項の規定に基づく通所型の利用施設。障害児・者が地域において自立した日常生活または社会生活を営むことができるよう、創作的活動または生産活動の機会の提供、および社会との交流の促進をはかるとともに、日常生活に必要な便宜の供与を適切かつ効果的に行うもので、市町村が中心となって取り組む日中活動のサービス体系に含まれる。

ちいきさぎようりょほう
地域作業療法
community-based
occupational therapy

「地域リハビリテーション」と同じように、病院や施設での作業療法と区別し、在宅や地域社会における作業療法を称する場合もあるが、本来はその地域における総合的な作業療法のありようをいう。

ちいきせいかつ
地域生活
community life

子どもは年齢とともに、家庭から近隣および保育所・幼稚園、学校、職場などの地域社会の中で生活し、育てられていく。作業療法においても生活の場である地域の状況を把握し働きかけていく。

ちいきせいかつしこうしえん
地域生活移行支援
* *

退院の促進を図るのみでなく、退院(退所)する精神障害をもつ人たちが、地域生活へ円滑に移行するための支援をいう。生活の場の整備、在宅生活の支援、日中活動の支援など、地域で生活を営むうえで必要となる具体的な支援を行うとともに、地域の支援者と引き合わせて関係を構築する支援も重要となる。

ちいきせいかつかつどう

地域生活活動

community living activities

手段的日常生活活動の範囲を超えた、子どもたちが地域で生活するために必要な活動をいう。子どもたちの場合は、保育園や学校生活が小さな地域社会としてその活動を学習することになる。公共の場でのマナーやルールの理解、保育園や学校生活で必要なこと(上履きをはく、鞆、帽子の片づけ、共同で使用する道具の管理や整理)、小さな社会人としての共同作業への参加と役割遂行などである。測定尺度によっては、移動領域や社会的機能領域を示すものである。

ちいきとくせい

地域特性

community characteristics

生活の場としての地域には、その地域がたどってきた歴史に基づく特性があり、当事者は否応なくその影響を受けることになる。大きくは住民相互の交流があり助け合いが成立する地域と交流が薄い地域とに分類できる。こうした地域特性の把握は、作業療法士が当事者の生活に関与する上で重要な課題となる。

ちいきふくし

地域福祉

community welfare

その地域に住む人たちの誰もが幸せになるために、地域住民一人ひとりの取り組み(自助)や地区民同士の助け合い(互助)、関係機関の支援などの総合的な取り組みをいう。

ちいきりはびりてーしよん

地域リハビリテーション

community rehabilitation

ときに病院や施設におけるリハビリテーションと区別し、在宅や地域社会におけるリハビリテーションのみを意味して使用する場合もあるが、本来はリハビリテーションに関係する機関や人々も含めた、その地域における総合的なリハビリテーションのありようをいう。

ちいきれんけいくりていかるばす(ちいきれんけいばす)

地域連携クリティカルパス(地域連携パス)

* *

地域連携クリティカルパスは、クリティカルパスを1施設内に限定することなく、急性期から回復期を経て、早期に自宅に戻れるように診療計画を作成する。対象者が受診するすべての医療機関で共有して、連携体制に基づく地域完結型医療を目指す。

ちーむあぷろーち

チームアプローチ

team approach

対象者に関わるリハビリテーション医・作業療法士・理学療法士・言語聴覚士・医療ソーシャルワーカー・看護師等の関連職種が協働してリハビリテーションにあたることでより高い効果が望める。従来は医師がリーダーとなり他の専門職がその指示に従って対象者のリハビリテーションを行うようなイメージであったが、近年では対象者・家族を中心にして同心円状に各専門職が協力し合うイメージになっている。

ちーむいりょう

チーム医療

medical team

内部障害の場合、総合病院における様々な科(産婦人科、新生児科、小児科、小児神経科、外科など)と連携をとり、子どもや家族を支援する必要がある。作業療法士には様々な医学的背景をもつ子どもたちに対応するための幅広い知識と、チームスタッフと人間関係を構築する力が必要となる。

ちーむまねじめんと

チームマネジメント

team management

目標達成のために集まったメンバーが、一つのチームとして最大の効果を発揮できるように管理すること。

ちえいになぶ

チェイニング

chaining procedure

行動変容技法の一つ。複雑な行動(課題)を1単位ずつに分けて行動連鎖を形成し学習を促す手法。目標とする行動(課題)がある場合、達成すべき行動(課題)をいくつかに分けて、そのプロセスの一つひとつを鎖にたとえ、それを順序正しくつなげていく作業をチェイニングという。

ちかく

知覚

perception

外界の事物からもたらされる物理的刺激や身体内部の状態を、感覚器官を通して受容し、中枢神経系での処理を経て意識へと至る過程、あるいは意識される内容を指す。

ちかくしすう

知覚指数

perceptual quotient

フロスティッグ視知覚検査で得られた知覚年齢、評価点より換算して求められた結果より算出された偏差得点である。

ちかくねんれい

知覚年齢

perceptual age

フロスティッグ視知覚発達検査により求められる視知覚能力の発達年齢。知覚年齢の基準は各年齢の全体の子どもの成績の平均値である。

ちてきしょうがい

知的障害

intellectual disabled

本用語は1999年の法改正に伴って用いられるようになり、精神医学的診断としての精神遅滞(mental retardation)とほぼ同義である。知的能力の分類は、WHOによるものが一般的であり、軽度(IQ50～70)、中度(IQ35～50)、重度(IQ20～35)と区分されている。DSM-IV-TRによれば、① 知的機能が明らかに平均より低い状態(おおむねIQ70以下)。② 適応技能の障害をもつ。③ 18歳以前に発症する、とされている。ここでいう適応技能とは、コミュニケーション、身辺処理、家庭生活、社会的スキル、コミュニティ資源の利用、自律性、健康と安全、実学的学業、余暇労働を示している。(→精神遅滞)

ちてきはったつ
知的発達
intellectual development

記憶, 推論, 論理性, 計画性, 学習能力, 思考過程などの, 様々な知的活動の変化, 発達の過程である. 知的機能の障害が発達期に現れ, 適応障害の困難が伴うことの定義であるが, 「身体は大人であるのに, なぜ理解できないのか, 動作が乏しいのか」という理解不足で就労の継続に支障をきたす場合がある.

ちのう
知能
intelligence

抽象的な思考, あるいは判断や推理などの高次な情報処理能力を指しており, 環境への適応と目的に合わせて対処しようとする能力のこと. (→結晶性知能, 流動性知能)

ちのうしう
知能指数
IQ: intelligence quotient

抽象的思考や概念などの知的能力の発達水準を知るために知能検査を施行した結果, 求められる知的水準の優劣を示す値である. この知能指数に対し, 心身両面の発達評価では発達指数が使われる. (→発達指数)

ちやくいしっこう
着衣失行
dressing apraxia

麻痺, 感覚障害, 失調, 不随意運動などの異常を認めず, かつ観念失行や観念運動失行がないにもかかわらず着衣を行なうことができない病態. この症状は右半球損傷によっても左半球損傷によっても起こるが, 半側空間無視や半側身体失認, あるいは構成失行を伴っていることが多く, 純粋例の存在は疑問視されている. 概念的には, 動作の中の「自己身体を客体とする区分」を扱っている点で意味がある.

ちゅういけっかんだうせいしょうがい
注意欠陥多動性障害 (AD/HD)
AD/HD: Attention Deficit / Hyperactivity Disorder

注意欠陥, 多動, 衝動性を主症状とする広義の発達障害であり, 混合型, 不注意優勢型, 多動性-衝動性優勢型の3タイプに分けられている. 一般的にはADHDと略記されることが多く, ICD-10では多動性障害 (hyperkinetic disorders) としている.

ちゅういしげん
注意資源
attention resource

ある時点で同時に情報を取り入れ処理するとき, 情報処理の仕方に限界的な容量があることを指す心理学的概念のことであり, 人が同時に配分できる注意の量をいう.

ちゅういしょうがい

注意障害

disturbance of attention

注意の異常と考えられている。行為や思考過程において、たくさんの外来刺激の中から特異的な刺激だけを選択し、意識を向け続けたり、不必要な刺激を却下したり、さらに必要な刺激を取り入れる能力が低下することという。現象として、①注意が減弱する、②転導しやすくなる、③不必要な刺激に注意が向く、④同時に必要な刺激への注意が失われる、などがあげられる。(→ブジランス)

ちゅうしんがたそんしょう(まひ)

中心型損傷(麻痺)

central cervical spinal
cord injury

頸髄中心部が損傷する不全損傷(麻痺)の一類型。下肢障害が比較的軽度で上肢特に巧緻動作の障害が問題となる。予後は比較的良好だが高齢者に多く発生する。

ちゅうすうしんけいきこう

中枢神経機構

central nervous system

脳と脊髄からなり、末梢の受容器から来る情報を得て処理するとともに、末梢神経系を介して効果器に生体内外の刺激に適応するよう情報を伝える機構。

ちようかしそうぐ

長下肢装具

knee ankle foot orthosis

下肢装具で、時に骨盤帯を含むが、大部より膝・足関節の運動を制御し、足底まで達する構造をもつ。目的により免荷装具もある。

ちようききおく

長期記憶

long-term memory

半永久的に保持される記憶のことであり、および蓄えられた知識を制御するメカニズムも含む。記憶される内容や性質によっていくつかの下位分類が提案されている。例えば、手続き記憶と宣言的記憶を分類し、さらに宣言的記憶をエピソード記憶と意味記憶に区別するという考え方がある。

ちようこうれいしゃかい

超高齢社会

a "super-aged" society

高齢者の増加により、人口構造が高齢化した社会のこと。指標としては明確には定義されていないが、一般的には総人口に占める高齢人口(65歳以上)の比率が21%以上になっている状態を示すことが多い。

ちようかく(ぜんご)いじょう

直角(前後)移乗

transfer

車いすと移乗対象を直角方向に接し、肘をロックし肩甲帯の運動で前後方向に水平移動させる移乗。頸髄損傷者ではC6で可能となる。

ちりょう

治療

treatment・therapy

作業療法の場合、作業遂行上の問題を解決するために、個人の身体的・精神的側面やADLや遊び・仕事面などの活動面、または社会的活動への参加で変化を起こす働きかけをいう。つまり、①直接的に対象者の心身機能にアプローチする方法(機能改善)、②自助具、福祉用具などの適応、代償・代替方法の指導(機能代償)、③家庭・学校・地域の人的・物理的・社会的環境に働きかける方法(環境調整)がある。障害の特性や発達時期などによって重点が置かれる方法は違ってくる。

ちりょうきょうどうたい

治療共同体

therapeutic community

主としてロンドンのベルモント病院のM. Jonesが提唱し、実践した精神医療形態である。1943年頃から取り組みがなされたが、当時の精神病院では医師－看護婦－患者という上下関係があり、これが治療の妨げになっていると考えたM. Jonesは民主的な平等主義に変えることが治療に役立つと主張し、病院内の民主化、寛容な態度、院内の自治制度の確立などを目標において実践した。こうした考え方は、今日の精神科リハビリテーションに影響を与えるとともに、現在の患者中心の地域精神医療の展開につながっている。

ちりょうけいかく

治療計画

therapeutic plan

治療目標の設定と治療プログラム(治療内容、方法、手段、時間)を立案することをいう。

ちりょうけいやく

治療契約

therapeutic contract

治療者と患者が治療に関する様々な約束事を話し合い、お互いにその内容に同意ができたと確認できたときに、明確な言葉にして取り決めるを行うことである。途中で違反を起こせば、取り決めた措置を行うか、それを拒否すれば治療関係を解消する。

ちりょうこうぞう

治療構造

therapeutic structure

治療状況を構成する有形無形の条件をいい、時間や頻度、場所、作業活動などの外面的構造と、取り決めや約束などの内面的構造に分けられる。どのような「取り決め」を行い、「場面設定」をするかは治療目標によって異なるが、治療構造はその後の治療者と患者の関係を規定するため非常に重要となる。

ちりょうぶろぐらむ

治療プログラム

therapeutic program

疾病、外傷、障害を治癒、回復させるために、またはそれらによる症状を改善するための手段、方法を示したもの。

ちりょうようそうぐ
治療用装具
therapeutic orthosis

治療の目的で身につける装具のこと。代表的なものに整形外科領域で使用されるコルセット、ギブス、義足、義眼などがある。治療上必要があると認められて装着した場合、保険者に対して医師の意見箱、領収書などを添えて申請すると、療養費として現金給付される。なお、美容の目的などで用いる眼鏡、補聴器などは対象にならない。

つうえんせんたー
通園センター
nursery school for
handicapped children

肢体不自由児と精神発達遅滞児のための療育機関である。公的機関と私的機関があり、親子で通園する機関と子どものみで通園する機関の両方がある。一日中の預かりと時間を決めた預かりがある。

つうかしょうこうぐん
通過症候群
transitional syndrome

脳損傷急性期にみられる重要な症状で、不穏、易興奮性、攻撃性などの問題行動が主である。一般に意識障害からの回復の途中でみられる。

つりぐ
吊り具
sling

リフトによって人を持ち上げる際に使用する、人との接点となるものである。身体機能により、使用場面により、また介助者の状況により、最適な形、大きさのものを使い分けることを原則とする。脚分離型、シート型、セパレート型、トイレ用などの種類がある。

ていけっとう
低血糖
hypoglycemia

糖尿病の薬物療法中に最も高頻度に見られる急性合併症で、血液中のブドウ糖が少なくなりすぎた状態である。早朝空腹時の血糖値は60～100mg/dl、食後も160mg/dl以下であるが、血糖値50mg/dl以下に低下したときに低血糖と称す。一般的に血糖値が70mg/dl以下になると生体はカテコラミンなどの分泌増加により血糖値を上昇させようとして、冷汗や顔面蒼白などの交感神経系症状が出現する。

でいほすびたる
デイホスピタル
day hospital

日中に外来以外の形態で診断と治療を行い、夜間や週末を自宅その他の居住施設で過ごす精神保健サービスで、部分入院(partial hospitalization)とも呼ばれる。Gelderら(2006)はデイホスピタルを、急性期デイホスピタル(入院治療の代替)、移行期デイホスピタル(早期退院を促進)、デイトリートメント(改善しない人に濃厚な治療を提供)、デイケアセンター(長期患者をサポート)の4種類に分類しており、イギリスの包括的保健サービス(NHS)では、急性期デイホスピタルをエビデンスの高いサービスとして推奨している。(→精神科デイケア)

てきおう

適応

- ①indication,
- ②coping,
- ③adjustment
- ④adaptation

①薬剤や手術, リハビリテーションプログラムなどの治療法が, 病状に適合していること.

②困難に対処し, 工夫や努力によってそれを乗り越え, あるいはそれと上手に共存すること.

③環境の変化や刺激に対して, 身体的ならびに精神的な形態・構造および機能を, それに適合, 合致させ調整すること.

④環境に合わせて馴染んでいくこと.

てきおうてきしせいせいぎょ

適応的姿勢制御

adaptable postural control

後天的に学習によって獲得された運動の環境や課題への適応的な姿勢調整. つまり, あらゆる運動の熟練的な側面を担っているといえる. 中枢機構としては間脳, 大脳皮質が考えられている.

てきおうてきへんか

適応的变化

adaptable change

人は環境に適応して自分の能力を発揮していくだけではなく, 環境に働きかけ, 環境を変えることによって主体的に変化していくことも適応的变化と捉える.

てくのえいど

テクノエイド

technical Aids

ハンディキャップのある人の自立を支援する福祉機器や用具のこと. 医師やセラピスト, デザイナー, メーカー技師などがチームを組んで, 障害者が日常生活や訓練で必要とする用具を開発する.

てこ

てこ

lever

力点, 支点, 作用点があり, 力点に力を加え, 支点を変えることで加えた力より大きな力, あるいは小さな力を作用点に発生させる道具.

てんい(かんじょうてんい, とらんすふえあれんす)

転移(感情転移)

transference

精神分析の用語で, 患者が過去に重要な人物(多くは両親)に対してもった感情を, 目の前の治療者に向けてくことをいう. 肯定的・親近的な感情を陽性転移, 否定的・拒否的な感情の転移を陰性転移と呼ぶ.

てんかんほっさ

てんかん発作

epilepsy seizures

脳の神経細胞の部分的, あるいは全般的な一過性過剰放電によって, 運動, 知覚, 自律神経, 精神などの諸機能に突然かつ一時的な異常が生じ特有な症状を呈することで, てんかんの主要な症状である.

でんどうくるまいす
電動車椅子
electric wheelchair

電気を動力源とする車椅子である。歩行能力をまったく失った場合や、手動車椅子では実用に至らない場合などに、屋内外の近距離移動を自立するために使用する。基本構造は、シート、バックレスト(背もたれ)、肘おき(肘かけ／アームレスト)などの本体部分と、駆動輪(大車輪)、自在輪(キャスター／小車輪)、ブレーキ、制御装置(コントロールボックス)、バッテリー、充電器などからなる。

とうえい(ぶろじえくしょん)
投影
projection

自分の心理的状态や思考を他者や自分以外の事物に映すことをいい、自分の気持ちを代弁するような音楽を聴くなど意識的な場合もあれば、無意識的なレベルで起きることもある。

どうきづけ
動機づけ
motivation

行動を始発させ目標に向かって維持する機能である。動機づけは行動の源で、食事・睡眠・排泄などの生命維持に関わる「生理的動機づけ」と、行動を規定する「社会的動機づけ」に分けられ、社会的動機づけはさらに「達成動機づけ」、「内発的動機づけ」、「外発的動機づけ」に分類される。(→達成動機づけ、外発的動機づけ、内発的動機づけ、社会的動機づけ)

とうごうしつちようしょう
統合失調症
schizophrenia

主要な精神疾患の一つで、WHO国際疾病分類第10版(ICD-10)ではF20に分類される。発病率は全人口の1%程とされ、日本では明治期より精神分裂病と呼ばれていたが、病名が与える誤解や偏見をなくすために2002年より統合失調症と呼称変更された。思考、知覚、自我意識、意志・欲望、感情など、多彩な精神機能の障害がみられる。根本的な原因は現在も不明であるが、神経伝達物質の不均衡などの脳代謝異常と、心理社会的な要因(ストレス)の相互作用が発症に影響すると推測されている。慢性経過をたどり様々な生活障害を生じやすいため、精神科リハビリテーションの対象となりやすい。

どうさがくしゅう
動作学習
motion learning

以前の経験によって起こる行動の永続的な変化。生物学的には適応現象としてとらえられる。一定場面におけるある経験が、その後同一または類似の場面における個体の行動、あるいは行動の可能性に変容をもたらすもの。

どうさかんさつ

動作観察

motion observation

動作を分析するにあたり、観察から所見を得ること。観察に際しては、骨関節系、神経筋系の影響による動作の効率性や実用性のみならず、認知・心理機能や環境因子の影響なども考慮する。

どうさのうりよく

動作能力

motion capacity

“動作”と“能力”の複合語。動作する能力、すなわち自由意志に基づき、目的をもって課題を達成させる能力のこと。その評価に際しては、身体運動のみならず意欲や認知能力・コミュニケーション能力などの精神心理面についても考慮する必要がある。

どうさぶんせき

動作分析

motion analysis

動作分析では、作業に含まれる人間の身体運動が分析対象に中心である。動作を基本動作に分割し、それらの基本動作を個別にあるいはほかの基本動作と関連づけながら分析する。

とうじしゃかつどう

当事者活動

party activities

障害をもつ人自身が、生活上の問題や課題を解決するために集まり、相互に助け合ったり(セルフヘルプ)、地域社会などに対して、スティグマの軽減を図ったりするための活動をいう。

とうたつきのう

到達機能

reach function

上肢機能を構成する要素であり、物を把持し操作するために手を伸ばす機能を意味する。肩・肘の運動が主に作用する。肩が方向舵の役割を、肘が伸縮装置の役割を有する。

とうつう

疼痛

pain

炎症により身体組織中にみられる痛み刺激を起こす物質の持続的な産生が問題となり疼痛が誘発される。関節リウマチには炎症から直接的に誘発される一次的疼痛と、一次的疼痛のために身体的活動が制限され、姿勢や筋・関節運動の偏りが生じ、筋の萎縮や関節拘縮の発生により運動時の痛みとなる二次的疼痛がある。

どうてきすぷりんと(どうてきふくし)

動的スプリント(動的副子)

dynamic splint

スプリントの構造に関節運動を許す材質の弾性・継手・アウトリガーなどの構造をもつもの。機能的スプリントと非機能的スプリントに分けられる。

どくじしょうがい
読字障害
dyslexia

学習障害の一種である。読み書きの学習レベルが年齢や知的発達、教育の程度から期待されるレベルより十分に低い状態をいい、発生率は国(使用言語の違い)によって異なることが指摘されている。アルファベット言語圏では学齢児の5～7%がこの障害をもつといわれているが、日本での発生率はまだ不明である。

とくしゅきょういく
特殊教育
special education

障害の種類や程度「知的、肢体不自由、病弱虚弱、弱視、難聴、言語、情緒」等に応じて盲・聾・養護学校や特別支援学級といった特別な場で指導を行うことにより、手厚くきめ細かい教育を行うことに重点が置かれる。(→特別支援教育)

とくべつしえんきょういく
特別支援教育
special support education

従来特殊教育が対象としてきた肢体不自由や知的障害だけでなく、LD、ADHD、高機能自閉症を含めて障害のある児童生徒の自立や社会参加に向けて、その一人ひとりの教育的ニーズを把握して、そのもてる力を高め、生活や学習上の困難を改善または克服するために、適切な教育や指導を通じて必要な支援を行うものである。教育機関と医療・福祉・労働などの連携をはかって支援を行うとしている。(→特殊教育)

とじこもり
閉じこもり
withdrawal syndrome

家の中に閉じこもり外に出なくなってしまうこと。身体的、心理・精神的、社会的な要因が背景にあるといわれている。身体活動量の低下や社会的接触の低下により、廃用症候群を引き起こす原因にもなる。閉じこもりの判定には、外出頻度が用いられることが多い。

としゅかいにゆう(はんどりんぐ)
徒手介入(ハンドリング)
handling

キーポイントコントロールという手技では頭部や肩・肩甲骨、脊柱、骨盤、股関節などの身体の中枢部を屈曲や伸展、あるいは回旋に操作することで過緊張を軽減し、作業活動の遂行に必要な伸展、屈曲、回旋の運動パターンを促す。体重負荷や圧迫などの手技もあり、いずれも作業活動の遂行の中で姿勢や運動のコントロールに用いる。

とつぷだうんあぶろーち
トップダウンアプローチ
top-down approach

各心身機能の評価から始める従来の方法とは異なり、日常の作業の問題から評価を始める方法。疾患や障害に焦点を当てるのではなく、意味、目標、目的をもつ作業に焦点を当てることが強調される。

ないてきよういん

内的要因

internal factor

行動の原因帰属理論や動機づけ理論に関連する社会心理学の用語であるが、対概念である外的要因とともに幅広い領域で用いられている。例えば、人が何かの課題を達成しようとするときには、内的要因である個人の性格や考え方、能力や努力などが課題遂行に影響を及ぼし、外的要因としては課題の困難さや偶発的な出来事などが影響を及ぼすことになる。(→外的要因, 達成動機づけ)

ないはつてきどうきづけ

内発的動機づけ

spontaneous motivation

好奇心や関心によってもたらされる動機づけで賞罰に依存しない。知的好奇心の高い幼児期には特に盛んで、自分が課題を設定しそれを達成しようとする状況では、自発的な思考や問題解決に向かう自律性、解決によってもたらされる有能感が得られやすく、これらがさらに内発的な動機づけを高める。内発的動機づけに基づいた行動では学習効率が高く、継続性も得られやすいことが知られている。(→動機づけ, 達成動機づけ, 外発的動機づけ)

ないぶしょうがい

内部障害

invisible impairment

世界保健機関(WHO)により提唱された国際障害分類試案の機能障害の一つに属し、精神心理系、言語聴覚系、視覚系、筋骨格系を除いた内臓の機能障害の総称であり、呼吸、循環、消化、泌尿などの機能が障害された状態のことを指す。

ならていぶ

ナラティブ

narrative

ある出来事についての記述を、何らかの意味のある連関によってつなぎ合わせたもの。物語や語りを意味し、ナラティブに基づいた医療をNBM(Narrative Based Medicine)という。医療においてNBMがその特徴を最もよく発揮するのは、いわゆる一般医療、総合医療の分野においてであり、対象者の個別性を尊重するという作業療法の特徴と親和性が高いといわれている。

にーず

ニーズ

needs

一般的には対象者のもつ「希望」や「願い」を指すが、表現された訴え(complaint)、悩み・困っていること(trouble)、必要(不可欠)なこと(need)、要求(demand)を区別する立場もあり、この場合、対象者にとって必要なこと、不可欠なことがニーズと解される。リハビリテーションの過程では、その人らしい生活を実現するための目標をニーズと呼ぶこともあり、ニーズをリハビリテーションプログラムに結びつけるためには、援助者とのインフォームドコンセント(説明と合意)が不可欠となる。

にちじょうせいかつかつどう(えーでいーえる)

日常生活活動(ADL) activities of daily living

ADLとは、一人の人間が自立して生活するために行う基本的な、しかも各人ともに共通して毎日繰り返される一連の身体的動作群をいう。この動作群は、食事、排泄などの目的を持った各作業(目的動作)に分類され、各作業はさらにその目的を達成するための細目動作に分類される(日本リハビリテーション医学会)。

にちじょうせいかつかんきょう

日常生活環境 daily living environment

対象者の生活に影響を与える環境をいう。家庭や施設(医療・保健・福祉施設)を問わず、対象者の生活に最も影響を与えるのが衣・食・住・生活などの日常生活の環境である。このため、対象者の生活を安定化させるために環境整備の視点が必要となることが多い。

にちじょうせいかつじりつしえんじぎょう

日常生活自立支援事業 * *

福祉サービスの利用や日常的な金銭管理などが困難な高齢者や障害者を対象に、本人との契約に基づき福祉サービスの利用援助や金銭管理サービス、書類等の預かりサービスの提供を行い、サービスを通して日常生活の支援を進めていく事業。

にちないへんどう

日内変動 diurnal fluctuations

病気や障害による症状が一日の時間経過の中で変動すること。うつ病を例にとると、朝は抑うつ症状が強いが、昼過ぎから夕方にかけて比較的よくなるという気分状態の変化があり、活動性にも影響してくる。

にてんしきべつ

2点識別 two point discrimination

触・圧覚の識別能を測る尺度(2点識別閾)が2点識別(two point discrimination:2pd)で、皮膚上に2つの触刺激を同時に加え、刺激が2つの点であると識別できる最短距離を測定する。

にほんさぎょうりょうほうしきょうかい

日本作業療法士協会 Japan association of occupational therapists

1966年9月に設立された作業療法士の職能団体。作業療法の質の向上や普及活動により国民医療に寄与することを目的としている。

にゅうようじにじけんこうしんさ

乳幼児二次健康診査

second health checkups for infants

乳幼児の健康診査は各市町で行われていて、一次健康診査と二次健康診査が実施されている。健康診査は、生後4カ月、10カ月、1歳半、3歳、5歳時に行われていることが多く、身長、体重、頭囲などを測定し、発達レベルのチェックを行っている。一次健康診査で気になる点が生じた場合、二次健康診査で専門家(医師、PT、OT、ST、心理士など)による詳細な検査が行われる。二次健康診査の結果により、経過観察が必要な場合には病院や療育施設、保育施設などが紹介され、フォローアップがなされていく。

にんげんかんけい

人間関係

human relationships

人と人との関係。自分と他者との付き合いや関係。人は、家族、友人、同僚などの他者と関わりながら、その関係の中で生活をしている。この関係は、人の心理や行動にとってプラスにもマイナスにも影響を与える。

にんげんさぎょうもでる

人間作業モデル

the model of human occupation

自分にとって意味のある作業参加(仕事、ADL、遊び)について、その作業適応(作業機能)状態を人生において大切なこと(作業同一性)がどの程度うまくやれているか(作業有能性)という観点から把握するKielhofnerによって提唱された臨床実践モデルである。作業参加は作業遂行と技能が入れ子状態になった「行為」である。この行為は個人的資質(意志、習慣化、遂行能力)と環境との間に創発するダイナミックな現象なので、これらの概念を理解するための評価が開発されている。

にんげんはったつ

人間発達

human development

人間の器官や機能が形態的・量的・質的に変化する過程であり、社会の一員として必要な社会的・文化的能力を身につけていく過程である。個体の変化とともに環境も刻々と変化し、その相互作用の中で適応していく過程が発達といえる。

にんち・しこうしょうがい

認知・思考障害

cognitive・thought disorder

統合失調症の思考障害として古くから思考形式の障害(思考抑制、連合弛緩、強迫思考等)と思考内容の障害(被害関係念慮、妄想等)が指摘されている。一方、近年の脳科学の進歩に伴い、知覚機能、注意機能、記憶機能、実行機能などを含む統合失調症の認知障害が重要視されるようになり、現在では思考障害も認知障害の視点から説明されている。

にんちはったつ

認知発達

cognitive development

認知発達とは認知能力が発達に伴い成熟する過程をいう。ここでいう認知能力とは、知覚・判断・決定・推論・記憶・言語などから、生得的もしくは経験的に獲得した情報に基づいて、外界の事象に関する情報を選択的に取り入れ、処理する認知能力をいう。

にんちりょうほう(こぐにていぶせらびい)

認知療法・認知行動療法

cognitive therapy /
cognitive behavioral
therapy

認知療法はアメリカの精神科医アーロン・ベックが1960年代に始めた短期精神療法で、うつ病やパニック障害の治療に用いられた。認知療法では、外的な出来事が感情や身体反応を直接引き起こすのではなく、本人の認知の仕方が症状に影響を及ぼすと考え、患者の「認知の歪み」に焦点を当てる。治療では、反証や多面的解釈などを取り入れ、患者と治療者が一緒に認知のあり方を検討し、認知の歪みを修整していくことが重視される。対処行動や適応的な行動習慣を学習するという行動療法の技法も含み、現在では認知行動療法と呼ばれることが多い。「認知療法・認知行動療法」は2010年4月より精神科専門療法料が認められ、入院以外のうつ病等の気分障害患者に対して実施した場合に算定可能となった。(→SST)

ねぐれくと(ねぐれくと)

ネグレクト

neglect

親または親に代わる保護者が、子どもへの保護の怠慢または拒否により子どもの健康状態や安全を損なう行為。虐待の一種であり、不適切な養育あるいは養育拒否ともいわれている。

ねつかそせいじゆし

熱可塑性樹脂

thermoplastic

熱により軟化する合成樹脂素材で、低温で軟化する素材と高温で軟化する素材に大別される。その多くは電気を通さず(絶縁体)、水や薬品などに強く腐食しにくい性質があるが、紫外線に弱く、太陽光に当たる場所では劣化が早い。また高温で硬化する素材は熱硬化性樹脂と呼ぶ。

ねっしょうせいはんこん

熱傷性瘢痕

burn scar

Ⅱ度深達性熱傷～Ⅲ度熱傷および植皮術後には、創治癒過程において、線維芽細胞の増殖、コラーゲンの産生増加や収縮などによって、しばしば肥厚を伴った瘢痕が形成される。これは受傷後1～6ヶ月で瘢痕組織がふくらみ肥厚し、5.6ヶ月をもって厚みは頂点に達し、数年かけて減じてゆく。

ねっとわーく
ネットワーク
network

ネットワークとは、一般的には「資源との有機的な結びつきとその作用」という意味である。「環境の中の人」を支援するために、支援者が、資源である外的なもの（法律や制度、施設・設備、サービス等）と、対象者の内的なもの（モチベーション、能力、自信等）の両方に着目するとともに、インフォーマルな友人や知人などのサポートも大切にしながら、ネットワークを構築していく。

のうがいしょう
脳外傷
brain Injury

事故などによる外傷の結果、脳実質に生じた損傷をいう。外傷性脳損傷。TBI (traumatic brain injury) と呼ぶことも多い。脳の軸索が広範囲に損傷を受けるもの。軽度から中程度の損傷においては、早期回復が期待されるが、高次脳機能障害に至った場合、記憶力、注意力の低下や人格形成やコミュニケーション能力、社会適応能力に問題が生じるほか、四肢の麻痺が生じることもある。

のうがぞう
脳画像
brain imaging  neuroimaging

臨床でよく用いられる脳画像には、脳の形態を画像でみることのできるCT (Computed Tomography) やMRI (Magnetic Resonance Image), また安静時の脳血流を機能画像で描出するSPECT (Single Photon Emission Computed Tomography) などがある。血管造影法 (angiography) による3次元画像解析により、微細な脳血管構造の状態を確認できる。

のうきのうまっぴんぐ
脳機能マッピング (脳機能地図)
brain mapping

脳の各部位がどのような働きをしているかを、あたかも脳を地図に見立てたかのように“マッピング”し、その結果から図などを作成すること。これにより脳の各部位ごとの機能を明らかにすることを目的とする。現在多くの脳機能マッピングは大腦皮質を対象としている。その方法には、CT、MRIなどから脳の形態の観察を行い特定の部位の機能を直接推論するもの、個々の神経細胞を直接調べるもの、血流・代謝を計測するもの、神経細胞の情報伝達に伴う電位変化を大域的に測定するものなどがある。

のうけっかんしっかん
脳血管疾患 (CVD)
cerebrovasucular disease

脳血管の異常に基づく疾患の総称で、脳梗塞、脳内出血、クモ膜下出血などがある。半身の運動麻痺、感覚障害、高次脳機能障害などの後遺症により、活動や社会参加に制限をきたす。重症度や回復段階を踏まえた対応や、医療機関と在宅支援機関との連携等が必要となる。

のうしょうがい
脳障害
brain damage

胎生期、周産期脳障害は胎児脳の形成過程に由来するため、その病巣は受胎後週数に依存した選択的脆弱性がある。早期産低出生体重児では脳室周囲白質軟化症が起こりやすい。その他、脳梗塞、脳形成障害、脳室内出血、低酸素性虚血脳症などがあり、脳画像診断の進歩によりその病態理解は進んでいる。

のうりょく
能力
ability

物事を遂行する力。日本作業療法士協会ガイドラインにおいては、基本的能力(心身機能と身体構造に基づくもの)、応用的能力(日常生活活動を支えるもの)、社会的適応能力(社会的活動および社会参加を支えるもの)とに分類される。

のーまらいぜーしょん
ノーマライゼーション
normalization

人は障害の有無にかかわらず、互いが区別されることなく、社会生活を共にすることが自然なことであり、本来の望ましい姿であるとする考え方。デンマークのバンク・ミケルセンが、知的障害者の施設処遇改善運動の目標として「障害をもったまま普通の生活を送れるような生活条件(必要な支援)を提供すること」という基本理念を掲げ提唱し、その後障害者施策における「選択権と自己決定権」を重視する自立生活運動に多大な影響を与えた。

ぱーきんそんしょうこうぐん
パーキンソン症候群
parkinson's syndrome

パーキンソン病、およびパーキンソン病症状を呈する疾患の総称である。安静時の振戦、筋固縮、動作緩慢(無動・寡動)を主徴とし、姿勢反射(反応)障害、小刻み歩行・加速歩行、前傾姿勢、仮面様顔貌などの症状がみられる。また、認知症やうつ症状を合併する場合がある。これらの症状をすべて合併したもの、または一部がみられるものをいう。

はあく・はじきのう
把握・把持機能
grasp, prehension

物をつかみ保持する作用を意味する。手・指の機能が主に作用する。手関節や前腕は、手指が有効に作用できるように位置を調整する機能を有する。物の把持や保持には手指の屈曲(曲げて握る)の機能だけでなく伸展(物の大きさに開く)の機能が重要である。

はあくせいみおとにあげんしょう
把握性ミオトニア現象
myotonia

物体を把握した場合に筋収縮が持続して弛緩が起こりにくい現象である。手を強く握りしめた後、開こうとしてもなかなか開けられない様な症状(把握性筋強直)をさす。筋強直性ジストロフィーが筋肉の萎縮、脱力(筋ジストロフィー)と共に、ミオトニアを示す代表的疾患。

ぱーそんせんたーどけあ

パーソンセンタードケア

person-centred care

認知症をもつ人を一人の人として尊重し、その人の視点や立場に立って理解し、ケアを行おうとする認知症ケアの考え方。

ぱーとなーしっぷ

パートナーシップ

partnership

協力関係・共同・提携という意味。行政、NPO、企業、セラピスト、患者、支援者、対象者など、立場の異なる組織や人同士が、明確な目的のもとに、対等な関係を結び、それぞれの得意分野を生かしながら、あるいは相互の考えを共有することにより、連携し協力し合うこと。

はいきのうけんさ

肺機能検査

pulmonary function test

換気機能やガス交換機能を調べる検査。一般的に行なわれているのはスパイロメーターを用い、次の項目について調べ、結果から肺機能を診断する。肺活量、%肺活量…年齢や性別から算出された予測肺活量(基準値)に対しての、実測肺活量の比率、努力性肺活量、1秒量…努力性肺活量のうちの最初の1秒間に吐き出された空気量、1秒率…努力性肺活量に対する1秒量の比率、残気量…息を吐ききったあとに、なお肺内に残っている空気量。

はいよう・ごよう・かよう

廃用・誤用・過用

disuse・misuse・overuse

廃用とは使わないことが続くこと、誤用とは効果的でない間違った使い方を続けること、過用とは使いすぎ、を指す。ひとつの動作の中に、三つの要素が混在しており、筋力低下、筋萎縮、関節拘縮を助長するため作業分析や動作分析が重要である。

はいようしょうこうぐん

廃用症候群

disuse syndrome

疾病、外傷などにより、安静臥床を強いられたり、また生理的加齢によって日常生活における心身活動が過度に低下した場合に起こる、局所的、全身的な機能の低下を廃用症候群という。廃用症候群は、関節拘縮、筋廃用萎縮はもちろんのこと、心肺機能の低下、消化器機能の低下、起立性低血圧、また精神機能低下まで広範にわたる。

はいんりっひのほうそく

ハインリッヒの法則

Heinrich's law

米国のハインリッヒが労働災害の発生率の分析をしたもので、保険会社の経営に役立てられている。1件の重傷事故の背景には、29件の同種の軽傷事故があり、この背景に300件の傷害のない事故が存在し、さらに数千・数万件の危険な行為が存在していたという調査結果に基づいている。

はくないしょう
白内障
cataract

高齢者に多い眼疾患。水晶体を構成する蛋白質が変性し、灰白色や茶褐色ににごり、物がかすんだりぼやけて見えたりするようになる。根本的な原因は解明されていない。40歳代後半に始まり、加齢につれて増加する。また、80歳以上の高齢者はほとんどが何らかの形で白内障の症状を引き起こしているといわれるが、進行の速さには個人差があり、目が見えづらくなるといった症状に至るとは限らない。

はじそうぐ
把持装具
prehension orthosis

手関節運動と手指のテノデーシス様作用の原理を基にした把持を目的とする装具。特に手関節の背屈運動を利用し、手指の把持力に変換している。長対立装具の手関節橈側に手継手をつけ、前腕部と手指を継手つきの支柱で接続して、手関節を背屈すると示・中指が屈曲して母指との間で物をつまめるようにした装具が一般的である。

はったつかだい
発達課題
developmental task

「人が人生において各発達段階で達成しておかなければならない課題」であり、「次の発達段階にスムーズに移行するために、それぞれの発達段階で習得しておくべき課題がある」とされる。また、各段階には健全と相反する危機(crisis)が存在し、健全な傾向をのばし、危機的な傾向を小さくすることを基本的考えとする。教育心理学者のロバート・J・ハビグーストが最初に提唱し、その後エリック・H・エリクソンなど様々な心理学者がそれぞれの発達課題を提言しており、その内容は一様ではない。

はったつき
発達期
development period

自分の身体の制御方法の修得や物の操作方法の修得、言葉の操り方と基本的な思考機能の獲得、基本的な日常生活の仕方の修得、基本的な付き合い方や社会(家族・友達社会)的規範等の学習などをする期間こと。通常0歳から18歳までの期間をいう。

はったつしょうがい

発達障害

developmental disabilities
/developmental disorders

胎生期から18歳頃までに受けた障害が個人の一生涯にわたって様々な能力に影響を及ぼすものをいう。Developmental Disabilitiesは、米国において「発達障害サービスと施設建設法」で法律用語として用いられたのが始まりである。この用語は、発達期に発症した様々な医学的診断をもつ人たちを漏れなくカバーするために作られたものである。一方DSMでは、Developmental Disordersとして、中枢神経系の高次機能の障害が発達期に生じたものを指し、主として、①知的障害、②広汎性発達障害、③特異的発達障害(学習障害等)、④注意欠陥多動性障害の4種に分類される。一方、日本における発達障害者支援法では、上記の定義から知的障害をはずして定義されている。(→発達障害者支援法)

はったつしょうがいしやしえんほう

発達障害者支援法

act on support for
persons with
developmental disabilities

自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥・多動性障害などの発達障害を持つ者の援助等について定めた法律。日本において2005年4月より施行され、これまで福祉サービスからとり残されていた発達障害者の早期発見および支援に関する国、地方公共団体、国民の責務を明らかにしている。この法律では、発達障害として広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害が定義されている。(→発達障害)

はったつそうだんしえんせんたー

発達相談支援センター

developmental care support center

発達に滞りを示す子どもたちを抱えている両親は、居住している地域において、身体的・精神的な相談を求める。このような親子の相談に応じ、発達を促進するための支援を行っている地域のセンターである。このセンターは公的なものと私的なものがあり、相談者は自らの意思で選ぶことができる。公的なセンターは2007年度より、各地方自治体に1箇所を設置が義務づけられ活動している。

はったつねんれい

発達年齢

developmental age

発達検査により測定された結果を、同年齢児の標準値と比較して到達している年齢。知能検査の場合は、知的な能力が何歳の人の平均と同じかをあらわし「精神年齢(Mental Age, MA)」と呼ぶ。

ぱにつくしょうがい
パニック障害
panic disorder

不安神経症と呼ばれていた疾患の一部で、突然激しい不安にかられコントロールできない状態になる。パニック発作として動悸、息切れ、呼吸困難、めまい、圧迫感などがみられやすい。発作は数分で収まり時間が経つと元の状態に戻るが、発作が生じた場면을恐れ、また発作が起きるのではないかという「予期不安」が強く、「広場恐怖」や二次的な抑うつを訴えることも多い。原因は解明されていないが、脳内不安神経機構の異常によって起きると考えられている。

ばめんせっていほう
場面設定法
situational evaluation

実際の職場や生活環境に似せながらも、制御の可能な環境で作業をさせて、行動、能力および制約を体系的に観察する評価法である。

ばらだいむ
パラダイム
paradigm

トーマス・クーンが『科学革命の構造』で、「広く人々に受け入れられている業績、一定の期間、科学者に、自然に対する問い方と答え方の手本を与える」と提唱した造語。現在は、「思考の枠組み」として広く使われることが多い。

ぱらちえつこうじんこうどうひょうかしやくど
パラチェック老人行動評定尺度
Paracheck geriatric rating scale

施設に入所している高齢者を対象とし、身体機能、身辺処理機能、社会的交流技能3領域10項目について50点満点で評定する。1972年にミラーとパラチェックが開発し、1991年に日本・病院版が試作報告された。評定者は各項目について対象者を表現している項目に最も近いものに印をつける。所要時間は5分程度で、特別な機材も費用も必要としない。

ぱりあふりー
バリアフリー
barrier-free

バリアフリーデザインは、1960年代以降に米国で提唱された考え方である。バリアー(障壁)とフリー(自由な)を組み合わせた造語で、身体障害者に対する建築等における物理的障壁を除去するという意味で広まった。

はんか
般化
generalization

学習等に用いられる心理学用語で、特殊な規則や特性を一般化させること。古典的条件付けでは、条件刺激と異なる刺激にも同様な反応が生じることをいう。物理的類似性だけでなく意味的類似性に対しても生じ、条件反応も類似の反応が生じる場合がある。反対は弁別。

はんしゃ
反射
reflex

生体に加えられた刺激に対応するための基本的な神経系の反応様式。非随意的、瞬間的な固定された反応のこと。その特徴は、1. 刺激と反応の関係が同一条件下では常に同じになり、2. 知覚、意識などの意識現象と直接関係がない、また、3. 生得的な神経機構に基づくものである。

はんしゃてきせいせいせいぎょ
反射的姿勢制御
reflex-postural control

健常者の運動には背景に姿勢反射の要素が含まれていて、上位中枢の統括下で状況に合わせて修飾されているものと考えられている。遺伝的に引き継がれているものであり、主な中枢機構としては、脊髄、脳幹、小脳が考えられている。

はんせいちゅういしょうがい
汎性注意障害
generalized inattention

汎性注意とは、意識状態を一定に保ち、多くの刺激からその個体にとっての必要性、過去の経験、外的環境からの要求などにより適切な刺激を選択すること、そして継時的に意識の焦点を柔軟かつ合理的に移動させていく過程をいう。持続性・選択性・転導性・分割（分配）性の各障害と制御性の障害からなる。

はんそくうかんむし
半側空間無視
unilateral spatial neglect

大脳半球病巣と反対側の刺激に対して、発見して報告したり、反応したり、その方向を向いたりすることができない状態。その病態に対して対象者は無関心である。

はんどせらびー
ハンドセラピー〔手の外科領域療法〕
hand therapy

手の外科領域の機能障害に対する治療分野であり、手指や手関節の可動域や筋力、より微細な巧緻動作・応用動作の回復を目的とし、血管や神経等細部に至る専門的知識や技術を必要とする。

はんどろーる
ハンドロール
hand-roll

手指の良肢位を保つために利用される簡易な装具。手指の良肢位をとるため円柱状のロールを手で把持することで、母指対立と手指関節の軽度屈曲位をとらせる。汗を吸いやすいタオルなどで対象者の手の大きさに合わせ、ロールの直径や長さを決めて個々人に適切な装具を作製することもできる。

ぴあかうんせらー
ピアカウンセラー
peer counselor

同じ悩みや障害をもつ人に対して、仲間または先輩として、地域で自立した暮らしを創造していくための相談や情報提供に応じ援助する人をピアカウンセラーという。ピアカウンセリングは1970年代にアメリカの自立生活運動のなかで始まった。障害をもつ人自身が決定権や選択権を育て支えあい、隔離されることなく平等に社会参加していくことを目指したもので、ピアカウンセリングは自立生活運動における仲間（ピア）への基本姿勢となった。（→ピアサポーター）

ぴあさぽーたー
ピアサポーター
peer supporter

ピアサポーターとは同じ病気や障害、問題や環境を体験した人が、対等な関係性で仲間を支え合うことをいう。ピアサポーターは自らの体験を活かしながら仲間を支援する人たちのことである。最近ではピアカウンセラーと同義に用いられている。(→ピアカウンセラー)

ひこうきかつどう
飛行機活動
airplane activity

腹臥位で腹部を支点に上・下肢を挙上した抗重力伸展活動のこと。腹臥位伸展、飛行機姿勢、エアープレーンとも呼ばれている。

ひにん
否認
denial

否認とは、認めたくない事実、意識にすると辛くなるような問題がある場合に、現実を意識しないようにする、あたかもそれが存在しないように振る舞う無意識レベルの心理防衛(防衛機制)である。解離性同一性障害や依存症などにみられやすい。

ひぽこんどりーせいきちょう
ヒポコンドリー性基調
hipokondori trend of

森田療法の創始者、森田正馬が想定した神経症の素質で、いたずらに病苦を気にする精神的基調のことをいう。森田はヒポコンドリーを次のように説明した。「…心気性すなわち疾病を恐怖する意味であって、人間の本性である生存欲のあらわれである。したがって、これはすべての人が持っている性情であるが、その程度が強すぎるときにはじめて精神的傾向となり、異常となり、ますます神経質の複雑、頑固な症状を呈するようになる。」

ひょういんきのうひょうか
病院機能評価
hospital function evaluation

医療機関が質の高いサービスを提供していくために受ける第三者評価をいう。わが国では、医療機関の機能を学術的観点から中立的な立場で評価し、問題点の改善を支援する第三者機関として1995年に財団法人日本医療機能評価機構(Japan Council for Quality Health Care)が設立された。

ひょうかかてい
評価過程
evaluation(assessment)process

対象者を理解するために、必要な情報やデータを収集し、評価し解釈をする過程。評価に関する説明と同意—情報収集—諸検査等による評価の実施—焦点化—治療方針に関する説明と同意が欠かせない。通常は作業を行う中で、評価と治療が同時に進行することもある。

ひょうかてじゅん
評価手順
evaluation(assessment)procedure

検査法や検査項目の選択、評価の実施、検査結果の解釈とその検討までの一連の評価を実施するための手続き、段取り。

ひょうかもくてき

評価目的

evaluation(assessment)purpose

対象者に関する情報やデータを収集し評価するための理由。作業療法導入時や評価の際には、この評価目的を対象者や家族にわかりやすく説明し協力を得ることが重要となる。

びょうき

病期

stage of a disease

病気やけがを発症してから、原因疾患による障害の時間的变化を状況によって区分したものである。一般的には急性期、回復期、慢性期（維持期）、終末期に分けられる。

ひょうじょうひょうしゅつ

表情表出

* *

顔面の表情は、表情筋の収縮によって顔表面の皮膚が歪むことにより作られる。また、複数の表情筋が協同的に活動することによって表出される。

びょうたい

病態

pathogenesis

病気の具合。病状や容態、病的な状態をいう。違和感、不快感、痛みなどの症状と区別し、病気へと移行した場合の全体像を病態とよび、総合的評価を要する。

びょうてきろうか

病的老化

pathological aging

生理的老化に比べて病気の影響によって心身機能の低下が著しい場合を指し、老年病や老年症候群が含まれる。

ひょうめんきんでんず

表面筋電図

surface electromyography

筋の収縮に伴う活動電位（筋放電）を表面電極により導出し、アンプで増幅し記録したもの。神経から筋にかけての疾患の有無を判断する生理学的検査のひとつとして用いられる。

ひろうかん

疲労感

fatigue

人間がある機能を発揮した結果、その機能が低下した状態。体調が思わしくないときは、少し活動しただけでも疲れが出やすいが、体調が回復してくると疲れも出づらくなってくるため、疲労感は体調の指標になる。疲労があるときには、そのことに気づき、休憩や休息をとり、ペース配分や組み立てを調整するなどの対処をはかれることが大切になる。焦って無理をすることは、疲労が蓄積して体調に影響を及ぼす要因になるために注意が必要である。

ふえいすすけーる

フェイススケール

face-scale

Visual Analog Scaleのひとつであり、元来は関節リウマチの痛みの評価表として使用されたものである。関節リウマチ以外にも悪性腫瘍をはじめ、痛みの評価スケールとしてしばしば臨床で用いられる。

ふえいでいんぐ(ふえいでいんぐ)

フェイディング

fading

行動変容技法のひとつ。プロンプトを少しずつ取り除く手法。プロンプトと組み合わせてプロンプト・フェイディングとして用いられる。

ふおろーあつぷ

フォローアップ

follow-up

作業療法が終了した後も対象者の変化を追ひ、作業療法の帰結を確認する作業である。作業療法の終了で対象者との関わりを途絶えさせることなく、フォローアップを行うことにより、障害の長期的な推移、生活への影響などを学ぶ機会とする。

ふくごうせいいきよくしょうつうしょうこうぐん

複合性局所疼痛症候群

compex regional pain syndrome

Complex regional pain syndrome (CRPS). 骨折、捻挫、打撲などの外傷をきっかけとして、慢性的な痛みと浮腫、皮膚温の異常、発汗異常などの症状を伴う難治性の慢性疼痛症候群。1994年、国際疼痛学会の慢性疼痛の分類で、RSD(反射性交感神経性ジストロフィー)とカウザルギーがCRPSにまとめられた。

ふくしょうぐ

福祉用具

technical aid for the disabled

福祉機器の総称で、自助具や装具はもとより、ベッド、車いす、ポータブルトイレなど大型の機器も含まれる。

ふずいいうんどう

不随意運動

involuntary movement

意志とは無関係に出現する筋収縮によって生じる運動の総称。随意運動の対義語。

ぶらいまり へるすけあ

プライマリ ヘルスケア

primary healthcare

1970年代にWHOが提唱した保健政策の戦略。すべての人々が社会的・経済的に生産的な生活を送ることが出来る健康レベルを達成するための健康増進・予防・治療・リハビリテーションを含む基本的一次医療を指す。

ぶらすちくそうぐ

プラスチック装具

plastic orthosis

装具の構造すべて、もしくは主な部分が熱可塑性プラスチックで製作された装具。

ぶらんになぐ

プランニング

planning

アセスメントを基に、本人が希望する生活を実現するために必要な、リハビリテーション計画や治療計画を立案することである。

ぶりっじ

ブリッジ

bridge (movement)

背臥位では両足または片足を床につけて臀部を持ち上げる行動のこと。発達過程では5～6カ月頃の乳児にさかんにみられる。歩行に必要な足底での体重支持や股関節の伸展などを学習するといわれている。

ぶれいすーぜんーとれいん

プレイス ゼン トレイン

place-then-train

IPSモデル (Individual Placement and Support Model; 個別に職業を紹介し継続を支援する就労支援の方法) の特徴のひとつで、対象者が仕事に就くために職業準備性を高める訓練を行うのではなく、本人の現在の能力に適した仕事を探索する方法をとる。仕事に必要なスキルや社会的スキル等の訓練は就業した後で行い、働いている場合には当事者や事業主へのフォローアップを行う。

ふれんけるたいそう

フレンケル体操

frenkel's exercises

失調症など固有感覚障害による協調運動障害の治療訓練として考え出された運動療法の1つ。規則正しい反復訓練として、単純な運動から徐々に複雑な運動へと進め、特に体幹、下肢の運動は、重力の影響の少ない背臥位から坐位、立位へと姿勢を変えて行われる。また、原則として、難易度の低い広い範囲の速い運動から難易度の高い狭い範囲の緩徐な運動へと進める。固有受容感覚が脱失している場合は視覚による代償訓練となるが、習熟するに従い最終的には閉眼でも行うようにする。

ぶろぐらむまねじめんと

プログラムマネジメント

program management

同時並行的に進められている相互に関連するプロジェクト群を管理するプロセスをいう。プログラム自体が固定化(マンネリ化)しないよう、対象者・家族・非治療者・ボランティア等の参加により、定期的な検討や評価を行い、内容修正や新たな開発などの見直しが必要となる。

ぶろふえす

プロフェス(造語)

profess

他の人々の役に立っていることや自分たちの技能が一定水準に達していることを広報する活動。ひいては、専門技術者やその集団をプロフェッション (profession) という。

ぶろんぷと(ぶろんぷと)

プロンプト

prompt

行動変容技法のひとつ。補助的刺激 (= 促通刺激, 手がかり) ともいう。弁別刺激のもとでの適切な行動の誘発や刺激を弁別する目的で使用される。

ぶんかきょうか

分化強化

differential reinforcement

行動変容技法のひとつ。強化と消去の原理をもとに、望ましくない行動を減らし望ましい行動を増やす手法。複数の反応クラスが出現した際に、片方の反応は強化し、もう片方の反応を弱化する事を指す。反応クラスとは、何らかの共通する特性を持った反応の集合のことである。この反応クラスのうち、正しい(望ましい)反応だけを強化していくことで、その行動はより精度を増す。強化は好子出現による強化と嫌子消失による強化が考えられる。

へいそくせいかんきしょうがい

閉塞性換気障害

obstructive ventilatory impairment

気道に何らかの原因で閉塞が生じ、気流の通過障害が起きた状態である。代表的な疾患には、肺気腫があげられる。％肺活量80％以上で、1秒率70％未満の場合が閉塞性障害とされる。

へるすぷろもーしょん

ヘルスプロモーション

health promotion

WHOが1980年代後半に提唱した新しい健康観に基づく21世紀の健康戦略をさし、「人々が自らの健康とその決定要因をコントロールし、改善することができるようにするプロセス」と定義される。専門家主導でなく、個人と社会が協同してすべての人びとが、あらゆる生活場面(仕事・学習・余暇など)で健康を享受することのできる公正な社会の創造をめざす多面的・包括的なプロセスを重視する。

へんかんうんどうしょうがい

変換運動障害

difficulty of diadochocinesis

一肢または、体の一部が交代運動、例えば前腕の回内一回外運動や手の開閉を迅速に行えない状態を指す。

べんだーげしゅたるとてすと

ベンダーゲシュタルトテスト

bender gestalt test

児童神経精神科医のロレッタ・ベンダーによって1930年代に開発された心理検査。課題は9枚の図版に描かれた比較的単純な構成の図形を1枚の用紙に模写するというもので、視覚・運動成熟度の評価や発達障害のスクリーニング、神経機能や脳障害の評価に用いられる。

べんべつ

弁別

discrimination

条件づけに用いた条件刺激には条件反応を生じるが、他の似通った刺激には反応が生じないこと。刺激を感じて量や質の観点からその変化や差異を区別できること。

ほうかつてきあぷろーち

包括的アプローチ

holistic approach

「チームアプローチ」と同義語的に使用されることが多い。しかし、「チームアプローチ」の意味合いである職種間の連携によるアプローチというよりも、「作業療法」「理学療法」「薬物療法」などの各職種が行う「アプローチ方法(介入方法)」全体で対象者に介入するというような意味を含んでいる。

ほうかつてきこきゅうりはびりてーしょん

包括的呼吸リハビリテーション

holistic pulmonary rehabilitation

多職種による学際的なチームの連携により呼吸器患者への効率的な治療を展開していくものである。医師、理学療法士、作業療法士、看護師、ソーシャルワーカー、酸素供給業者などから構成される。

ぼうこう・ちよくちようしょうがい

膀胱・直腸障害

bladder-bowel dysfunction

仙髄節の排尿排便中枢と上位中枢(大脳と橋)との伝達遮断等による排尿と排便の障害。

ほうもんさぎようりようほう

訪問作業療法

home visit occupational therapy

対象者が地域で暮らすことを援助するために作業療法士が行う訪問活動を指す。医療・保健・福祉その他の領域で、対象者のニーズに合わせて様々な目的・内容で訪問が行われる。訪問作業療法では、生活の場で対象者を取り巻く環境をアセスメントし、本人とともに自立的な生活をマネジメントする視点が重要である。

ぽーたぶるといれ

ポータブルトイレ

portable toilet

ベッドから離れることはできるがトイレまで行けない、またはトイレまでの移動が不安定な人のために、主として寝室で使用する便器である。便座、バケツ、脚部(台座)、背もたれ、肘掛けなどから構成される。木製椅子式、コモード型、標準型(プラスチック製)、ベッドサイド型などがある。

ほーむへるぷさーびす(きょたくかいご)

ホームヘルプサービス(居宅介護)

home-help service

障害者自立支援法第5条2項に、訪問系サービスとして位置づけられている介護給付のひとつである。入浴、排泄または食事の介護など、居宅での生活全般にわたる援助サービスのこと。

ぽけっとつきしゅかんせつこていそうぐ

ポケット付手関節固定装具

* *

手関節固定装具の手掌部分の固定ベルトに、スプーンやペンなどを差し込むことができるポケットがついている装具で、自助具としての役割ももつ。主にC5およびC6上位レベルの頸髄損傷者に適用され、目的動作に応じて必要な用具をポケットに差し替えて使用する。

ほけんじょ

保健所

public health center

保健所は地域住民の生活と健康に重要な役割を持ち、疾病の予防や健康増進、環境衛生など地域公衆衛生活動の中心となる公的機関である。

ほこうき

歩行器

walker

歩行支援のための福祉用具で、歩行能力が低く、杖などでの移動では耐久性やバランス能力が低い場合などに使用する。歩行器と歩行車の違いは、歩行車は前輪や四輪の車輪やキャスターのついたタイプであることである。

ほごかんさつしょ
保護観察所
probation office

法務省設置法及び更生保護法に基づいて設置される法務省の地方支分部局で、犯罪や非行を犯し家庭裁判所の決定により保護観察になった少年、刑務所や少年院から仮釈放になった者、保護観察付の刑執行猶予となった者に対して保護観察を行う機関である。

ほじしょにんぐ
ポジショニング
positionning

関節拘縮を予防する目的で行われる四肢・体幹の良肢位保持のことをいう。良肢位は頸部・体幹は伸展、上肢は肩関節：外転・外旋、肘関節：伸展、手関節：背屈、手指：手内筋プラス、下肢は股関節：伸展・外転、膝関節：伸展、足関節：背屈、が基本である。

ほすびす
ホスピス
hospice

終末期を迎えた対象者に対するターミナルケア・緩和ケアを実施する施設。在宅でのターミナル・緩和ケアを行う場合には在宅ホスピスという。治癒を目的とした積極的な治療を行うのではなく、身体的な苦痛を和らげながら精神的な支援を行っていく。QOLを支えるという視点から作業療法士が関わる役割も大きい。

ほそうぐ
補装具
prosthetic appliance

「身体障害者福祉法及び児童福祉法」に使われている用語で、種目は義肢(義手・義足)、装具、盲人安全杖、義眼、眼鏡、点字器、補聴器、人工喉頭、車椅子、電動車椅子、歩行器、収尿器、ストーマ用装具、歩行補助杖、座位保持椅子、座位保持装置、起立保持具、頭部保持具、排便補助具などがある。補装具は職業、その他日常生活の能率の向上をはかることを目的としてリハビリテーションの重要な一過程として給付されるものであり、医療用と更生用に二分される。

ほぞんてきちりょう
保存的治療
conservative therapy

自然回復を期待して二次的合併症の予防をはかり、経過を追跡、回復徴候が現れた時点より回復の促進を行う治療。非観血的治療。

ほむんくるす
ホムンクルス
homunculus

元々はヨーロッパの錬金術師が作り出す人工生命体のこと。ペンフィールドらにより脳の機能局在が明らかになりはじめ、一次運動野と一次感覚野の関連を人体の各部位の面積等に反映させた小人をホムンクルスと呼ぶようになった。

ぼらんでいあかつどう

ボランティア活動 volunteer activities

活動を通じて、自身が自身の信望を高めたり道徳的価値を表現したり、また自己安寧といった無報酬の利益をもたらすもの。高齢者にとっては、孤独からの解放、役立ち感、自尊心を高める活動である場合がある。

まつしょうしんけいそんしょう

末梢神経損傷 peripheral nerve injuries

脊髄より末梢の神経損傷で、その損傷程度によりニューロアブラキシア、アクソトメシス、ニューロトメシスと分類される。損傷部位以下の支配筋の麻痺、知覚支配領域の麻痺、自律神経障害を起こす。

まんぞくど

満足度 satisfaction

一般的に個人の望みがどの程度満足しているかを指す。作業療法領域では、COPMのスコアにも採用されており、特定の作業を対象者が、現在のやり方に満足しているかどうかを10段階で回答するようになっている。

みすてられふあん

見捨てられ不安 abandonment anxiety

愛する人、大切な人に「見捨てられるのではないか」という不安で、境界性パーソナリティ障害の患者でみられやすい。マスターソン (Masterson, J,F) が境界例の中心的病理として指摘した「見捨てられ抑うつ」に関連する不安で、治療者へのしがみつきや薬物乱用、非行、性的逸脱行為などの行動化は、この見捨てられ抑うつ、見捨てられ不安を回避する防衛と理解される。

むどう

無動 akinesia

錐体外路疾患による随意運動力の欠如または喪失を指す。運動の開始・実行の困難、運動の切り替え困難を示す。

めんせつ

面接 interview

人と人とが直接的に対面した状況で話し合い交流する過程で目的の実現を目指す行為をいう。面接 (interview) は臨床・教育・研究などに広く用いられる評価手段および技術であり、その種類には、対象の人数により個別面接・集団面接が、面接の手続きにより指示的面接 (質問紙を使用) ・非指示的面接 (自由面接) がある。

もくてき・もくひょう

目的・目標 purpose, goal

目的は、組織や職員全員が進もうとする方向をいう。目標は、組織や職員全員が設定した具体的な到達点をいう。作業療法における目標とは、対象となる高齢者が到達したいとする行動を指す。作業療法士が治療のために行うことを目的とする。

もくてきかつどう

目的活動

activity urpse

身体障害領域において、アメリカ作業療法協会が定めた「作業療法遂行モデル」を基礎とした4段階の連続する治療手段のうちの第3段階に位置づけられ、作業療法の核となる治療手段である。その具体的な活動には摂食、移動などの日常生活活動や仕事、教育的活動などが含まれる。

もくてきしこうてきこうい

目的指向的行為

goal- oriented behavior

刺激－行為－報酬の関係が頻繁に変化する状況では、刺激が示されるとまずこの刺激に結びついた報酬が意識され、次に行為－報酬関係に基づいて行為が選ばれ実行される。

もくひょうしんぱくすう

目標心拍数

target heart rate

訓練を進める上で最も重要な指標であり、最大酸素摂取量の何%で行うかを決定するために用いる。目標心拍数＝(最大心拍数－安静時心拍数)×目標運動強度(%)＋安静時心拍数 で求めることができる。一般的には筋持久力の改善には目標運動強度50～70%、健康維持および全身状態の調整は40～60%を目安にする。

もじゅらーくるまいす

モジュラー車いす

modular wheelchair

モジュラー車いすは各部品がモジュールになっており、目的により部品を選択調整し組み立てられる車いすである。機能としてはアームサポートの着脱、高さ調節、フットサポートのスイングアウェイ等、その場で利用者の身体寸法や座位姿勢に合わせた調整が可能である。

もでりんぐほう

モデリング法

modeling

①新しい技能を修得する第1段階として、②言葉による指示と組み合わせで課題を明確にする手段として、③間違っ課題を行ったときに正しい答えを教えるための修正手続きとして、④モデリング行動を行う人を強化して対象者が同じ行動をするように促す手段として、用いる有効な教示法。

もほう

模倣

imitation

他者が呈示した行動をまねる行動。認知発達や他者との関係についての理解に関する情報を提示する行動のひとつとして重要。既存の発達評価表では乳児期後半に出現するとされているが、近年の研究では新生時期から行動としては認められることが報告されてきている。

もらとりーとめんと

モラルトリートメント(道徳療法)

moral treatment

18世紀終わりと19世紀の始めにかけて精神病院に導入された治療的活動の総称。フィリップ・ピネル(仏:医師)とウィリアム・テューク(英:非医師)の実践が先駆となった。人道的処遇, 人格の健康な部分への信頼, 治療に対する楽観的見解, 思いやりと共感的な雰囲気を基調に, 治療に作業や種々の活動が用いられたことから, 心因を重視した精神療法や心理的效果を目指す作業療法の源流とされている。道徳療法と訳される。

もりたしょうほう

森田療法

morita therapy

1920年頃, 東京慈恵会医科大学の精神科教授, 森田正馬が創始した神経症に対する独自の治療法である。森田自身が神経症的体験に悩んだ経験があり, 人間に本来そなわっている自然治癒力を尊重し, 感情の執着の悪循環を断ち切ることを目標とした。原法は4期(臥褥, 軽作業, 重作業, 社会復帰)に分けられているが, 作業をきわめて重視している。

もんだいかいけつ

問題解決

solving problems

主体が目指している目標に到達するための手段・方法を見出す思考の一部。すべての知的な機能の中で最も複雑な思考にあたり, 高次の要求の認識と定義されている。それには, より筋道の立った手順及び基礎的な知識の操作, 調節が必要となる。

ヤクワリエング(ロールプレイング)

役割演技(ロールプレイング)

role playing

現実の場面を想定し, 複数の参加者がそれぞれの登場人物の役を演じ, 擬似体験を通じてある事柄が実際に起こったときの適切な対応を練習する学習方法。役割演技とも呼ばれる。

ゆうはつきんでんず

誘発筋電図

evoked electromyogram

人為的に末梢神経を電気刺激することなどによって生じた筋収縮を, 筋電図によって捉えたもの。代表的なものとして, H反射, M波, F波, MEP等がある。

よかかつどう

余暇活動

leisure activity

生存に直接関係する活動ではないが, 人の暮らしにおける「ゆとり」や「うるおい」という意味において大切な役割を果たしていると思われる活動。余暇活動に求める楽しみや目的は, ①人との交流を楽しむ, ②心身のリフレッシュ, ③興味・関心を満たす, ことが主に挙げられる。

よくうつきぶん

抑うつ気分

depressive mood

気が滅入る、気持ちが沈む、憂うつ、落ち込む、物悲しい、うつとうしい、寂しいなどの気分状態。うつ病の主症状の一つである。抑うつ気分は日常生活の中で多くの人が経験する。この誰もが経験する気分の落ち込みは1日以内、あるいは長くても2〜3日で改善するが、うつ病の場合には、抑うつ気分が1週間〜2週間と長く続く。

よくどう

欲動

drive

フロイト(Freud, S)が用いた用語で、身体内部の刺激興奮状態を源泉として、一定の方向に向かう圧力に駆り立てられる衝動性をもったエネルギー緊張量であり、一定の対象によってその目標達成(充足)が可能になるとされている。欲動にはドイツ語のTriebがもっている「強いられる」「駆り立てる」の意味が含まれ、圧迫し、動かされるという、内部からの抑えがたい衝動的な性格が強調される。

よごよそく

予後予測

prediction of prognosis

回復の見通しを予測すること。予後予測は疾患そのものだけでなく、機能的・能力的・社会的側面のそれぞれについてデータの蓄積が進められている。現実的なリハビリテーションゴールを設定するために重要である。

よつきゅうかいそうもでる

欲求階層モデル

hierarchical model needs

Maslow(マズロー)が主張する理論。「人間の欲求は階層構造を形成しており、下位のものが充足されるごとに、より上位の欲求を満たそうとする」というものである。

らーんどでいすゆうず(のんゆうず)

ラード ディスユーズ(ノンユーズ)

learned disuse (non use)

学習性不使用。活動を行わないことを繰り返すことにおいて、活動しないことが当たり前の状態であるとして学習し習慣化されてしまうこと。

らいふ きゃりあ

ライフ キャリア(人生の経歴)

life-career

一人の人間が生涯で役割を担い生きていくプロセス。人は、生涯を通じて一つ、あるいは複数の役割を担い、これらの役割の重点の置き方や担い方によって、自分らしさを形成する。Super DEは、人の役割を「ライフ・キャリアの虹」とし、子ども、学生、余暇人、市民、労働者、家庭人、その他の7つの役割とその相互関係を時間軸で表した。

らいふいべんと

ライフイベント(人生での出来事)

life events

人生における生活上の大きな出来事(進学、就職、結婚、出産、死など)。精神面、経済面、活動と参加においての大きな転換期に重なる。

らいふさいくる

ライフサイクル(人生の周期)

life cycle

人生の経過を円に描いて説明したもの。精神分析家で発達心理学者のエリク・H・エリクソンが取り上げてから、広く一般にこの言葉が浸透するようになった。エリクソンは人生を8つの段階に分け、それぞれで解決すべき課題(発達課題)があるとした。(乳児期, 幼児期, 幼児期初期, 学童期, 青年期, 成人期初期, 成人期後期, 老年期)

らいふすたいる

ライフスタイル(生活様式)

lifestyle

生活様式のこと。ただし、ライフスタイルには個人的趣味や生活信条, 特別な日課, 習慣など個性的なニュアンスが含まれる。自分(その人)らしい生活の様式。

らいふすてーじ

ライフステージ(人生の段階)

life stage

人が生まれてから死に至るまでの人生の段階。出生前と出生期, 乳児・幼児前期, 幼児後期, 学童期, 青年期, 成人期, 死と死の受容の段階がある。

らぽーる

ラポール

rapport

フランス語の「橋をかける」という意味で、相手と自分との間に橋が架かっている状態、すなわち心が通じ合い、互いに信頼し、相手を受け入れている状態を指す。臨床心理学の用語として広まり、セラピストとクライアントの間に、相互を信頼し合い、安心して自由に振る舞ったり、感情の交流を行える関係が成立している状態を表す語として用いられるようになった。

りがくりょうほうしおよびさぎょうりょうほうしほう

理学療法士及び作業療法士法

* *

1965年6月に制定された理学療法士と作業療法士の身分法。第1章「総則」では、目的と理学療法と作業療法の定義が明記されている。以下、第2章「免許」、第3章「試験」、第4章「業務等」、第5章「理学療法士作業療法士試験委員」、第6章「罰則」からなる。刑法や保健師助産師看護師法改正に伴い数回の改定が行われており、近年では2001年と2007年に改正された。

りがくりょうほうしさぎょうりょうほうし
がっこうようせいしせつしていきそく

**理学療法士作業療法士
学校養成施設指定規則**

* *

1966年3月30日に、理学療法士及び作業療法士法に基づき文部省・厚生省令第3号として公布された省令である。国家試験を受験するために必要とされる教育内容を定めたものである。

リカバリー(リカバリー)

リカバリー

recovery

精神障害のある人達の活動から生まれ、1980年代後半よりアメリカを中心に用いられるようになった概念で、単に疾病の回復を意味するのではなく、障害をもつ人が態度や価値観、目的や役割などを変化させ、自尊心をもち自分の生活・人生そのものを取り戻すことを意味する。リカバリーの構成要素は、疾患を自分の一部分にしかすぎないと認識すること、自己統制、希望、目的、達成、援助者の存在などで、希望が必須の要素となり、偏見が最大の障壁になるとされる。(→ストレングスモデル, WRAP)

リスクファクター(きけんよういん)

リスクファクター(危険要因)

risk factor

疾病や障害が生じるための条件となる要因。あるいは、その危険率(発症率)が高められる要因のこと。

リスクマネジメント

リスクマネジメント

risk management

一般には「危機管理」と訳される。医療においては、医療事故による医療施設の損害防止、さらに医療事故防止のために医療の質の確保を目指す「質の保証」や、安全管理の意味も含んで用いられることも多い。

リだつしょうじょう

離脱症状

withdrawal syndrome

ある物質を長期に摂取した後で、その物質から離脱することによって起きる様々な症状。アルコールでは手のふるえ・嘔吐・頻脈・発汗・不安・抑うつ・焦燥感などがみられ、薬物では使用時にみられた知覚性の錯覚・離人体験・不安・緊張・幻覚などの症状が現れる。

リハビリテーションしよんこうがく

リハビリテーション工学

rehabilitation engineering

エンジニアを中心として、リハビリテーションに関わる工学的側面を支援する分野。車いす・姿勢保持・自助具・住まいづくり・自動車・コミュニケーション・褥瘡防止装置・義肢装具・移乗機器・特殊教育などの専門部会を持ち、福祉機器の開発に大きく貢献している。日本リハビリテーション工学協会には作業療法士も多く参加している。

リフター

リフター

lift

ISO(国際標準化機構)による用語“lifting aids”に分類される機器で、一般的にはイギリスではhoist、アメリカではliftという語を使用している。日本ではその訳語としてリフト、ホイスト、リフターなどをあて、定義は未だ曖昧である。一般的に使用されている「リフター」の概念は吊り具によって身体を吊り上げる機器を指し、ある場所からある場所へ移乗したり、ある目的動作を遂行するために別の場所へ移動するのを介助、あるいはそれらの動作の自立を援助するものである。設置方法により固定式、床走行式、天井走行式に分類され、操作方式は手動または電動である。

りゅうどうせいちのう
流動性知能
fluid intelligence

新しい学習や新しい環境に適応するための問題解決能力のこと。新しい場面への適応を必要とする際に働く能力のことである。
脳髓ないし個体の生理的成熟に密接に関係していると考えられる。
生得的な知能であり、その場で発揮する。
新規の問題を解決するために自分で方法を作り出し、解決する。(→結晶性知能)

りょうしい(きのうてきしい)
良肢位(機能的肢位)
functional position

四肢体幹の関節がADLの動作時に最も便利な肢位。麻痺や術後の固定のために自動運動が妨げられる状態が長く続き、関節の拘縮が予測されるとき、固定される肢位は回復した後の動きに有効な良肢位とする。手指の良肢位は手関節20°～30°背屈、母指対立位、MP関節、IP関節軽度屈曲位、MP関節の横のアーチ形成の状態で把持に適した肢位である。

りょうてき(じっけんてき)けんきゅう
量的(実験的)研究
quantitative research

特定の現象を数量的に表し、その現象の成り立ちや変化、他の現象との関連性(影響)などを明らかにする研究

りんぱふしゅ
リンパ浮腫
lymphedema

リンパ管やリンパ節の先天性の発育不全、または二次性の圧迫・狭窄・閉塞・切除により、リンパ流の阻害と減少が起こることで生じた浮腫。悪性腫瘍がある場合、リンパ節郭清術や放射線治療、がんのリンパ節転移などの影響により、リンパ流が阻害されて生じる。

るーぷすりんぐ
ループスリング
loop sling

アームスリングの一種。2枚のタオルを半分に折り、長くつなげる。片方をループ状に縫い、一方で調整できる肩関節用簡易装具。

れついはんきゅうしょうじょう
劣位半球症状
nondominant hemispheric syndrome

言語機能が優位な左半球に対して右半球を劣位半球と称する場合がある。この劣位半球の損傷で特徴的に見られる症状を総称するとき用いられるが、確立した症状名ではなく慣習的に用いられている用語である。また、劣位半球症状と右半球症状とはほぼ同意語として使用されている。

れんけい
連携
cooperation

実際の生活場面で複数の職種で行う「共同作業」と現場を離れた場所で関係職種が一堂に会して話し合っ決めごとをする「協業」、そして「地域内・事業所間連携」とがある。

ろうけんしきかつどうのうりよくしひょう
老研式活動能力指標
TMIG index of competence

質問紙法による高齢者の活動能力を測る評価表。手段的ADL, 知的ADL, 社会的活動度を評価する方法として, 1987年, 古谷野らによって開発された。13項目の質問表からなり, 最初の5問は手段的ADLを, 次の4問は知的ADL, 最後の4問は社会的活動度を評価する方法として有用である。

ろうし
老視
presbyopia

加齢により水晶体の弾性が減弱し, 調整能力が低下することにより近くを見ることが困難になった状態。

ろうじんふくしほう
老人福祉法
welfare law for the aged

1982年に成立した法律。国民の老後における健康の保持と適切な医療の確保をはかるため, 市町村が実施主体となり, 疾病の予防や治療, 機能訓練, 訪問指導等の保健事業を総合的に実施するものである。

ろうじんほけんしせつ
老人保健施設
facility of health care
services for the elderly

1986年の老人保健法の改正に伴い制定された施設。要介護老人の社会的入院の増加を背景に, 治療のみでなく看護, 介護やリハビリテーションなどの医療的ケアと生活サービスを提供する施設として, 病院と家庭の橋渡しを目的につくられた。対象は病状安定期にある寝たきり, およびそれに準ずる状態にある老人と認知症高齢者である。

ろうじんほけんほう
老人保健法
health and medical service
law for the aged

1982年に成立した法律であり, 国民の老後における健康の保持と適切な医療の確保をはかるため, 市町村が実施主体となり, 疾病の予防や治療, 機能訓練, 訪問指導等の保健事業を総合的に実施するものである。

ろうねんき
老年期
old age

成人期および壮年期に続く人生最後の時期を, 老年期と総称する。ライフサイクル上の役割の変化に注目すると, 労働からの引退, 親役割の終了, 祖父母の役割の取得などが老年期への移行をもたらす出来事である。暦年齢でみると, 統計上の区分あるいは行政区分等によって対象年齢が異なっている。

わーくさんぷるほう
ワークサンプル法
work sample method

実際の職場における作業に近い作業をサンプルとして用いる検査。①職業能力・作業態度・意欲・持久力等, 諸能力の複雑な相互作用としての能力を把握できる, ②仕事の理解や自己理解に役立つ, という利点がある。

あくと

ACT

assertive community treatment

「包括型地域生活支援プログラム」と訳される。精神障害者の地域生活を支援するケースマネジメントの一方法で、アメリカの脱施設化以降、入院治療に代わる援助手段として1980年～90年代に発展し、日本でも導入が試みられている。たとえ重い精神障害がある人でも、地域で自分らしい生活が送れるよう、多職種からなるチームが訪問（アウトリーチ）によって集中的・包括的に生活支援を行うことを特徴としている。

えーでいーえるひょうかけんさほう

ADL検査法

activities daily living test

狭義のADL評価では、Barthel IndexやFIM が標準化された評価検査法として有名である。また施設特有の評価表を併用することで、対象者個々の問題点に対応している施設もある。

えーでいーえるじりつなんいど

ADL自立難易度

difficulty of ADL independence

ADLにはたくさんの活動が含まれている。それぞれの活動によって必要な技能が異なっている。そのため、疾病によってやりにくさや違いが生じる。疾患ごとの各々の活動を自立度順に並べたものをADL難易度という。ADL難易度は、介入方法を決定するための指標として活用できる。

あんぶす

AMPS

assessment of motor and process skills

アメリカの作業療法士アン・フィッシャーが開発した作業遂行の評価法で、対象者自身が遂行したい・する必要のあるADL/IADL課題を用いて、運動技能とプロセス技能を評価する。評価者は対象者が行う作業の行動観察から、遂行の質を努力性、効率性、安全性、自立性に分けて採点する。採点結果はデータベースのカットオフと照らして判定され、最新版のソフトでは4種類の報告書が作成できる。評価技術を身につけるにはAMPS講習会への参加と10名のデータ提出が必要とされている。

えーていー

AT

anaerobic threshold

嫌気性代謝閾値、または無酸素性作業閾値という。ATは徐々に運動強度を上げていく漸増負荷試験を行い、乳酸の血中濃度を測定し、乳酸値が急激に上昇する地点を指す。したがって閾値測定には乳酸値を測定していることからLT (Lactate Threshold)、乳酸閾値ともいう。ATの運動強度は、心拍予備量の40～60％程度、Borg's Scaleの12～13程度に相当する。

ビーえーでいーえる

BADL

basic activities of daily living

「基本的日常生活活動」と邦訳し、身辺処理活動を指す。移動、身のまわり動作、コミュニケーション、環境機器や器具の操作、性的な表出等、基本的な技能である。IADL (Instrumental Activities of Daily Living) 「手段的日常生活活動」と邦訳し、家事動作、地域における生活技能、健康管理、安全管理等を指す。より高度な問題解決技能や社会技能、環境とのより複雑な相互作用が必要とされる。

べるぐばらんすすけーる

Berg Balance Scale

Berg balance scale

BergらによってADLと関連する項目をもとに作成されたバランス能力評価。Functional Balance Scaleともいう。

びーびーでいー

BPD

borderline personality disorder

境界性パーソナリティ障害のことを指す。妄想性、シイド、失調型、反社会性、境界性、演技性、自己愛性、回避性、依存性、強迫性、(特定不能)の10種類に分類されるパーソナリティー障害のひとつ。思春期または成人期に発症し、不安定な自己-他者のイメージ、感情・思考の制御の障害、衝動的な自己破壊行為などの特徴がある。

びーびーえすでいー

BPSD

behavioral and
psychological symptoms
of dementia

認知症患者においてしばしばみられるような障害された知覚、思考の内容、気分、あるいは行動における徴候、症状をいう。周辺症状や行動障害という用語が広義で多様な意味を持ち、定義するのに困難であるとの議論から提案された。

しーびーあーる

CBR

community based rehabilitation

地域に根ざしたリハビリテーションと訳される。障害を持つ全ての人々のリハビリテーション、機会均等、ソーシャル・インクルージョン(社会的統合)のための総合的な地域開発の中の一つ。障害者自身とその家族、組織や地域社会、そして関連する政府／非政府の保健、教育、職業教育、社会的、その他のサービスの複合された努力を通して実行される。

でいえつつのぶんるい

Dietzの分類

classification of Dietz

がんのリハビリテーションの分類。がんのリハビリテーションを予防的、回復的、維持的および緩和的リハビリの大きく4つの段階に分け、段階ごとにリハビリテーションの目的を示している。

でいーえすえむ

DSM

diagnostic and statistical
manual of diagnosis

米国精神医学会編集による精神疾患の分類と診断のための指針を示したDiagnostic and Statistical Manual of Diagnosisの略。各疾患に5桁のコード番号がつけられ、診断基準が示されている。初版は1952年で以降改定が繰り返され、第3版のDSM-IIIからは多軸診断が採用され、I軸:臨床疾患、II軸:人格障害と精神遅滞、III軸:併発する身体疾患、IV軸:心理社会的・環境的問題、V軸:機能の全体的評価、を記載するようになった。現在は第4版のDSM-IVに修正が加えられたDSM-IV-TR(2000)が発行されている。

いーいー(えくすぶれすど えもーしょん)

EE

expressed emotion

「感情の表出」と訳され、精神障害をもつ人達の主に家族関係における感情の表出をいう。家族の感情表出の研究では、家族が本人に示す対応のうち、批判的コメント(ダメなやつだなど)、敵意(関わりの拒否・攻撃・無視など)、情緒的巻き込まれ過ぎ(本人の言動に右往左往するなど)が、本人の再発危険性を高める事実を示している。この研究は統合失調症を対象として行われたが、現在では神経症やうつ病、摂食障害などでも家族のEEによって病気が悪影響を受けることが知られている。

えふいーえす

FES

functional electrical stimulation

機能的電気刺激の概念は、何らかの原因によって障害された生体の機能を、統御された電気刺激によって、補助もしくは再建しようとするものである。したがってFESは、電気刺激に対し興奮性を有するすべての生体組織が対象となりうる。すなわち、心臓ペースメーカー、呼吸ペースメーカー、聴覚補綴(人工内耳)、視覚補綴、排尿ペースメーカー、上肢FES、下肢FES、皮膚感覚代行などがこれに含まれる。このうち心臓ペースメーカーはこれだけで大きな一分野を形成しているので、FESには含めないことが多い。

ふいむ(きのうてきじりつど評価法)

FIM(機能的自立度評価法)

functional independence
measure

能力低下の重症度および医学的リハビリテーションの治療効果を記述し、伝達する目的で開発された。評価は7段階のスケールを用い、介助と自立間に等級づけを行う。評価項目はセルフケア、排泄コントロール、移乗、移動、コミュニケーション、社会的認知からなり、それぞれ2～6の下位項目がある。

ほーえん・やーののじゅうしょうどぶんるい

Hoehn-Yahrの重症度分類

Hoehn and Yahr disease
rating scale

パーキンソン病患者の能力障害を5段階に分類したものの。Stage1は一側障害のみ、通常、機能障害は軽微またはなし。Stage5は介助がない限り寝たきり、または車椅子の生活を余儀なくされる。

えいちーいーピーてすと

HTPテスト

house-tree-person test

J.N.バック(J.N.Buck)が1948年に開発した投影法の人格検査である。被験者に「家→樹木→人物」の順番で絵を描かせる。検査者はその絵をもとに面接を行い、被験者の感想や自由連想を引き出し、絵に込められた感情や欲求、不安などを共感的に理解する。

あいしーでいー

ICD

international classification
of diseases

国際疾病分類。1900年に国際統計協会が死因分類を制定したのに始まり、以降ほぼ10年ごとに改訂され、第6回(1948年)の改訂より世界保健機構(WHO)が所轄機関となった。ICDは国際的に採用され最新版は1990年の第43回世界保健総会で採択された第10版(ICD-10)である。わが国でも、人口動態統計、患者調査、各医療施設における疾病統計、病歴管理など広範な領域で使用されている。

あいしーゆーしょうこうぐん

ICU症候群

intensive care unit syndrome

集中治療室での治療中に生じる精神状態の異常。死に対する不安や、外界と遮断されて時間感覚を失ったりするため、錯乱状態や昼夜逆転などの症状が出現する。麻酔の影響や術後精神病などが重なる場合もある。集中治療室における効率的な身体の治療と精神的な健康のバランスは難しい問題であり、患者管理の問題として注目されている。

じえいまっぷ

JMAP

japanese version of Miller
assessment for
preschoolers

日本版ミラー幼児発達スクリーニング検査と訳される。感覚運動、言語、非言語的認知能力など、発達全般にわたる全26評価項目で構成され、就学前幼児(2歳9カ月～6歳2カ月)を対象とした発達スクリーニング検査である。検査の原版は1982年に米国の作業療法士Miller L.J 博士によって発表され、日本では日本感覚統合学会がJMAPとして再標準化した。JMAPは発達障害の病理に関する最新の知見を基に評価項目の選定および評価方法を決定しており、学習障害児に関する感覚統合理論の成果も十分に取り入れている。(→感覚統合障害)

けーえーびーしー

K-ABC

Kaufman assessment
battery for children

Kaufman, A.S. & Kaufman, N.L.(1983)によって作成され、日本語版は松原らがK-ABC心理・教育アセスメントバッテリーとして標準化した(1993)。子どもの知的能力を「認知処理過程」と「知識・技能の習得度」の両面から評価し、得意な認知処理様式を見つけて子どもの指導・教育に活かすことを目的としている。適用年齢は2歳6ヶ月から12歳11ヶ月である。

きーまっする

Key muscle
key muscle

損傷高位(機能レベル)を判別するために設定された, 各髄節の機能・非機能を代表しており, 検査の標的となる筋(筋群). アメリカ脊損学会(American spinal injury association; ASIA)ではkey muscleの筋力がMMTで3(fair)以上を神経支配ありと判定している. 頸髄損傷のkey muscleはC5:肘屈筋群(上腕二頭筋, 上腕筋), C6:手伸筋群(長・短橈側手根伸筋), C7:肘伸筋群(上腕三頭筋), C8:手指屈筋群(深指屈筋), T1:手指外転筋群(小指外転筋)となっている. key muscleは作業療法を進めるうえで, 獲得可能なADLを予測する重要な情報の1つである.

えむえーえす

MAS
mobile arm support

MASは, 重度四肢麻痺者のための腕保持用装具でBFOとも呼ばれ, 腕を下から支えて使用する. 前腕と手部を乗せるカフ, 腕を支える近位アームと遠位アーム, 肘の屈伸を補助するロッカーアーム, 車椅子や机に本体を固定するブラケットの部品からなり, 各々部品を接合する箇所には, ボールベアリングが内蔵され摩擦抵抗をなくし, 肩と肘での上肢の垂直, 水平の動きを容易にしている. それぞれアームの長さ, 動き, サイズなどを調節して使用する. 操作は腕の重さとわずかな力, さらに体幹の重心移動を使っで行なう.

えむあーるしー

MRC
medical research council

呼吸困難の臨床的重症度をGrade 0~5の6段階で評価するものである. わが国では, これまでFletcher-Hugh-Jones分類が主に使用されてきたが, 国際的にはMRC息切れスケールが標準的であり, 今後の使用が推奨されている.

えむえすえー

MSA
multiple system atrophy

多系統萎縮症. SCDのうちの非遺伝性タイプの疾患であるオリブ橋小脳萎縮症(OPCA), 線条体黒質変性症(SND), シャイドレーガー(Shy-Drager)症候群の3疾病が統合された疾患名である. 小脳性運動失調症にパーキンソン症状や自律神経障害などが加わる. 誤嚥, 嚥下性肺炎, 声帯麻痺, 呼吸循環障害などによる突然死が多い.

えぬピーおーほうじん

NPO法人
nonprofit (not-for profit)
organization

特定非営利活動促進法(NPO法)に基づいて法人格(民法上の「法人:民法第33条」)を取得した法人をいう.

ピーでーしーえー

PDCA

plan-do-check-act

Plan:計画(アセスメント含む), Do:実行, Check:点検, Action:見直しの略であり, 業務を計画的に進めるための作業遂行方法のひとつである。

ぶるせすぶろふいーる

PULSESプロフィール

PULSES profile

多発性硬化症の能力評価のひとつであり, 日常生活機能評価を6項目で評価するものである. MS障害度簡易評価法の日常生活障害度の基になった評価法のひとつである。

ぱびー ぽじしょん

puppy position

puppy position

腹臥位で前腕支持した姿勢で, on elbowsとも呼ばれている. 子犬の姿勢と似ていることに由来する。

きゅーおーえーる

QOL

quality of life

一般に「生活の質」といわれるが, life の意味が生命・生活・人生・生存など多様で概念規定が難しく, さらに quality の価値観も多様であることから, コンセンサスの得られる定義はまだない. 現在, 健康関連QOLを測定する包括的尺度であるSF-36v2™が開発され, リハビリテーションのアウトカム指標として用いられている. SF-36v2™は, 身体機能, 日常役割機能(身体), 体の痛み, 全体的健康感, 活力, 社会生活機能, 日常役割機能(精神), 心の健康, の8つの健康概念を測定する質問項目から成る。

あーるおーえむくんれん

ROM訓練

range of motion exercise

関節可動域訓練. 関節可動域に制限がある(または予測される)場合に, 可動域の維持・拡大を目的に行う訓練で, 徒手による運動の他, 機器や作業を用いることもある. 可動域制限の予防には他動, 自動介助, 自動運動が用いられ, いずれも関節の全可動域にわたって最低3回ずつ, 朝夕2回行うことが拘縮防止の最低基準とされる. 可動域の改善には伸張運動を用い, 筋力が弱い場合には, 他動運動にて可動範囲の最終域で2~3秒間, 持続的に伸張を加える. 筋力が十分ある場合は自動的伸張運動を用いる. 痛みは筋の攣縮を誘発し拮抗筋も収縮してしまうため伸張運動は痛みのない状態で行う。

そーぷ

SOAP

subjective-objective-
assessment-plan

対象者の問題等を, 主観(Subjective), 客観(Objective), 評価(Assessment), および計画(Plan)で表し記録する方法。

えすえすていー

SST

social skills training

「社会生活技能訓練」または「生活技能訓練」と呼ばれ、認知行動療法の1つに位置づけられる。対人関係を中心とする社会生活技能のほか、服薬自己管理や症状自己管理などを高める練習方法が開発されている。1994年より「入院生活技能訓練療法」として診療報酬にも組み込まれ、現在では医療機関や各種の社会復帰施設、作業所、矯正施設など多くの施設で実践されている。(→認知療法・認知行動療法)

うえるーびーいんぐ

Well-being

well-being

世界保健機関(WHO)の憲章前文にある「健康」の定義にあり、「Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absent of disease or infirmity」で「福祉の状態」と訳される。

らっぶ

WRAP

WRAP

Wellness Recovery Action Planの頭文字をとったもので、日本語では「元気回復行動プラン」と呼ばれている。アメリカの当事者、メアリーエレン・コーブランド(Mary Ellen Copeland)を中心に、アメリカで長い間困難な感情や行動に対処し、元気に生活を楽しむための努力を積んできた人たちのグループによって開発された、「自分が元気であるために、自分自身が作るプラン」である。(→リカバリー)

ざりっとかいごふたんしゃくど

Zarit介護負担尺度

Zarit burden interview

介護者の介護負担感の程度を数量化するためにZaritにより開発された尺度。荒井ら(2000)によると、21の下位項目と、全体を通しての負担感を問う1項目、計22の質問項目から構成されている。質問1から21は、「思わない」(0点)から「いつも思う」(4点)、質問22は、「まったく負担ではない」(0点)から「非常に大きな負担である」(4点)と、5段階で回答し、点数が大きいほど介護負担感が大きいことになる。介護者に対する援助の必要性の評価や、援助効果の介入効果の判定に用いる。